

山 嶽 寮

甲南山岳会通信第60号

2005年10月

甲南山岳部・甲南山岳会

六甲山麓からの便り

鷲尾 顕 (旧15文)

過日、偶々テレビのスイッチを入れると、NHKハイビジョンが「穂高の四季」を放映中だった。嘗て登った峰々が、自分のように年を取らずに湧き立つ雲の周りに見えてくる。山は荘厳にして変らぬが、人は確実に年を加え、山はより遠くなつてゆく。若い日々を豊かにしてくれた山々は今も静かに聳えている。脳裏に果しない思い出が去来する。ロックガーデンの追悼レリーフに収まる日も、そう遠くない。

今年の總會の際、八十周年記念のスピーチで小川守正君が述べた通り、少年時代からザイルを結び合い共に山に登った仲間は生涯の友、年に一度の總會で会えば、甲南時代に戻る。汗をかき息を切らしながらの数々の山行は終生忘れ難く、臉に焼きつく青春の残像である。山岳部時代を回顧し、良き先輩、同僚、後輩に恵まれ、山登りに生きる喜びを與えられた。唯々感謝の念に尽きる。体力の衰えと共に山に登れなくなり、例年の慰霊祭はブラツク迄行けず、残念ながら高座の淹迄が精一杯の有様。歩く速度が遅くなり若い人達に追従出来ない。それでも激しい雨降りでない限り、住い周辺を午前と午後、約三十分位、出来るだけ自動車の通らぬ路を選び歩き、季節の動きを肌で感じ、山の本を買い込み読み耽り、最近 串田孫一著「雲、山、太陽」 岡 茂雄

著「炉辺山話」 加藤泰三著「霧の山稜」を楽しむ日々である。

「人の生涯のある時期における一定期間の心理的長さはその人のその時迄の生涯の逆数に比例する。」とフランスの碩学はジャネは喝破している。具体的に言えば、八十才の時に感じる時間の長さは、その人の十才の時の八分の一に相当する。この年になつて痛感する至言である。

越田和男君の報告によれば、伊藤 愿さんの未亡人房子様を青梅慶友病院に見舞い、その折、愿さんの貴重な諸資料の寄贈申出を受けた由、伊藤房子様に深く謝意を捧げる。伊藤房子様については書き留めておきたいことがある。故加藤弘三さん(旧制12回文卒)のご遺族の所在が、伊藤房子様の幼馴染、小学校以来の友情により判明した経緯を述べたい。1991年物故者銘板レリーフ作製が山岳部創立七十周年記念事業として企画され、ご遺族の住所を調査したが、故加藤弘三さんのご遺族が消息不明のため連絡の手立てもなく途方に暮れていた。甲南時代、ジヤングルム飛騨尾根積雪期登頂(註1)を目指し1935年から37年に亘り白出沢にキャンプを張つた故加藤弘三さんの盟友 喜多豊治さん(旧制12回文卒‘96年12月物故)からは八方手を尽して調べるよう督促の電話が再三あつた。1992年3月物

山 嶽 寮

甲南山岳会通信 60 号

2005 年 10 月

	六 甲 山 麓 か ら の 便 り	鷺 尾 顕		1
	創部 80 周年記念講演 旧制甲南高校山岳部と三つの事件	小 川 守 正		4
ヒマラヤ	きた みなみ			
	ゴークョピーク登頂	福 田 信 三		11
	聖地カイラス山を巡る	南 里 章 二		19
	シャングリラに魅せられて	西 濱 昌 典		24
紀 行	劔 二 股 を 訪 ね て	柏 敏 明		29
追 憶	石渡均先生の思い出	平 井 吉 夫		32
随 想	スイスを愛した日本人と幻の終戦工作	廣 瀬 健 三		34
追 悼	山 田 隆 雄 君	山 本 恵 昭		36
会 員 短 信	総会・慰霊祭への出欠はがきから			37
報 告	定 時 総 会			47
	絵画寄贈について			48
	会 計 報 告			48
	行事報告 秋の集会 木曽福島			49
	慰 霊 祭			50
ホームページから				
	屋 久 島	塩 崎 將 美		51
	甲南山岳会員の著作・翻訳出版の紹介	越 田 和 男		53
	掲示板書き込みダイジェスト			59
	山行とつどい 59	私の履歴書 82	甲南高校学校展 83	
	映画のページ 84	ネパール西濱 85		
	ホームページに部歌が流れます 87			
	甲南高校山岳部夏山合宿報告			88
他誌に見るKAC	香月慶太氏 「山岳」／ 会報ノート 「岳人」			91
現役だより	大 学 ／ 高 校			93

編集後記

山嶽寮の編集をお手伝いして4号になります。折に触れ「こうしたらいいよ」とか「あれ面白いな」などとお声をいただくのは有難いことです。曰く、

「この記事、使う?・・・」

廣瀬さんと前編集長柏さんから。日本山岳会「山岳」の香月さん追悼。

ご執筆越田さんをお願いして原稿をいただきました。原文は縦書きですが都合で横書きでご紹介しました。

生物班OB酒井俊一氏(旧24)からは美田さん経由で甲南高校展資料をいただきました。

学生時代の寄せ書きが出てきたからコピー送ったよ、などのご協力をいただいたケースもあります。使える日まで保管しておきます。私の代で使わなくても次に送ります。

「この頃カットが少ないのと違う?・・・」

前編集長からのご意見。印刷原稿のレイアウトはセッションごとに行数・文字数を変更できますし、写真でスペースを調整するなど余白が出ないような設定にしていまいがちです。文字ばかりでは暑苦しくなりますので適当にカットを入れるように心がけます。

「書き込みダイジェスト、面白いね・・・」

前々編集長南里さんのご感想です。これはもう皆様のおかげです。原稿依頼されると書きにくいけれど、日々の出来事に感想を書き込んだり山行の様子を知らせたり、なんてことなら気楽に出来るワ、と言うことでしょうね。書き込みから要素を拾い集めて山行一覧を作ろうかと思ったこともありましたが、ナマのほうが温かみがあって、関係するものをほぼ原文で転載しています。山行とつどい以外に「これもいいな」が沢山あってついついページが増えます。

「記事まちごうとるで・・・」

細かな間違いはケセラセラですが、時にはえっと思うこともあります。前号の慰霊祭報告、ご参加に廣瀬さんが入っていませんでした。お詫びして訂正(追加)いたします。

事務局井上さんやお世話のメンバーから原稿がまわってくる以外は、編集が集合写真やらスナップの物的証拠とこの頃怪しくなった記憶で対応しています。もれの出ないように集合写真は必ず顔が写る位置に立つ、参加したときは目立つ行動をとるなどご協力を。(ここは冗談です・ウチまじめな人多いから・・・)

これからもご意見お待ちしております。原稿はもっとお待ちしております。

原稿宛先 山嶽寮編集担当 654-0143 神戸市須磨区菅の台 5-3-12-505 大森雅宏
電話/ファクシミリ 078-791-9600 Eメール jh3rxh@f7.dion.ne.jp

山 嶽 寮 第 60 号

発行 2005 年 (平成 17 年) 10 月

編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷

故者銘板が完成し、内見会に際しご遺族の方々に案内状を出し、伊藤房子様はその会合に出席のため、小学校時代からの友人、田村江つ子様（旧制 10 回文卒 故田村寛次郎氏夫人）に神戸の宿の予約を依頼された。田村江つ子様は会合の趣旨を伊藤房子様から聞かれ、折角の機会と女学校時代以来の親友、故加藤弘三さんの未亡人田淵豊子様に早速連絡され、その住所が当方にも知らされ、’92 年 5 月 17 日のロツクガーデン、ブラツクに於ける第 1 回慰霊祭には田淵豊子様、長男の野田純一夫妻も参加されたことは会報 47 号記載の通りである。当日、野田純一様から「母は平素山歩きはしていないので、ロツクガーデン行きに備え約 1 ヶ月前から、住いに近い東山の裏山を往復し、足馴らしに努めた」と伺った。旧聞に属するが、改めて伊藤房子様のご厚情に深く敬意を表し一筆した次第。

昨秋、松本市の旧制高校記念館（註 2）で甲南八十五周年記念の「旧制甲南展」が関係各位の熱意により開催された。山岳部関係の展示は越田和男君より資料の提供あり、穂高、劔等初登頂記録（’97 年七年制高校記念展の際、福田泰次君作製の精緻な資料）山嶽寮創立七十五周年記念号、ロツクガーデン、キヤツスルでの懸垂降下、1936 年運動会における部員のデモンストレーション（註 3）、ロツクガーデン物故者レリーフの寫眞等が掲示され、又卒業年次毎に各界に活躍した 1 - 2 名が「我が友」として選ばれ、田口二郎さんが若き日のヨーロツ

パでのスキーの際の寫眞とプロフィールが展示された。創立者平生鈇三郎さんの略歴と寫眞を展示場の中央に掲げ、建学の精神を解説、1923 年から 1950 年に至る歩み、各部の紹介、「わが師」「わが友」が寫眞を添えて展示。此の度「旧制甲南展」が甲南大学で 5 月 12 日から 5 月 29 日迄再度催され、観覧の機会を持つた。忘却の彼方に過ぎ去つてゆく古き良き時代の甲南を懐旧するには相応しい催しであつた。

私も八十五才となり、他に記憶する方も少いことは書き残したいと願つて文を草した次第。不備、不正確の点あれば文責はすべて私にあるので寛恕を得たい。



（註 1）1939 年 3 月 29 日、伊藤文三君と福井実君によつて登頂を果たした。

（註 2）旧制高校記念館について、年を重ね知る人も少くなつたので説明し参考に供したい。1950 年学制改革により旧制高校は

廃止され、その後松本高校卒業生有志により記念館が 1961 年開館、諸資料が公開展示され、木造の松高思誠寮も廃校当時のまゝ保存されていたが、老朽化により取壊しのやむなきに至り、往時の面影を残すものが減つてゆく一方、旧制高校の資料の散逸が懸念され、旧制高校卒業生有志が諮り、38 校の諸資料を収集し、旧制高校の良さを末永く残し将来に役立てようとの趣旨により、関係者の尽力の結果 1993 年旧制高校記念館が松本市あがたの森に設立された。

旧制高校時代は自由な人間形成を養成する貴重な時期であ

り、各校が伝統と自由溢れる校風を招き、読書に熱中し、スポーツに打込み、友と語り自分の可能性を見出すことに情熱を注いだ。

自由闊達な雰囲気の中にあつて、眞善美に憧れ、勉学とスポーツに勵んだ旧制甲南の校風が現在の甲南大学に繋つていればと思う。

(註 3) 当時、運動会（今の体育祭）は終幕に各部員がそれぞれの服装でグラウンドを一周するのが恒例となつていた。

2005.6.12 記



運動会 デモンストレーションのスナップ（昭和 12 年）

創部 80 周年記念講演

旧制甲南高校山岳部と三つの事件

小 川 守 正 (旧 17 理)

旧制 17 回卒業生の小川でございます。この頃山登りも全然やっておりませんし、山岳会でお話するようなことはないんですけども、この間、夜一杯飲んでましたら雨宮さんから電話かかってきて、「ちょっと話してくれませんか」。ついうっかり「よっしゃ」と言うてしまって。何にも用意しておりませんが、仕方がないのでビールを 3 杯飲んで元気をつけて、皆さん方の前に出てきた次第でございます。30 分ほど取り留めのない話をさせていただきたいと思います。



まず、大学山岳部が再生したことを本当にうれしく思います。武田君それから中高にまた新しく山岳部を作られました神戸先生に心から感謝申し上げます。有難うございます。

山岳部というところは沢山の仲間が年代をこえて長い 1 本のザイルでアンザイレンしている

グループですね。ところが大学山岳部が消えそうだというんで、そのザイルが切れるのではないかと非常に寂しい悲しい気持ちになっておりました。ですが今日ここに若い 5 人の方が現れて、また中高から進学してこられた方が山岳部に入られたと聞き、本当に心から喜んでいる次第でございます。

私、理事長をしておりましたときに、甲南のいろんな運動部に招かれて挨拶に行ったりしましたけれど、山岳部・山岳会のように和気藹々と沢山の人が集まっているのはまずないですね。旧制と新制の人は大抵対立してますね。山岳部だけが上は 90 歳から下は 18・9 歳までこうして一堂に会してひとつの違和感もなしに一杯飲んでいけるのは本当に楽しく嬉しいことだと思います。皆さん方も年を経るに従ってたとえ山に登らなくなっても、だんだんだんだん心の中に山岳会・山岳部がウエイトを占めてくると思います。

私も五つか六つ同窓会・OB会に入っているんです。会報なんかまず見ないんですが、山嶽寮だけは心が若やいで弾んだ気持ちで、まずあれを手にとったら全部読みますね。山岳会・山岳部ならではのこととを感じる次第でございます。

私、甲南の理事長を辞めましてから平生さんの研究を始めまして、今までに平生さんの本を

二冊書きました。最近平生さんの政治活動というのをずっと調べてみまして、大変面白いことを色々発見しました。5月の末に「昭和前史に見る武士道（続平生伝）」を出しますので、割引いたしますから買っていただけたらと思います。また甲南学園 80 年記念事業として平生さんの膨大な日記の翻刻を取り上げました。翻刻といいますが非常に難しいんですね。毛筆で書いた英語の単語をいっぱい書きこんでいるのと、それから平生さん漢字を作るわけですね。「つくり」と「へん」と適当に組み合わせて、平生流の漢字、いわば平生字を作っておるので仲々難しいものです。

古文書の好きな先生を 6 人ほど雇って、6 年がかりで 5 千万円のお金を投入して最近ようやく完成したようです。これは各大学の社会学部とか日本史研究室さらに宮内庁からも要望されてのことでした。それだけ値打ちのあるものです。

これ読みますと大変面白いのは、平生さんの政治活動というのは文部大臣の時だけかと思ったら、昭和のはじめから太平洋戦争始まるまで猛烈にやってるわけですね。私もびっくりしました。例えば日独同盟、日独伊同盟がありました。その時平生さんは日鉄の社長だったのですが、『ヒットラー・ムッソリーニの如き破落者ファシストと結んではならぬ。そんなことしたら日本は滅びる、日本は中国と和解して独自の道を歩むべきだ』と猛烈に反対します。だがその頃はもう正常な政治活動ができない時代でした。そこで平生さんは驚くべき行動に出ます。『日独同盟反対だ。ドイツやイタリーと結ぶよりも中国と結ぶべきだ。そのためには宇垣一成を総理大臣にすべきだと』と湯浅倉平内大臣に面談、天皇に直訴しました。

当時の総理大臣というのは、元老重臣が推薦した人物に天皇陛下が大命降下制度でした。その重臣を差し置いて、一民間人が反陸軍のドンともいうべき人物、宇垣一成を総理大臣にせよと天皇陛下に直訴したわけですよ。もし、それが軍部に知られたら殺されたでしょうね。そういう時代だったのです。湯浅内府がどう処理したか分かりませんが、後に『平生鈇三郎という人は、今時の政治家に見ない忠誠滅私奉公の人物だ』と語ったそうです。非常に感動したんだと思います。

平生さんといえば甲南ではラグビー部を非常に支援した、ラグビーが好きだということになっているんですけど、実は山登りも好きだったんです。ラグビーは見に行くほうだったんですが、山登りは自分でやっています。いま私達がいるこの場所は、かつて平生さんの自宅がありました。私も高校生の時に、平生さんの家に学校のことで何回か押しかけて行ったことがあります。大きな洋館で、いつも拾芳会という平生さんの内弟子みたいな書生さんが 5・6 人いました。それで家が大きかったんです。その拾芳会の人と奥さんも子供さんも入れて、10 数名で隊伍を組んで、その当時は勿論ロープウェイとかそんなのはありませんから、自宅から歩いて、年に 4 回六甲山に登っておられます。今と違って、その当時六甲山には冬相当雪が積まりました。すずさんという平生さんの奥様、でっぴりした恰幅のいい方でしたが、魚屋道を登って行っておたふく山の辺の吹き溜まりの中に、スッテン転んで、引っ張りあげるのに大苦勞したという話も聞いています。

それで平生さんはラグビーは観賞するほう、山登りは自分でやるほうということで、非常に

山が好きだったようです。旧制高校のときに山岳部は3回大変なことを起こして、本来ならばそこで解散とやられるところですけど、そうならなかったのはそのお陰かも知れません。次にその3つの事件の話をしましょう。

白亜城事件

ひとつは、白亜城事件です。

昭和9年です。丁度私が入った年ですけど、9名の甲南の生徒が、治安維持法で検挙されました。治安維持法というのは、もともと、天皇制と私有財産の政治体制を変更しようということに対する処罰だったんですけど、対象を左翼から自由主義思想まで広げ、引っかけたら最低懲役3年から死刑という、強盗殺人並みの法律でした。甲南関係者は勿論のこと世間も驚く大事件です。新聞にも大きく報道されました。

当時、旧制高等学校は全国で34校、そのうち20校位で治安維持法で検挙されています。当時の旧制高校はそういう雰囲気があったようです。当時の日本は非常に貧しくて、農村が疲弊して、特に東北の農村では欠食児童とか娘の身売りだとか、一家心中などそういうことがあって、正義感に溢れた青年がマルクス主義へ奔るというのが、特に旧制高校が多かったようです。当時は旧制高校の定員と帝国大学の定員がほぼ同じだったので、特別の、東大の法学部とか工学部を狙わん限りは、どっかの帝国大学に入れた。まあそういうようなことから、旧制高校の生徒は入試のことなど余り考えずに非常に自由なものを考え、正義感に溢れる若い人がマルクス主義に奔るという雰囲気がありました。帝国大学に入ってしまうと就職の事もありそういう運動は余りなく、高等学校の方が激しかったですね。

まあ若い十代の学生のことですから治安維持法で検挙され本当に懲役や判決を受けた人は比較的少なかったようで、勿論死刑になった人もいません。だがそれよりもっときつい処罰があったわけですね。それは治安維持法で引っかけたら学生は放校。退校よりもっときついわけです。企業で言うたら懲戒解雇に当たるわけですね。検挙はされなかったけれどそれに関連しているものは説諭退校、まあ自主退社。そこまで行っていないマルクス主義研究会に出席していた程度の人でも除名。除名されたら退校と同じです。これは治安維持法で刑罰食らうより当時としてはきつかったわけです。

それで20校の高等学校では、治安維持法に引っかけたあるいはそういう研究会に参画しておった人は放校・退校・除名を食らっているんですけど、甲南だけは平生さんがいたのでそういう処罰はありませんでした。

また当時は、治安維持法で検挙されると釈放条件として転向声明書に署名捺印しなければなりませんでした。マルクス主義は間違っていました、私の考え間違っていました、一切捨てますという誓書です。平生さん自分の保証で9名貰い受けてきました。けれど転向も強要せず声明もとらず復学させました。

今日おいでになっていませんが、当事者の一人 関 集三先輩のお話では、平生理事長と伊藤忠兵衛理事が、治安維持法にかかった9名を面接して、『思想にはいろいろある。沢山の思想がある。マルクス主義はその一つだ。学生のときは沢山の思想を勉強せよ。マルクス主義ひとつだけ勉強してこれが真実やと言うのは間違いだ。沢山勉強して卒業して一人前になってから、やっぱりマルクス主義が正しかったというのならそれからやったらいいじゃないか。実践活動だ

けはやめよ、沢山の思想を勉強せよ』とそれだけの条件で全部復学させて卒業させたんですね。

これには警察も文部省も驚いて、非難轟々でした。それよりも驚いたのは父母の会で、父母の会が総会を開いて、怪しからん、われわれは息子を、当時は男子校でした、息子を平生さんを信頼して預けたのにそこから共産主義者が9名も出ている、それが警察から帰ってきたのを処罰もせずに復学させとる、平生校長けしからんと、父母の会が抗議してくるという事になりました。平生さんは、だめだ、あれは私の生徒だと取り合わず、復学させて全員卒業させました。その中から日本の物理化学学界の泰斗 関教授も東大物理科の山口省太郎教授も生まれたのですね。

それが白亜城事件。当時甲南は緑の山を背景にして、白い3階建ての建物だったんで皆白亜城と称して自慢しておったんです。白亜城事件というのはそういうことです。

甲南高校の9名の検挙者のうち7名が山岳部だった。通常なら山岳部は解散を命じられるところです。ところが平生さん、山岳部解散を命じてない。山岳部は山岳部で続けて行けと。ということで、長いアンザイレンは切れずにすみしました。平生さんのお陰ですね。

教練延長時間反対事件

それから2番目は軍事教育。

だんだん戦争が、日中戦争が進んでくると、軍事教練が盛んになってきて、教練の時間も増えてきた。そういうときに学校教練の時間延長反対だと。学力が低下する、もっと勉強すべきなのに軍事教練の時間増は反対だと。という反対運動が起こって、そのリーダーこそ今日ご出席でそこに居られる奥山先輩だったんです。

ロックガーデンでキャンプを張ってテントの中で学校教練時間延長反対のガリ版を刷ったんですね。全校生徒に配られて私らも見たんなんですけれども、筆跡でいっぺんにばれてしまったのですが、当時はそういうことでも退校・放校処分ということだったが平生さんはやらなかったわけですね。

平生さん自身は熱烈な国家主義者なんですよ。明治天皇を神のごとく崇拝している人です。明治天皇が明治45年ご病気になられた時、平生さんわざわざ会社休んで伊勢神宮と熱田神宮へ明治天皇の病氣平癒を祈願に行っているくらいです。そういう人なんです。しかしながらここが平生さんの偉いところで、自分はそういう思想を持っているけれど人には押し付けることがなく、行動においては戦う自由主義者であることを貫かれました。

そういうことで白亜城事件も山岳部、学校教練反対のも奥山先輩がロックガーデンのキャンプの中で刷ったというわけですから、山岳部が主導したみたいな格好になったと思います。それでも山岳部をつぶしませんでした。

(ご出席の奥山先輩より声あり『私はその後、東大でも同じような事をやりブタ箱に入れられ、そのため就職が出来ず、平生さんに相談したところ鉄鋼統制会に入り、平生さんの下で働くことになりました』)

報国団反抗事件

それから最後に昭和16年になってから、校友会を解散し報国団に編成変える大事(甲南の自治の終焉)が起りました。

そのときは平生さんは日鉄の会長になり甲南からはなれており、天野貞祐という京大の教授が校長代理になっておりました。

天野貞祐は早速、甲南の個性尊重と自由主義はまちがったと、全体主義こそが今の時流に適したものだということで、校友会を解散して、報国団というのに編成替えしたわけです。

その当時私が山岳部の委員長やったんですけども、昭和16年の4月の10日ころの授業のときに、『本日から校友会を解散して報国団にする。学生自治組織は一切禁止する』との布告がなされて突然学生にもOBにも何の相談もなしに交友会は解散になりました。

そして『一切卒業生OBとの交流会を開いてはならん。卒業生と現役とは教育方針が違う。個性尊重自由主義時代に育ったOBと、これからの甲南生は違う思想で行くのだから接触することは相成らん』、まあ天野貞祐はそういう人だったんです。

当時全校生徒500人ですけど、山岳部員は30人おったんです。昔はもっと多かったんですよ。今日甲南大学1万人の学生で山岳部5名ということで、話は途中でですけども、5名ではちょっとやっぱりね。続いてゆくのは10名が必要ですね。皆さん5名の方、もう一人ずつ仲間を呼んできてください。10名になるとひとつのグループとして強くなります。ぜひ5名の方が一人一名ずつでとりあえず10人の山岳部を作って欲しいと思います。

話を先にもどします。

話が前後しますが私のクラスでの校友会解散通告の様子をお話しましょう。昭和16年4月のはじめのドイツ語の授業の時に説明を受けたんですが、『ラグビー部とか柔道部とか剣道部など今迄の部はそれぞれラグビー班、柔道班、剣道班と班になり、今までは生徒の委員長（山岳部の場合はチーフリーダーという名前をとっておりました）はなくなり先生が班長になる、今

迄の委員長は班長助手に任命』ということでした。ところが説明の中で山岳班が出てこない。中島先生が読み落としたのかと思って、山岳部はどうなりましたかと聞いたところ『山岳部は冒険旅行班になりました』とのご説明。

ザイルにぶら下がってピトンを打って岩登りしようとするのは冒険に違いないが、冒険旅行とは人を馬鹿にしている。山岳班であるべきだと言いましたら、いや剛健旅行班です、とのこと。冒険旅行ではなく剛健旅行。剛健旅行で何するんですか、と問うと『鉄砲かついで山野を行軍するんです』とのご説明。

当時学校には三八式歩兵銃が、全国の中学高校にはありました。甲南にも200挺ほどありましたから、あれを担いで山野を行軍旅行する、そういう班になったわけです。それでクラス全員がどっと笑いましたが私は怒りと屈辱でふるえましたね。

話はさっき前後しましたが、先輩に訴えたんですけども学校がOBと絶縁するということですからどうにもならん。それで全部員団結して、学校に反抗しようということに決めました。そこへ班長の松井先生（地理の先生）が説得に來られました。この先生には大変世話になったんですけども、先生は『積雪期登山だとか岩登りだとかアルピニズムだとかそんなことぐじゃぐじゃ言わずに学校の方針に従ってくれ。国家非常の時だ、これは文部省の方針でもある、鉄砲かついで行軍してくれ』。

松井先生は非常にまじめな先生で、声涙溢れるような説得でしたがこれだけは承知できなかった。誰も黙して応えない。それでも松井先生は、小川君どう思うか。国府君（ここにおいての国府先輩の弟さん）どう思うか、と一人ひとりに問いかけられましたが黙して応えない。

我々は長年世話になった先生に三下り半を叩きつけたわけです。山岳部の自主性を守るために真に止むを得ないことでした。その松井先生も激昂してなにか大声で叫んで部室を飛び出して行ってしまわれました。深刻な状態になりました。だが全員やっぱり剛健旅行はいやだ、鉄砲かついで山野を歩くのはいやだ、我々は先輩から受け継いできたアルピニズムで行く、こう決めたわけです。

亡くなりましたけれどクラス代表(級長です)で、学校に信用のある小林大二郎君というのが山岳部におりましたので、おまえ生徒課長に『山岳部は新体制には報国団には賛同しない、山岳部は独自に続ける、学校の方針に反抗する』と通告してくれと嫌な役を押し付けました。

生徒課長の寺井教授という方は甲南始まって以来の凶暴な先生で、口よりも手のほうが早く、生徒を殴ること日常茶飯事、あだ名はジェロニモでした。

小林君は殴られて鼻血でも出して帰ってくるだろう、それから全員退校処分にするということになるだろう、どうしようかと相談していたところ、意外なことに小林君は無事で、寺井先生からは『そうか、勝手にせい』との返答をもらって帰ってきました。

この辺はやっぱり甲南の旧制の先生の面白いところですね。まあこれが甲南の自由主義の最後の証だったかと思います。その代わり直前に獲得した800円あった部費は没収されました。このお金は銃剣術班とか国防研究会とかが新しくできたので、それにまわしたらいいんですけども。

勝手にせいということになりましたが今更山岳班という名前にするわけにもいきません。報国団に反旗を翻したわけですから。

それで思い切って、KONAN ALPINE CLUB と名乗ることにして横文字の看板を部室に掲げました。当時は横文字は排斥して英語の授業も少なくしようというような時代でした。KACを反抗の旗印にしようということでやったんですけども、そのまま学校当局は何も言わずに、私らの卒業するまで行ってしまいました。

まあこの甲南の旧制高校の歴史の中で、白亜城事件、それから先ほどの学校教練時間の延長の反対、最後に報国団に反抗した事件、3つの大きな事件を起こしたんですけれども、山岳部は別に処罰されずに来ました。

これはやはり平生さんの、学生の自治を尊重するという甲南の精神が、天野貞祐のもとでもやはり甲南の中には生きておったんじゃないかと思いますね。

それから戦争がだんだん激しくなってきたら、報国団もALPINE CLUBどころやなしに学徒動員やら軍需工場への動員になってしまって、自然消滅してしまいました。だが山岳部は戦後直ちに復活、さらに新制大学になって阿部君なんかがやってくれて、大学山岳部ができて長いアンザイレンが続きましたね。

振り返ってみて、私は山岳部こそ甲南の自由主義の中核であった、こう思います。

皆さん方も、またいま新しく入られた5人の方も、山岳部というのはそういう甲南の設立の趣旨である自由主義の申し子であるとお考えいただきたいと思いますね。

大学になってから戦後の民主主義の時代になりましたが、山岳部は若い人の山ばなれという更なる困難に直面しています。どうか若い人の力で長いアンザイレンを続けていっていただき

たいと願っています。そういう意味で先ほど、とりあえず部員 10 人ということをお願いしたわけです。

なぜ山岳部がこうして続いてきたかという、私はやはり山岳部というのは、また山登りというのは、普通の運動部やなんかにはない、深い、心からの人間と人間の友情の上に成立している、こういうスポーツだと思うんですね。



先ほどの3つの事件の話をしました、勿論山岳部は全部が反抗運動、左翼運動をやったものではありません。山岳部の主流はやはり設立者の香月さん、ここで言えば国府先生それから鷲尾さん、こういうまともな紳士を中心として、それから、左のほうと左と反対のアウトローの人も山岳部には常に何人かおりました。しかしそういう全うな紳士と左翼とアウトローと渾然一体となってひとつの友情が結ばれておりました。ふつう左翼の人は右翼を憎悪し、また右翼は左翼の人を憎みますね。同じ家族の中でもそういう憎しみがあるほど激しいものです。しかし山岳部は極端に幅の広い中で憎しみどころか強い友情でむすばれておりました。ですからアウトローで途中で甲南をやめていった人も甲南山岳会員です。常に山岳部の人は強い友情で結

ばれておったと思います。また甲南を退校した人も深い友情で山岳会を思っておられたと思います。そういう集団であつたからこうして、甲南の中でもっとも甲南らしいグループとして、幅が広い、終生忘れることのできないグループが出来上がったと思いますね。

私はそういう意味で、山岳部におつたことはまことに幸せであつたと、人生色々ありましたけれども、山岳部にこうして最後までおつて、深い喜びと充実感を持っております。

山岳部・山岳会で、最高年齢の人は90歳、若い5人の人は10代ですかね、70年以上の差がある人間がこうしてひとつの心のザイルで結ばれているというのが山岳部だと思います。

最近山に登っておりませんので、山の話はできませんでしたが、まあそういうことを最近ころから深く感じて、毎年この総会と山嶽寮の本をいただくのを楽しみにして、生きております。

それから山岳部を作られた香月さん、こういうグループを作られた何百人の人に心から感謝して、この山岳部・山岳会が永久に続くことを心から願って、今日のお話にさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

2005年(平成17年)4月23日 山岳会総会での録音をもとに一部加筆されたものです。

編集

兵庫山岳連盟の恒例となったヒマラヤトレッキング、今回はエベレスト街道からゴーキョへ、そしてゴーキョピーク (5,360m) 登頂を目標としたものである。昨年は、1956 年に日本隊マナスル初登頂の時と、ほぼ同じマナスル街道を往復した。しかし、谷が深いために山を望む機会が少なく、歩き出して 6 日目にやっとマナスルが見えたが、それも長続きはしなかった。しかし、今回、ゴーキョピークからは 8,000m 峰 4 座を一度に見ることが出来、更に歩き始めから 6,000m、7,000m 級の峰が次から次へ見えるという、価値のあるトレッキングだった。特に、小生のようなビギナーにとってはありがたいコースであった。



ルクラへの DHC-6 よりヒマラヤの山峰

では、カトマンドゥから目的地のゴーキョピークまで、日記風に紹介しよう。

第1日目 (11月2日)

カトマンドゥ→(軽飛行機で約 30 分)→ルクラ (2,840m) → 7.4km →パクディン (2,610m)

ハイヤットリージェンシーホテルを 7 時出発、空港まで 10 分。カトマンドゥ国際空港の端に国内線ターミナルがあり、各国からのトレッカーでごった返していた。ボディチェックは厳しく、男女を分けて入念にやられた。少し天気が悪くても飛ばないと聞いていたが、快晴の朝、8 時 13 分に 20 人乗りのプロペラ機 (Twin Otter DHC-6) は予定通り飛び立った。窓からはヒマラヤの峰々が見え、その素晴らしさにこれが世界の屋根といわれる所以が判りヒマラヤに来了実感が湧いた。山間を抜けて約 30 分、猫の額のように狭いルクラ空港に着陸した。気流も安定していたのだろう、殆どゆれは無く山容の絶景を楽しむことが出来た。空港ではガイド、シェルパ、ポーターたちが出迎えてくれた。昨年同行した見覚えのある顔を見つけたときは、懐かしくホッとした気分にもなった。とりあえず、集落の中心部まで下りロッジ (Tasidaro Rodge) に入って昼食をとり、自己紹介も行った。

ロッジの裏庭では荷物を水牛にくくりつけて、出発の準備をしていた。前回はポーターが荷物を担いだが、今回は大半を水牛に頼った。1 頭当たり 3-4 人分の荷物を縛りつけた。この裏庭からはコンデリ (6,187m) を仰ぎ見る事が出来た。昼食後、いよいよトレッキング出発である。約 2 時間でガット (2,492m) の到着。ルクラから 350m 下ってきたことになる。帰りにはこの上りがこたえるだろうと、ふっと思った。更に 1 時間ほどで今日の目的地、パクディン (2,610m) のサンライズロッジに着いた。

コースの標高はまだ 2,000m 台のために、コー

スは森林を通り抜け、ガットからは川の流れを見ながらのハイキング気分だった。そして、コンデリは勿論、クスムカンゲール3峰の西峰 (5,579m) も見ることが出来た。明日の目的地、ナムチェまではエベレスト街道となるためか、トレッカーの往来が激しい。「ナマステー」の挨拶が飛び交う。日本人との出会いは非常に少なく、英語、ドイツ語、フランス語をよく耳にする。日本人との大きな違いは年齢で、日本人は熟年組が殆どであるが、欧米人はもっと若く20~40代であった。このあたり、国による年間休暇日数の違いを知らされた。

第2日目 (11月3日)

パクディン (2,610m) → 8.0km → ナムチェ (3,440m)

今日も快晴、気温 15℃ 6時起床、7時45分出発。今日の目的は、街道最大のバザール、ナムチェ。途中 2 箇所、エベレストを遠望することの出来る地点がある。パクディンの集落を出て直ぐの所に大きな吊り橋があり、それを渡ってドードゥ・コシ河の右岸を歩いていく。ベンカールに近づく頃、前方にヒマラヤ巒の美しいタムセルク (6,608m) に出会う。この峰は、今回のトレッキング中で、後述のアマダブラム (6,856m) と並んで最も印象に残った峰の一つで、その姿はエベレストよりもはるかに美しいと感じた。

このあたりの道幅はかなり広く、楽に行き交うことが出来る。ただ、牛との行き交いは、一歩下がって通り過ぎるのを待たなければいけない。2時間半ほどでモンジョ (2,840m) の先にあるサガルマタ国立公園ゲートに着いた。この公園は広さ 1,148km²でネパール東北に位置し、世界遺産に登録されている。因みに、サガルマタはエベレストのネパール語である。ここでいくばくかの入園料と手続きをしてゲートをくぐった。このような雑事も、全てシェルパ任せで何の心配も要らない。ゲート

より 30 分も歩くとドードゥ・コシ河の本流にかかる吊り橋を渡る。直ぐに急な坂道となり、ナムチェまでの3時間あまりの上りである。ナムチェの気配を感じる頃、街道脇の松林の合間から、エベレスト、ローツェを望むことが出来た。同時に、後方にはクスムカンゲール3峰の主峰 (6,367m) を見た。歩き始めて2日目でエベレストを見ることが出来るなんて、このトレッキングは実に興味深い。更に 30 分ほどあえぎながら急な坂道を登っていると、目の前に馬蹄形のすり鉢状の斜面にへばりついたような、ナムチェの集落が見え始めた。数多くの建物が急斜面に建っており、それもあり大きなホテル風でカラフルなペンキで彩られていた。30,000 人以上はいるといわれているシェルパ族の大半が、ここナムチェに住んでいるようだ。



ナムチェバザール

カンニ (仏塔門) を通り抜けると左におおきなチョルテン (仏塔) がありタルチェ (お経を書いたのぼり) がたなびいていた。タルチェはこの先いたるところに見られるが、風に一回たなびくと、書かれたお経を一回読んだことになる、言い伝えられている。何かマニ車に共通したところがある。マニ車には主に観音の真言が何千何万回と書かれており、心身込めて回せば回した分量の真言を唱えたことと同じ功德があるといわれている。更に

最近では水力式自動マニ車も多く見られが、この場合どのくらいの功德になるのであろう。14 時 40 分タワン (Thawan) ロッジに到着。

第3日目 (11 月 4 日)

高度順応 エベレストビューホテル (3,880m) 往復

6 時起床 晴 4℃ 7 時 37 分出発。バザールの急な坂道を登り稜線に出ると、1 時間ほどでシャボチェ飛行場に出る。ビューホテルまで約 30 分。9 時頃到着。このホテルは日本の宮原巍 (タカシ) 氏が社長の、ヒマラヤ観光開発(株)が経営している本格的なリゾートホテルである。宿泊費もかなり高価で、予約もとりに難いと聞いていたが、ロビーは閑散としていた。早速テラスに出てビールを注文。



エベレストビューホテルからの
エベレスト、アマダブラム

エベレスト (8,848m)、世界第4位の高峰・ローツェ (8,516m)をはじめ、鋭い三角形のタムセルク (6,623m)、白い馬の鞍・カンテガ (6,685m)、母の首飾り・アマダブラム (6,812m)、エベレストの左にはタウチェ (6,501m) などの山々がずらりと見渡せた。青い空に白い峰々は目にまばゆい。峰々の写真を直接撮るもよし、ホテルの窓ガラスに映った峰を撮るのもよし。さすが、ヒマラヤの展望所といわれるだけのことはあった。そして、パノラマの中のビールは最高のものだった。出発 10 時ま

での 1 時間、まさに至福の一時であった。

11 時過ぎ、ナムチェに戻った。午後は、チベタン・バザールを冷やかしたり、みやげ物を物色したりして過ごした。広い運動場のような広場に通路を残してびっしりと商品を並べている。これらは皆ヒマラヤを越えて持ってきたものだ。彼らは TENT を張って自炊、つまり生活しながら商売している訳だ。毛布、衣服、敷布などの布類、それも色彩は非常に派手な柄もので日本人好みではない。周辺の集落から多くの人と物が集まる本来のバザールは毎週末に開かれるとのことだ。私は向かいのインターネットカフェから日本へ電話をした。1 分間 150 ルピーだった。バザールは、イタリアンレストラン、マッサージ、ベーカリーなどの都会風の店がみられ、場違いに感じられた。このままいけば、カラオケの出店も近いだろう。

第4日目 (11 月 5 日)

ナムチェ (3,440m) → 3.5km → ターモ (3,480m)

予定では目的地がターメ (3,840m) であったが、明日の行程がかなり厳しくなるために、手前の 3.5km 手前のターモに変更した。

6 時起床 快晴 4℃ (室温) 8 時 00 分出発、ロッジの庭先で、チベット仏教のトランペットのような大きな音で起こされた。短い距離のため、11 時 00 分にターモのターマロッジに着いた。途中で学校の前を通過する時、生徒達、主に小学生から中学生、がはしゃいでいた。その学校にボランティアで先生をしている夫婦もロッジに同宿で、学校の生徒の靴の購入のための寄付を依頼された。どこへ回るか判らない寄付ではなさそうなので、夕食時にみなへの寄付を募った。そして、彼女に渡した。大変な喜びようで余ったら文具を買いいたいとのことだ。後日談として、その夫婦よりお礼のメールがあり、添付に購入した靴や歯磨きなどの写真

があった。

午後から、数人とターメへ出かけた。ターメへの道はヒマラヤを越えて（ナンパ峠 5,716m）チベットへ通じる交易路である。目の前にコンデリ（6,110m）、背後にタムセルク（6,608m）を見ながらの贅沢なトレッキングである。



タムセルク

特にタムセルクのヒマラヤ麓の現物はどの写真集よりも鮮明でその緻密さに驚いた。ターメには1時間ほどで着いた。広い高原のような地形で数軒のロッジと民家、そして高台の岩壁の下に寺院が見られた。又、ここにはオーストラリアのNGOが建設した水力発電用のダム湖がある。電力はナムチェまで供給している。そのため、ロッジではテレビのつけっぱなしで、画面では男女の掛け合いの番組がいつまでも続いていた。

第5日目（11月6日）

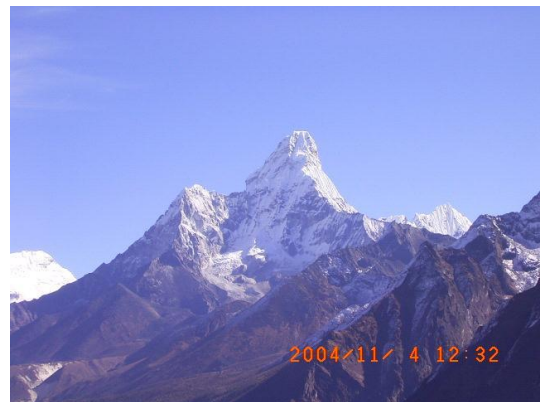
ターメ（3,840m）→ 4.0km → シャンボチェ（3,720m）
→ 1.5km → クムジュン（3,780m）

快晴 8時20分 出発 10時20分 シャンボチェ着、12時前にクムジュン到着。

クムジュン、そしてすこし奥のクンデはシェルパ族の故郷で、有名なクムジュン校（ヒラリースクール）があり、小中高生徒300人余りが学んでいる。

校庭にはヒラリー卿の胸像があった。

昼食後、エベレストビューホテルの近くまで上って、エベレストやアマダブラムに見とれた。そのあたりは石楠花の群生地で、背丈を越えるものが多い。3月から4月には紅い花が一斉に開花するという。これぞ天上の花園といえるのでしょう。



アマダブラム

第6日目（11月7日）

クムジュン（3,780m）→ 2.5km → モン・ラ（峠）
（4,150m）→ ドーレ（4,240m）

快晴、-4℃、裏山がうっすら雪化粧、ゆうべ降ったらしい。8時50分出発。坂を上り詰めタルチョーのたなびくチョルテンが見えるとそこが、モン・ラ（モン峠）。9時30分着。



モンラよりアマダブラム

ここは4,150mで富士山より高い。眼前に覆いかぶ

さるようなアマダブラム、タムセルクが日に輝いてまばゆい。遠く、タンボチュのゴンパ（寺院）も見える。ロッジが2-3軒しかない狭い場所である。復路にもここを通るが、街道中、屈指の展望所である。

急なジグザグの道を下りきったところがポルツェ・テンガ（3,680m）。しばらく石楠花の大木やサルオガゼのぶら下がった樺の林の中を進むが、トンバあたりで森林限界となる。その代わり、小さなリンドウや、紅い実をつけた高山植物が見え始めた。

展望のきく台地に出た時、正面にチョー・オユー（8,201m）やゴジュンバ・カンⅠ、Ⅱ峰（7,743m、7,646m）、ギャチュン・カン（7,952m）などの、チベット国境の峰々が現れた。15時20分ドーレ到着。今日の行程から高度の影響が出てきた模様で、モン・ラの上りではかなり息が苦しかった。完全に富士山を越える高度だ。やはり森林限界を超えているので薪は無く、ストーブの燃料はヤクの糞を乾燥したものである。火力も強く火持ちは良いが、やはりにおいとかなりの煙が難点である。

第7日目（11月8日）

ドーレ（4,240m）→ 3.7km → マツチエルモ（4,470m）

快晴、-4℃（室内）、部屋の窓が凍った。7時50分出発。日が当たりだすと気温16℃。

汗ばむくらいだ。チョー・オユーの特徴のある丸い山容を正面に見ながらの歩き。マツチエルモには11時40分についてしまった。時間的にはもっと先まで行けそうだが、高度順応をしながらのペースが高山病の予防になるのだろう。何はともあれ最高の天気恵まれている。なんと気温は16℃、日向では暑いくらいだ。ここからは、西にギ

ャジヨリ（6,186m）、東にチョラツェ（6,440m）、タウツェ（6,423m）が望める。ロッジでオーストラリアからの女性と話した。全く一人でサポート無し。去年、高山病にかかりゴークョピークに登れず、再挑戦。マツチエルモで数日滞在して、高度順応を完全にしてから出かけるとの事。立派な執念だ。



チョー・オユー

第8日目（11月9日）

マツチエルモ（4,470m）→ 1.7km → パンカ（4,550m）
→ 4.9km → ゴークョ（4,790m）

快晴、-4℃ 今日はいよいよ往路の最終日だ。7時50分出発。8時44分パンガ着。ツォーメンマ湖、ツォパールワ湖を越えて川沿いを行くとチョルテン、タルチョーが見えてくる。



ゴークョは間近 正面はチョー・オユー

そして、三番目の湖、エメラルドグリーンのドウ

ードボカリ湖が見えると、ゴーキョの村はもうすぐだ。12時10分ゴーキョ着。

ここはシーズンのみロッジ関係者が住むだけで、通年の住民はいない。「ドゥードボカリを望むリゾート地」といった感じだ。ロッジからもチョー・オユー、タムセルクや湖面に映る無名峰を眺めるひとは、何事にも換えがたい貴重な一時であった。陽射しは強いが、やはり風が冷たい。ロッジのサニールームはありがたい。



ドゥードボカリとゴーキョのロッジ

昼食後、余力のあるものは、ゴーキョピークへ出かけた。小生は、ゴジュンバ氷河を見下ろせるロッジの裏の丘へ登った。チョー・オユー山の南に広がるこの氷河は、ネパールで最大の氷河で大部分が岩屑に覆われていた。そして、小さな水溜りが多く見られた。

第9日目 (11月10日)

ゴーキョ (4,790m) → 2.5km → ゴーキョピーク
(5,360m) → ゴーキョ (4,790m)

4時起床、5時朝食、5時40分出発。いよいよ最終目的のゴーキョピークへ向かう。個人的には初めての5,000m超えである。しかし、その期待に反するように、だるい、眠い、食欲がない、これが高山病の典型的な症状だ。それでもピークからの

絶景を見たい一心で皆について行った。凍てつく空には満天の星がきらめき、懐中電灯の明かりが路を照らした。ロッジから湖畔まで短い下り道を降りる。流れ込む川は当然凍っている。川を渡りきった所から上りが始まる。登り始めると、歩行速度にかなり個人差が出てきた。元気な人はドンドン登っていくし、高山病の気配のあるものはやはり足取りが極端に重い。しかし、標高差が約600m、六甲山程度である。20歩進んで休憩。20歩進んで休憩。足腰に血液が回って来ない感じ。ムチャクチャけだるい。それでもガレ場になった頃、見上げると頂上らしき気配が感じられた。頂上は大きな岩のガレ場で思ったより広く、タルチョーがたなびいていた。



左からエベレスト・ローツェ 遠くにマカルー

360度の景観というのはこんなことを言うのだろう。ピークからは、北にチューオユー、ガチュンカンの壁に続いて東に盟主エベレストとローツェ、周辺のマカルーなどの展望。南に目をやると、真下に流れる巨大なゴジュンバ氷河やエメラルドの氷河湖ボカリ、それに遠くにカンテガ、タムセルクなど、夢にまで見た素晴らしい景観に圧倒されました。ここからは8,000m級の4峰を望むことが出来る。しかし、やはり世界一の高峰だからでしょうか、雪煙を上げるエベレストは他を圧倒していました。

紺碧の空を突き上げるような三角錐、見覚えのある断層の線、そして独特の黒色の岩肌。目の奥深く焼き付けて、山を下りました。眼下にはゴーキョの村、そして、ドゥードポカリの湖面がまぶしく輝いていました。来て良かったという幸福感に満たされた。



エベレストを背に“やったぜ”

ヒマラヤトレッキングのアウトライン

ネパールは山の国で車の走れる道路は少なく、移動の主力は足である。そして、山奥にも村を結ぶ道がある。トレッキングをするというのは、そうした山の連絡路、交易路を歩くと言うことである。日本の登山やハイキングとは異なり、途中の村々の生活を見ながら歩くことになる。ネパール政府は、雪線を超える6,000m以上のピークを征服することを登山、それ以下の山々を歩くことをトレッキングとして区別している。

トレッキングの体制

トレッキングは、チーフガイド（サーダーと呼ばれます）、アシスタントガイド、コック、キッチンスタッフそしてポーターによって編成される大勢の現地スタッフのサポートにより、安全快適な山旅が出来る。経験豊富なサーダーはスタッフの総責任者

で、コックやキッチンスタッフは食事を担当する。つまり、トレッカーはわずかな個人装備だけで大半はポーターが運んでくれる。テント、寝袋、食糧、燃料、食器、等々、全ての共同装備は現地で用意しポーターが運ぶ。トレッカーはもっぱらトレッキングを楽しめばよい。

人を運ぶときは図のように荷物用の竹籠に入れて、3-4人で組む。歩き始めたらあっという間に視界から消えた。



トレッキングの一日

- ・起床ーキッチンボーイが” Good morning!”と共に紅茶をベッドサイドまで持ってきてくれる。その後、洗面、ポーターにシュラフ、荷物を渡す。
- ・朝食ー通常は8時頃、テントの時は食堂テント、ロッジの場合は食堂で行う。
- ・歩行ーアシスタントガイドが先頭。隊列の間にもガイドやポーターが入る。割合ゆっくりとしたペース、適当に写真を撮れる。
- ・休憩ー最初は30分歩行、10分休憩、又は50分歩行15分休憩。
- ・昼食ー昼食場に着くと先行したキッチンスタッフより紅茶などの飲み物とビスケットをもらい、休憩している間に食事の準備

備。食事は、川原やロッジの庭などの
広場に食卓代わりの敷布を敷いて行
われる。

- ・ 歩行一午前の歩行に同じ
- ・ 宿泊ー宿泊地に着くと昼食前と同じお茶の
サービスを受ける。夕食まで自由時
間。
- ・ ビールー200～250 ルピーで売っている。
- ・ 夕食ー朝食と同じ場所で行う。

ある日の食事メニュー

- ・ 朝食ー粥、味噌汁、ナン、卵焼き（目玉）、
野菜（ジャガイモ、キャベツ、にんじ
ん、カリフラワー）炒め、ジャガイモは
大きさ、色はバラバラだが、味は抜群。
特に本来のえぐ味が、昔のジャガイモ
を想いだす。
- ・ 昼食ーチキンスープ（ヌードル）、野菜（ジ
ャガイモ、にんじん、春雨）炒め、ソ
ーセージ、野菜（トマト、にんじん、
大根、キャベツ、たまねぎ）サラダ、卵
焼き飯、パパイヤ缶詰。
- ・ 夕食ーチキンカレー、野菜サラダ、野菜炒
め、バナナ、味噌汁、果物缶詰、チキ
ンはそれまで庭で遊んでいた鶏。肉
は硬いが味は抜群。

毎食後必ず、紅茶かコーヒーが出る。ミルク
や砂糖の要否を問う、きめ細かいサービスで
ある。

高山病

高山病は標高 3,000m を越したあたりからの可
能性が高まる。主原因は気圧低下、酸素濃度低
下にある。低気圧下・低酸素下では空気を吸って
も体内（血液）に酸素を取り入れる効率が下がる。

高山病の予防には、毎日大量の水を飲むことや、
休日を設け高度順応が効果的とのことである。

高山病の予測にはパルスオキシメーターという
携帯型の動脈血酸素飽和度測定機器で、呼吸に
より血中に酸素がどの位交換されているかを計測、
予測する。今回も毎日夕食時に測定をした。そし
て酸素ボンベも欠かせない道具と言える。小生も
最後の、ゴーキョピークの登りはかなりきつかった。
今回も数名が高山病のためにヘリコプターでカト
マンドゥまで下りた。後日談として、ヘリや入院費
はかなり高価だが、1 万円以下の保険が全て適用
され、その効果の大きさを改めて知った。

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —



荷物はヤクにお願い



ヒマラヤの小中学生

聖地カイラス山を巡る

南里章二（昭45理）

今から28年前の1977年、第一次甲南キシュトワルヒマラヤ登山隊の活動終了後、私は隊員の一人松本好博君とインドの中にありながら純然たるチベット文化が残るラダック地方、ザンスカール地域の調査、踏査を行った。その後、2000年によくラサ周辺を旅して現在のチベット世界に触れることが出来た。私にとって、これら二つの地域をつなぐ意味でもいずれ時がくれば実行しようと考えていたのが聖地カイラス山を巡る旅であった。



カイラス山 (6,658m) は現在、中国統治下にあるチベットに聳えている。

1950年代には中国による武力制圧、60年代には中国の文化大革命によってチベット各地の寺院は破壊され、チベット仏教信仰の多くの象徴が失われた。しかし巡礼は禁止されたものの、破壊されようもなかったカイラス山は、永遠に失われることのないチベット仏教徒の聖地として人々の心の中に住み続けていたことだろう。

1980年、中国共産党は文革の中での宗教弾圧政策の誤りを認め、聖地カイラスへの巡礼も復

活することになる。

またこの山はインドのヒンドゥー教徒にとっても聖なる山である。3世紀頃、それまでの数百年にわたる伝承をもとにまとめ上げられた二大叙事詩の一つ「マハーバーラタ」の中にカイラス山が登場するという。その後カイラス山はヒンドゥー教の三神、ブラフマン、ヴィシュヌ、シヴァのうち、破壊と再生を司る神シヴァの玉座としてヒンドゥー教信仰の大きな象徴の一つとなる。またカイラス山の南西側に美しいコバルトブルーの湖面をみせるマナサロワール湖はヒンドゥー教徒にとって神々に礼拝を捧げてきた聖なる沐浴の場でもある。

さらに仏教伝来前のチベットでは土着の宗教ボン教においてもカイラス山は長らく聖地として見なされてきたという。であるからカイラス山はヒンドゥー教、ボン教、チベット仏教の順に聖地として崇められるようになったという経緯がある。そのようなわけでカイラス山は聖なる山なので今でも登頂は許されていない。カイラス山に迫るには頂きを極める代わりに、三つの宗教の信者と同じくティコルと呼ばれる山の一番外側の周囲、全長50キロあまりを一周することになる。日本人として初めてこのティコルの一周を行ったのは、1900年（明治33年）、ネパール側から当時は禁断の地であったチベットへ僧に紛して入域をはたした河口慧海であった。

現在このカイラス山へのアクセスは決して難しいものではなく、日本の旅行社も数社がツアーを組んでいるが、費用がかなり高くつくので

私はその半額でまかなえる一般公募で現地集合の形をとったツアーを選ぶことにした。

本年7月中旬、ネパールのカトマンドゥに集合。翌朝早くに旅行社が仕立てたバスでチベットとの国境コダリをめざす。このバスの中で以後カイラスへの旅を共にする仲間と初対面。日本人が私以外に1名、スイス、ドイツ、スロベニア、アメリカから各1名ずつ、シカゴ在住のインド人夫婦が一組、計8名のグループである。激しく雨が降り、ネパール側で崖崩れが起こったので、国境近くでバスを降りて歩く。国境にかけられた中尼友好の橋を渡り、中国入国。荷物の通関が手間取ったのでその夜はチベット側の町ザンムーで宿泊。30人を超えるインド人巡礼客が同宿となり、ゲストハウスは騒然としていた。

翌朝、荷物の受取りが昼前になり、その日は30キロ先、標高3,750mのニヤラムに移動。私たちの隊を支えるのは若いチベット人のガイドをトップに、2台のランドクルーザーの運転手とトラックの運転手計3名、炊事その他を賄うネパールから越境してきたシェルパ4名の計8名。私たち旅行者と同数の輜重隊である。翌朝起床時にはシェルパが洗面器に湯を入れて持ってきてくれるし、モーニング・ティーのサービスもある。ニヤラムを出発して30分程走ったところにある農村にチベット仏教カーギュ派の高僧ミラレパが瞑想していたという洞窟があり、それを包み込む形で5年前につくられたという小さなゴンパがあった。11世紀に登場し、詩人の魂を持ったミラレパは3世紀のインドで大乗仏教を集大成したナーガールジュナ（竜樹）に深く影響を受けたという。

農村の周りの広々とした土地ではヤクや羊の放牧が行われ、ザンスカールを思い出してしま

う。茫漠とした高原地帯をひたすら走る。途中シシヤパンマ（8,015m）が展望できる地点があったが、雲に覆われ全容を見ることが出来ず残念。途中の草原で昼食をとるが、残ったライスやチャパティは近くにテントを張っている遊牧民たちに乞われて配られる。夕方、高原地帯に突如として現れたサガという大きな町に着く。町の中央部に一流ホテル然とした国際飯店があり、その周囲に銀行、郵便局、商店、ゲストハウスが立ち並ぶ。本来はここから2時間行程のキャンプ地に向かう予定であったが、降雨が激しいのでこのゲストハウス泊。遅れてたどり着いたインド人巡礼客も同宿し夜も騒がしい。

翌朝も広い高原地帯をひたすら走る。峠を越える時、車の中で「キキソッソ」と運転手とシェルパが同時に唱える。ザンスカールやブータンでも聞かれた峠越えの安全と幸福を祈願する文句である。西から東にチベットを横断するプラマプトラ川の流れと逆にひたすら西に進む。遙か南方にアンナプルナ北面が見え隠れする。昼過ぎにパルヤンの町に着く。やや近代的なサガとはうって変わった、泥壁の民家が立ち並ぶ極めてチベットの町。中央部に大きなゴミの山があり、埃っぽい空気に早く去りたくなってくる。この日はここから2時間行程のプラマプトラ川に注ぐ支流のある平原でキャンプ。テント場から遙か南にひととき大きなピラミッド型の山が見える。ダウラギリ（8,167m）だ。北壁はまさに「ペロンとした壁」（『ヒマラヤ登攀史』深田久弥 岩波新書 1969）であることが良く分かる。先述の河口慧海はその著『チベット旅行記』（白水社 1977）でこのダウラギリを見つめて「四辺に聳えている群雪峰は互いに相映じて宇宙の真美を現わし、その東南に泰然として安座するように聳えている高峰」と記している。



チベット側から見たダウラギリ (8,167m) 北面

翌朝、カイルスとマナサロワール地区に入るための検問所に到着。私たちのトラックの荷台にシェルパを乗せていたことが規則違反とかで通過にやや手間取る。広々とした高原地帯の単調な景色にやや眠気を催してきたが、峠を越えるとマナサロワール湖の真青な湖面が目飛び込み、いっぺんに眠気がふっとぶ。3時にマナサロワール湖着。湖が見えるところにテントを張る。インド人巡礼団の人々もぞくぞく到着し、夕方までには大きなテント村が出来てしまう。



マナサロワール湖で沐浴するインド人巡礼者

湖畔に出向くと、さっそくインド人たちが裸になり、沐浴を始めていた。遠浅の湖の水はそれほど冷たくはない。北の彼方に、頂きに深々と雪を纏ったカイルス山がようやく見えてきた。

1899年、この地に立った慧海が「天然の曼陀羅」と言い表した光景である。湖の南側に聳えるグルラ・マンダータ（中国名ナムナニ 7,694m）は雲に隠れてまだその全容を見せない。夜半過ぎには満月がマナサロワール湖とテント村をこうこうと照らし、荘厳な世界をかもしだす。

翌朝は曇り空の中、インド人の巡礼団がグループごとに湖畔で火を取り囲み儀式を行い始める。「ナマシヴァヨー、ナマシヴァ、ハラハラボーレナマシヴァ」とシヴァ神を讃える合唱とともに香が炊かれ、各グループに同行してきたヒンドゥーの聖者が信者の一人々々に額に幸福を祈願する塗料を手で塗り込む。

昼前には大半のグループの儀式が終わったので、私たちは午後からマナサロワール湖を車で一周することにする。グルラ・マンダータは相変わらず姿を見せない。マナサロワール湖のすぐ西にラカス湖という湖がある。前者が標高4,588mに対して、後者が4,573mとやや水面が低い。昔、ラカス湖の水に毒が含まれ、湖水を飲んだ人や動物が皆死んでしまったという言い伝えがあるためヒンドゥー教徒は「悪魔の湖」と呼ぶようになったという。しかし湖中に四つの島を持つラカス湖もマナサロワール湖の真青には及ばないが、美しい湖面をたたえていた。車はそのままカイルス山の麓、タルチェンに向かう。町を手前にした平原地帯は空港が幾つも出来そうなほど広い。しかし町中はチベット風の白いとんがりテントと民家が立ち並ぶだけの小さなもの。泊まったゲストハウスの、窓から明日いよいよ回りはじめるカイルスの姿がくっきりと見えてきた。

翌朝、タルチェンからカイルス山一周の出発点のタルボチェ僧院跡へ。8名のメンバーは高山病の影響でアメリカ人1人が離脱し、またも

ともとマナサロワール湖畔での宗教儀式のみ参加する目的であったインド人夫婦が抜けて5名で出発。その前に、僧院跡の近くに広がる小さな丘が鳥葬場だということで見学する。ハゲワシが食わずに残した死者の髪や入れ歯が散乱しあまり気持ちのいいものではなかった。現地でパリクラマーとよばれるカイラス一周はヒンドゥー教徒とチベット仏教徒が時計回りと同じく右回りに、ボン教徒のみが反対方向の左回りでいう習慣がある。私たちは右回り、二泊三日の行程である。ガイドやシェルパたちが9頭のヤクへの荷積みにも忙しく立ち回っているのを尻目に一足早く出発。

カイラス山の西面、黄金溪と呼ばれる川の左岸に沿って平坦な上り道を水平距離にして約12キロ、4時間程の歩行でディラプクと呼ばれる標高 4,775mの第一キャンプ地点まで上っていく。途中左回りにカイラス巡礼を終えたボン教徒とすれ違う。「タシデレー」（チベット語でこんにちは）と声を掛け合う。全体で200人を超すインド人巡礼団の諸グループも私たちとほぼ同時に動き始める。彼らの中の高齢者や太りぎみの男女は地元のチベット人が引く馬の背に跨がって進む。3日間で720元（約100ドル）とのことだ。やはりカイラス巡礼を果たそうとするインド人は富裕階層の人たちなのだろう。以前中国との仲が険悪であった時にはインド人の中国入国は厳しく制限されていたが、現在はネパール経由でグループヴィザを取得して簡単に入国出来るようになった。実際に見ることを楽しみにしていたチベット仏教徒たちの五体投地はカイラス一周を終えるまでついぞ目にすることはなかった。インド人巡礼団のパワーに押され切ってしまうているかのようであった。第一キャンプ地ではチベット人が数張りのテント

を恒久的に張り、簡易宿泊所にもなっている。ここから見るカイラスの西北面壁は素晴らしい。河口慧海に続いてその27年後の1927年にここを訪れた長谷川伝次郎が撮影したこの角度からのカイラスはよく知られている。



第一キャンプ地 ディラプク(4,775m)から見た
カイラス山北面

夜中、トイレに立とうとテントを出るとその真ん前に大きなヤクが寝ていて、お互いにびつくりする。

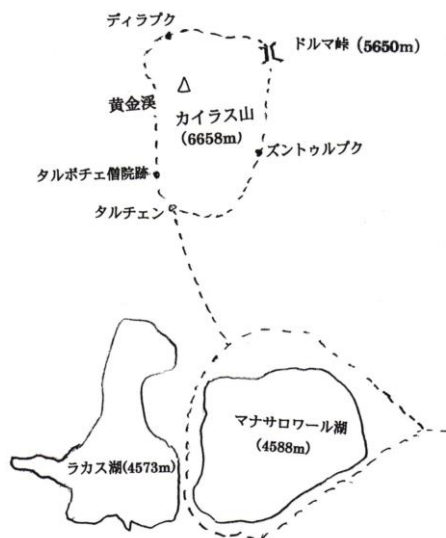
さて翌日は水平距離にして22キロの行程。溪流の左岸に付けられた道を右折したあたりから急に高度が上りはじめ、呼吸が苦しくなってくる。登りのスピードも徐々に落ちていく。標高5,000mの小さな峠を越えてからこのルート of 最高地点ドルマ峠(5,650m)に昼過ぎ、ようやく到着。安全と幸運を祈願するためのタルチュと呼ばれる布が無数にたなびく、ややだっ広い峠であった。ここで昼食をとも思ったが、高度の影響を考え、少し下に降りることにする。ここからは東側の谷に入り、ガレ場の道を下ることになる。五体投地は上りには良いが下りには一体どうするのだろうという素朴な疑問は残念ながら払拭することは出来なかった。高所では下りの時に急に疲れが出て足元がふらつくことがある。ゆっくりと時間をかけて下り続ける。



カイラス巡礼路の最高地点 ドルマ峠 (5,650m)
無数のタルチェがたなびいていた

東側の谷をながれる溪流の右岸に広がる湿地帯の一角にズントウルプク (4,700m) と呼ばれる二日目のテント地があった。この日は疲れのため珍しく食欲がなく、夕食はとらずにシュラフに潜り込む。

翌朝、チャパティー一枚とミルクティーの朝食後、ゆっくりと9時半に出発。最後の三日目の行程は14キロ、もう急な登りはない。一時間ほど歩いたところの右上にニヤラム近くでみた、チベット仏教の高僧ミラレパを祀る小さなゴン



パがあったので訪ねてみる。色彩豊かな仏像が五体並び立っていた。ここから約2時間で終着点へ、ヤクから荷物を降ろし、トラックに積み替える作業と相俟ってインド人巡礼団の迎いの車やトラックが集まり混雑極まりない状態。カイラス一周を終えた名残りを感ずる暇もなく、再び車で、3日前のマナサロワール湖のキャンプ地へ。今回は最後まで姿を見せることのなかったグルラ・マンダータが夕陽に映え、湖面をはさんで対峙するカイラスの頂きと美しい対称をつくりあげていた。

(この原稿は月刊誌『アジア倶楽部』本年11月号に、私の連載記事「アジア水平垂直紀行」としてすでに公表されているものをもとにしました。)



マナサロワール湖南面にそびえるグルラ・マンダータ
(中国名ナムナニ 7,694m)

シャングリラに魅せられて

西濱昌典（平4理）

1. ネパールに如何にして絡んだか

私がネパールについて始めて意識したのは、甲南大学卒業1年後の1993年でした。当時、生保系コンピュータ会社に勤務していた私は、一日中コンピュータと対峙する生活に嫌気が差していました。小学校の通信簿では、6年間全学期にわたって「落ち着きが無い」との評価を頂いていた私にとって、「山岳部とは落ち着きの無さ」を自由に表現できる場所であり、コンピュータ会社への就職とは、全身痒いのにも緊縛されて掻くに掻けない状態でした。

今思うと、「落ち着きのある小学生」って居たのでしょうか？そんな小学生は気色悪いんですが・・・

そんな、尻に虫が湧いた様な生活を送っているところに、AAVK（関西学生山岳連盟）から海外遠征を出そうと言う話になり、現状から逃げ出したい一心の私は海外遠征話に乗り進めて行きました。

また当時、私の直の指導者であります宮崎先輩がネパールのクスムカングル山を敗退帰国されたのですが、その様子をスライドにて見せて頂いた時には、ネパールと言う国に対しては何も感銘を受けることなく、ヒマラヤに対して「ああスケールがデカ過ぎやあ」「空が青いなあ」「かつこエエなあ」位の感想でした。

「より高く！より困難を！」がモットーの山岳部が海外遠征と言えばヒマラヤであり、ヒマラヤと言えばネパール。この瞬間からが、

私がネパールに憑かれる起源であるのです。

※ この遠征の話については、過去の山嶽寮掲載報告書を参考に願います。

要約すると、如何にしてネパールへの係わりを持ったかと言うと、日本に適応できなくてたまたまネパールへ行ったと言うことでしょ

うか？
また、初の海外遠征後には自分の中に何か

が芽生え、
「このまま日本で暮らしていくのは

何かが違う！」

「もっと、日本国外を知りたい！」

との思いが募って行く生活を送っていました。そして、漠然とながらいつかは海外で生活を仕事をしたいとの思いにつながり、何某かの折に触れ海外での生活や仕事に必要な情報を得るためにアンテナを張り巡らせる様になりました。

この時点、第一回目の東アフリカとネパールへの遠征終了後は特に「ネパールへっ！」と言う意識は無く、ネパールも多くの中の一つの選択肢程度の考えでした。

その後、海外で生活するには英語を身につけなければと言うことで、カナダで大工仕事を得て英語環境に身を置いてみたりしながら（カッコよく言えば）機が熟するのを待っていました。

この間、色々な方にお世話になりましたが特に故・乾先輩には多大なるお世話になりました。

ただ、一回目のネパール遠征で主目的であったシングチュリ（約6500m）を落とすことが出来ず、お隣の山タラブチュリ（約5600m）をついでに登ってしまい、これが、2回目、3回目のシングチュリ雪辱遠征につながって行く事になりました。

そして、3回やっても駄目だったシングチュリに意気消沈した私は、現地にて女の子を一回で射止めてしまい意気揚々と帰国するのでした。がっ！

それが現在の妻なのですが、シングチュリよりも難攻不落で現在も登攀中……

あと何ピッチあるのだろう？

そして、妻を娶ってから幾度か海外で働かないかと申し出があったのですが、折り合いがつかず断念。

それでも、海外への思いを絶やす事無く機会を窺っていました。そして2003年に、現在の就職先である㈱メイケンへ就職。現地合資法人メイケン・デジタル・テクノロジー・サービス（MDT）へと赴任できることになりました。

思いを馳せて10余年、思いは通じて願いは叶うものだと思感した瞬間でした。

そして未だ、シングチュリへの思いは失せておりません！

ついでに、エベレストにも登りた〜い！

2. ネパールに如何にして魅了されたか

初めてネパールへ訪れたのが1993年の終わり頃でした。タンザニアのキリマンジャロ山とケニアのケニア山を経てからの訪問でした。

そのアフリカと言うアジアとは根本的に異質の国が経由地だった為か、ネパールの地に

降り立った瞬間に何か「懐かしい」「記憶にある」様な感覚を感じました。

人と言ひ、町並みと言ひ、空気と言ひ、明らかに日本とは異質でありながら、何か懐かしい思いを抱かせるこの土地に好意を抱かずには居られませんでした。

そして、その感覚は山奥へ踏み入る程に強まってくるのでした。

太陽と共に寝起きする生活。

衣食住のみの生活。

時間に追われない生活。

笑顔の絶えない生活。

ベースキャンプへ至るトレッキング道中は、瞬間的に通り過ぎる村々でさえこのような感覚にとらわれ、ヒマラヤ山脈の一端を攀じ登るのだという興奮、異国の地に居るという興奮などがさらに陶醉させて、夢の様な時間を与えてくれるのでした。

そして、「ああ、人間的な生活とはこのような人達の営みの事を言うんだ！」と心に刻んでいく山旅になるのでした。それからスケールの大きな山々。遠望の様相からは想像も出来ない程のスケールの違い、雄大さ。

毎回、ネパールへ来るたびに、

「ああ、このような国に住めたら

良いのになあ」

と恋心にも似た心境になるのです。

そして、3回のシングチュリ山遠征を重ねるうちに、実はシングチュリ遠征は口実に過ぎず本当はネパールに長居するのが目的のではなかったのかと思えるほど毎回ネパールに長期滞在するようになりました。

そのうち、3回の遠征で親しくなったシェルパ族の友人宅に滞在するようになり、彼らと生活を共に出来る事がネパール人社会の中

に少しでも入れてもらえたと言う嬉しさになってきました。

そして、運命の日を迎えます。ある日突然、そのシェルパ族友人が言うのです。

「近くのもも屋（ネパール餃子）に同級生の女の子が居る、ももも美味いし、女の子も綺麗だぞ！」

※ ここで男性諸君の為にネパール人女性の容姿について説明しよう！

ネパール人は公的だけでも36部族を数える多民族国家であり大雑把に掴めば、

北部山岳地方のチベット・モンゴリアン系の日本人系の人種が住んでおり、

南部平野地方では脱色すれば白人と同じ顔立ちの彫りの深い顔立ちで小顔の八等身の体形。

そして、それらの血が様々な配合率で混じりあい様々な人種や文化を形成しているのである。

そして、ココからが肝心！

このような事から、黒髪のアジア女性が好きっ！との男性諸君であれば好みの女性が其処彼処に見受けられるハズである。

事実、インド映画に出ているネパール人女優なんて形容し難い美貌の持ち主である。

その様な女性たちが世界でも指折りの美しさを誇る民族服サリーを身にまとい闊歩するのであるから垂涎の的である。

説明が長くなりました・・・すみません。

5分後、彼と二人でそのもも屋に座って居ました。

そして、彼女との初対面。友人が私を紹介してくれたのは良いのですが、私から話し掛け様にも、言葉もあまり通じないし、恥ずかしそうに話そうともしないその仕草！ その

くせ、離れもせず近づきもしない微妙な距離。

「うお〜っ、ムッチャ可愛いやんけー!!!」
鬼の霍乱だったのでしょうか？ネパールにだけでなく現地娘にまで心を奪われてしまいました。

モノの本には「ネパール人女性は男性と家畜の間の地位しか与えられていない」と書かれているという話を聞いたことのある私は、

「間違いないっ！この娘と結婚したいっ！
否、すべきだっ！」

そして、その数ヶ月後日本へ招聘、結婚する事になりました。

※ 日本人男性はネパール人女性と家畜の間に位置することを後日
知りました・・・

そして、ネパール語をしゃべるようになりカトマンズに身を浸す事が出来るようになると、更に楽しい事が満載の場所になるのです。勿論、言葉を理解できるようになると、嫌な面も知る事になり、旅行でネパールに滞在した時に感じた事と全く逆の事実にも失意することもしばしばなのですが、それでもこの多様なネパール・カトマンズ生活には今のところ飽きを感じません。

世界屈指の貧国にも関わらず豊かな食生活（ただし、食事はカレー単品が基本）。そして、西洋の洗練された生活スタイルや情報の渦に飲み込まれながら劇的に変化するカトマンズ。そして、そんななかでも旧態依然とした文化風習を残すカトマンズ。美しい民族衣装で日常生活を営むことの出来るカトマンズ。乞食や牛糞、生活ゴミが散乱するカトマンズ。市街中心地に未だにある山羊市場、そして目抜き通りをハレの日のご馳走にするのであろう丸々と太った山羊を連れて歩くことのでき

るカトマンズ・・・・・・・・

今、私にとってこの「カトマンズ」と言う言葉の響きには、何とも言葉で言い表す事のできない感情を湧き上がらせる力を持っているのです。

この混沌とした世界、
全てを受容する雰囲気。
この中で生活することの厳しさを
超越する「楽（らく）」さ。
この何某か理解できない混沌に吞まれて
流れに身を任せる快感。

私はネパールに憑かれたのでしょうか。

3. ネパールの現状、艱難辛苦

ところが現在、時々日本でも紙面の片隅に掲載されるのですが、ネパールでは国情が不安定で大きな問題となっています。

そりゃあ、江戸時代よろしく王族一家を抹殺した人間が王様になって、そして政権を握る王政復古。

こんな数百年前ならまだしも、現在でも行われていると思いきや、

時代錯誤的ムーブメント「毛沢東主義」の反政府共産武力組織の台頭。

会社・工場・施設・車両を爆破して破壊工作を続ける武力組織。

その武力組織と政府軍の搾取強奪に怯える村人たち。

需要の20%にも満たない給水量、平均1日に1時間程度の水道給水。

デモの度に路上で火が放たれ投石があり、治安当局からの催涙弾や発砲がある政党デモ。

党主席が検問で身分証明書の提示を執拗に求められたからと国全体を暴力でゼ

ネストさせる政党。

立憲君主制を党則から削除し、王政が元凶と責任転嫁し腐敗し切った政党の過去を顧みない政治屋。

完全に腐りきった政党政治とそれに嫌気がさした国民。

回線容量以上に販売されているツナガラナイ携帯電話。

2機のジェット機B-757を飛ばすのに社員4,000人も居る国営航空会社。

世界最貧国と言われるのに世界屈指の富豪である現国王。

人身売買で数十万人とインドや海外で売春使役労働を強いられる人々。

それでも真っ白に輝くヒマラヤの峰々。

この様に不安材料をあげていくなら枚挙に暇が無いほどの国状なのです。そして、ネパールの先行きはどうなのかと言えば、全くの見通しが立たず国の存亡の機が囁かれています。

この元凶は何処から来たのかと考えるに、やはり国民に帰着するのかなと思われます。先見性の全く無い行動がその最たるところなのでしょうが、これを変えるのには一筋縄では行きません。

教育で数十年単位を覚悟して変えていくしかないでしょう。

また、我々外人はこの先見性の無さが「のほほん」とした「人間的な生活」に写って憧れを抱いてしまうのですから始末に終えません。

4. それでもネパールにて

それでも、ネパールなのです。

やっぱり、ネパールなのです。

「現在ネパールは内戦状態なのではないのか!？」と思われる程の治安状況。

首都圏街地で多発する暗殺や爆破テロ等の毛派による破壊工作。

世界でも指折りの汚染のヒドイ空気、劣悪な交通事情、ゴミ……

遅々として進まない手続きや仕事、怠惰な役人に賄賂の請求……

それでも、連綿と続く伝統行事、町並み、人々……

完璧主義の日本では許されないような事象でも受け入れてくれるこのお国柄。悲観的な事象や消極的な事柄はいくらでもあるのですが、それでもこの国で暮らすのが「楽」なのです。

この国で生活すると、日本での生活で常にかけていた「何か歯車のような生活」ではなく、毎日が「自分自身が自分の主役である生活」を送っている。

毎日の生活で日本ではありえないような事が多々起こり、日々の生活に支障を与えるのですが、

それを一つ一つ解決していくのが何かサバイバルしているような充実感を与えてくれるのです。

山登りを趣味としている人間にとって、憧れの地ヒマラヤに住むということは桃源郷に住むのと同じなかもしれませんが、日々の生活に追われて山行へ出向けない事は、本当は真綿で首を絞めるような事なのかもしれません。

ただ、ネパールでの生活が「日々の生活に追われる」ような生活ではなく「サバイバル」的な生活だと捉えているため毎日が楽しく、

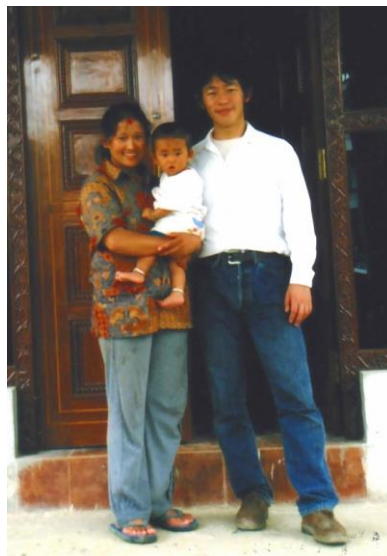
そして山へ行かなくても充足しているのかも知れません。

それでも、いつ来るかわからないヒマラヤ登山への機会を逃さないよう日々のトレーニングは欠かさず行っていますし、カトマンズには人工壁もあります。また、自然壁もあります。

私は、いまだ挑戦中でありますシングチュリ山や世界最高峰サガルマータ山登頂の目標を虎視眈々と狙って居ます。

毎日の生活が1ピッチづつザイルを伸ばす登攀の様に実感できる場所。

そう、ネパール・カトマンズは、一度は山に心を奪われた男達にとって、ヒマラヤに思いを馳せつつ生活を楽しむことができる世界唯一の桃源郷だと確信するのであります。



カトマンズ郊外の自宅前で（南里会員撮影）

－ 紀 行 －

劔 二 股 を 訪 ね て

柏 敏 明 （昭41経）

40年ぶりに劔岳二股に行ってきました。メンバーは、アーバンライフの広瀬さん、山本さん、三菱商事の森女史、竹中親子、井本親娘、水渡君、関学山岳部OBの小西さん、それに小生の計10名の大部隊でした。

7月22日の夜、富山地鉄ホテルに東京、大阪から集合、翌23日、何時もながらの山本さんの巧みな設営のお陰でホテルの前から直行バスで一気に室堂へ。みくりが池温泉で昼食後、身支度を整えて出発、雨に祟られ一回も頂上を見ることが出来なかった一昨年の双六～槍～槍沢や、昨年の涸沢～奥穂～岳沢と違って、今年の天候は精進の良い人が参加したのか、三日間とも高曇りながら、雨も降られずまずまずの天気であった。地獄谷を過ぎ、昔、60キロ（16貫）のキスリングを担いで喘ぎながら登った雷鳥沢を、よくもこんなに足場の悪い道を登ったものだと、6キロのザックを担いで喘ぎながら登る。そういえばこのボッカで積荷の白灯油が背中に漏れ出し、鈴木君が大変な目にあったことを思い出す。落石で怪我をした人を降ろしている県警の人達とすれ違いながら、劔御前小屋を経て、予定より早く15時過ぎに劔沢の小屋に着く。久しぶりの劔は圧迫感があり、穂高とは違った存在感を感じる。現役の頃は標高3,003mだったのに、小屋の標識は2,998mであり、山と高原地図「劔・立山」は2,999mとなっている。標高は正確さが必要だが、やはり、劔には3千米が欲しい。

小屋は思ったより人が少なく、我々だけで一

部屋を確保することができた。ほどなく15時30分よりシャワーを使ってくださいとの案内。劔沢でシャワーですよ！！さすがに石鹸は使えませんでした、三人が同時に使えて40度前後の熱い湯がでるシャワー。汗を流した後で、劔岳、源次郎尾根を見ながら飲むビールの旨いこと、日本酒「立山」の旨いこと、ワインの旨いこと。もう最高でした。夜は湿ったせんべい布団でなく、羽根布団のようにふわふわの布団で眠りにつく。ただ、真夜中に小便に行く人が増えてきたのは少し寂しい現象である。



劔沢小屋で劔をバックに

24日 出発の準備中、井本君の靴がパンクしかけているのに気付く。金を投資する所を間違っているなどキツイ指摘を受けながら、井本君が必死に針金等で修理する。小屋の人も親切に針金やガムテープを提供してくれる。又、アイゼンを持っていない人には、真砂か何処かで返して貰えば結構と6本爪のアイゼンを無償で貸

してくれた。6時20分に出発、程なく大雪渓に入り軽アイゼンをつける。高巻きをしない分、時間を稼ぐ。借りたアイゼンを真砂沢小屋で返し、二股に10時前に着く。40年ぶりの二股である。近藤岩は直ぐに判ったが、岩小屋のあったベースキャンプ跡がどうしても見つからなかった。小西君も関学のベースキャンプ跡を探し、大体あの辺だっただろうとの目星をつける。ここからチンネをはじめ、剣の各ルートをアタックしたものである。三ノ窓のホルのアドバンスキャンプで、成城大学山岳部の高圧釜の炊き上がった時のピーという音がなぜか蘇ってきた。色々のことを思い出しながら三ノ窓雪渓を見上げるが、残念ながら上部はガスって見えなかった。



三ノ窓の雪渓

昼食を済ませ、愈々、今回の登りのクライマックス、仙人池への急登に取り付く。息子、娘

達も登山経験は少ないながらも頑張って遅れずに付いて行く。この年になってよく親父達と一緒に山に登るなど感心、羨ましさを感じる。三ノ窓の雪渓や小窓の雪渓を左手に見ながらストックを頼りに仙人新道を必死に登る。森女史はあの細身の体のどこに馬力が隠されているのか、忽ち見えなくなってしまう。例年通り皆より遅れて仙人池ヒュッテに14時過ぎに着く。バテた体に小屋から出された熱いお茶がおいしかった。お嬢様方が見あたらないので聞くと、お風呂に行ったとの事。それも3人が一度に入れるヒノキ風呂。今日は20人余りの宿泊客なのでゆっくりと風呂に入る。着替えもしてさっぱりしたあとは、剣大窓、小窓や仙人池に映る裏剣・立山を見ながらのビヤパーティー。今回は上等のウイスキーも加わる。話題は現役時代のエピソードや、これからやりたいことの話。小西君が今秋計画しているアンナプルナトレッキングの話に水渡君が大いに乗り気になる。下界ではすぐ話題になる健康や年金の話は全然でなかった。夕食まで時間があつたので、目下ブームの寒天を作る。当てにしていた蜜豆の缶詰を売っていませんでしたので、果物のシロップだけになってしまったのは残念だった。廣瀬さんと竹中君は碁盤を囲んで昨日に続いての本因坊戦。

小屋のおばあちゃんも70歳を越えられているのに、かくしゃくとして小屋の指揮を取っておられた。甲南さんはお坊ちゃん学校だったよねとやられる。八千草薫は何回も仙人池に来ていたと思っていたが、新婚旅行に一回来ただけだったそうである。「剣岳には登ることは出来なかったけれど、仙人の池で剣岳に触れることが出来ました」と言う文句にしびれたものでした。剣沢小屋での夕食を聞かれ、剣沢では揚げたての熱々のエビフライだったと答えると、それじゃ、今夜のメインはとんかつとずけマグロ

にしようと献立が決まる。最近の食事は圧力釜で炊くためかご飯も美味しいし、おかずも山小屋としては充分満足のいくものになってきた。お代わりの給仕も小屋の人がそばについてやってくれる。劔沢の小屋もそうだったが、後立山や槍・穂高と違って、小屋の人の対応が良く非常に親切だった。宿泊客の7～8割が60代以上、50代はヒョっ子だそうである。同宿の中にも室堂を出発、劔山荘から劔を往復して劔沢、二股、仙人池まで一日というおばちゃんグループもいた。山は時間や距離を稼ぐだけではないといいたいが、やはりひがみになるのだろうか。

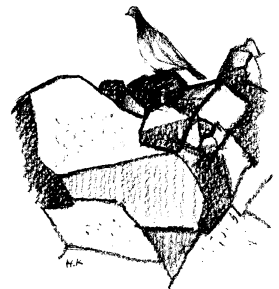


仙人池に映る裏劔

25日、裏劔のモルゲンロートを期待するも残念ながら見えず。昨日のタイムレコードから早く出発の方が良いとのおばあちゃんのアドバイスで、朝食を5時にとり予定を早めて出発することにする。井本親娘と小生の3人は皆より

さらに先行して5時30分に小屋を出発する。30分位歩いた最初の雪溪のところで追いつかれる。聞けば結局10分遅れで出発したそうである。途中から数箇所で高巻きを強いられる。道が整備されていないのと夜半の雨で道が滑り易くなっているので緊張する。初めての本格的な山だろうと思うが、弱音もはかず井本朝子さんは必死に付いていっている。あとで聞くとやはりしんどいよりも怖かったそうである。その点、竹中勇一郎さんは、以前にも劔岳を経験されており、建設現場で鍛えられているせいか余裕たっぷりであった。二人とも素直で礼儀正しく近頃では珍しい素晴らしい若者である。仙人温泉小屋の露天風呂に手だけ浸け、大休止の後、ただただ降るのみ。昨年岳沢で痛めた左の膝にミズノの登山用膝サポーターをつけて歩いたが、高価な分だけ効果抜群。お陰で最後まで膝は痛くならなかった。6時間かけて仙人ダムに到着。文明の利器の恩恵にあずかって宇奈月まで一気に下る。タクシーでJR黒部駅まで出て、ここで来年の再会を約して解散となる。

今年の山行は例年と違って雨にも降られず、遅れも余りなく、若い人達や新しい参加者も加わり、楽しい登山であった。来年はどこの山に連れて行って貰えるのだろうか。皆さん色々とお世話になり有り難うございました。来年も宜しくお願いいたします。



石渡均先生の思い出

平井吉夫（昭32新高）

もう五十年近くも前のことなのに、それとも五十年近く経ったからなのか、石渡先生のことを思い出すと涙が出そうになります。甲南の中学高校時代、私が最も多感で、その後の私の生き方にある意味で決定づけた青春時代、ややこしい年頃の私を石渡先生は優しく見守ってくださいました。

私が甲南中学に入学したのは1951年（昭和26）、すぐ山岳部に入りました。あそこ山岳部の顧問を、数学の和田実先生、体操の山本三郎先生、数学の藤岡昭先生、そしてドイツ語の石渡均先生がかかわるがわる勤めてくださり、山にも同行されました。それぞれあだ名があって、和田先生はスパイ、山本先生はヤント、藤岡先生はアキラチャン、石渡先生は田辺ガチャの命名でインドのカラス、略してインカラ、しかしこれはあまり定着しなかったようです。

石渡先生が山の合宿に同行されたのは、私が高校一年のときの1954年（昭和29）夏山、後立山連峰の縦走と、その年から翌年にかけての冬山、春の不帰I峰アタックにそなえる南股合宿でした。いずれの山行でも先生はいかなる口出しもされず、むしろ黙々と生徒たちと行動を共にされていたと思います。南股の合宿では、スキー練習中に膝をひどく捻挫された先生を、われわれは担ぎ下ろして医者にみせることもせず、何日も極寒の小屋に放置したという、いまだに慙愧に堪えない思い出があるのですが、そのときも先生はなんの文句も言われずに黙って寝ておられました。大晦日に携帯ラジオからベートーヴェンの第九が流れたときは、ずきずき

痛む足をかかえてシラーの「歓喜に寄す」の講義までしてくださったのを覚えています。

私の前年か前々年の学年までは、高校に上がると英語かドイツ語を第一外国語に選ぶ制度があったのですが、私のときは英語のみが必修で、ドイツ語は自由選択科目になっていました。山岳部生活を通してドイツ文化に触れ、ロマンチックな憧れを抱いていた私は、英語だけでもあつぷあつぷしているくせに、ドイツ語の授業も受けました。そして大学入試もドイツ語で受けることになります。（ちなみに、平井がドイツ語に走ったのは英語教師に痛めつけられた恨みからだと、越田和男が言い触らしていますが、それは嘘です。あの悪名高い英語教師、清原先生と、私は互いに敬意に満ちた終生の師弟関係を結んだほどですから。）

そのころ古くからのドイツ語教師、ユーバーシャル先生や村尾先生は大学専門になり、もっぱら若い石渡先生が高校生のドイツ語授業を担当されました。はじめドイツ語を選択した生徒は私のほかに七、八人いましたが、受験英語の重圧で一人減り二人減り、最後は私一人になって、石渡先生とのマン・ツウ・マンの授業になりました。

ドイツ語の授業時間は他の全科目が終わってからのので、そのうちに、わざわざ教室に行かずに職員室の石渡先生の机をはさんで行なうようになりました。机の上には教科書やノートと並んで灰皿があり、師弟ともに煙草を吸いながらの授業です。それが終わると二人で夕暮れの道を歩いて御影駅に向かいます。途中で屋台の

オデン屋があって、そこで一杯やりながらドイツ文学やマルクス主義を語り合う。燗酒の味を教えてくれたのも石渡先生でした。あるいは先生の狭い下宿に上がりこみ、あのころ先生が神戸の文学仲間と出されていた同人雑誌（たしか『クローベス』といった）をめくり、生意気なコメントを口にしたりする。

土曜日の放課後、ほかの山岳部員はテントを担いでさっさとロックガーデンに行き、私はドイツ語の授業をすませてから後を追ってキャンプ場に行くことがよくありました。そんな私を石渡先生が高座の滝まで送ってくれたこともあります。そのときの思い出を、ずっとのちになって先生は私に話してくれました。私は岩波新書の新刊、たしか大内兵衛の中国旅行記かなんかをずっと手にして、高座の滝から地獄谷に抜ける急な岩道を登るときも、その感想を興奮してしゃべっていた、と。それを聞いたのは、すでに私が東京で勤め人になり、学習院大学で開かれた学会に出席のため上京された先生と、久しぶりにお会いしたときのことです。ちゃんと覚えていてくださったんですね。このときはウィーン風のワインの飲み方を教わりました。

最後に石渡先生と親しくお話したのは、1969年（昭和44）の夏、大学山岳部が剣沢で合宿して、リーダーの木村君がけがをしたときです。そのころ東京創元社で『現代登山全集』の改訂にたずさわっていた私は、社用をでっち上げて剣に入り、剣（御前？）小屋で「甲南に事故があった」と聞いて現場に駆けつけました。部員たちが負傷者を富山まで下ろすのに同行したら、神戸から駆けつけた石渡先生と病院でばったり会いました。緊急事態なので酒を酌み交わす暇はなかったけれど、私には積もる話がいっぱいあり、先生の乗られる汽車が富山を出るまでくっついていたので思い出します。そのとき先生

は、私が「社命」山行を投げ捨てて下山したことをほめてくれました。

のちにドイツ語の翻訳が本業になった私は、『翻訳の世界』という月刊雑誌に二年にわたって（1986～88年）ドイツ語翻訳にかんするエッセイを連載したことがあります。その第一回の冒頭にこんなことを書きました。

「むかしむかし、といっても戦後十年近くたっていたが、私が通っていた高校には、まだ学生言葉にドイツ語がかなり残っていた。お金はゲル（ト）、女の子はメツチェン、たべものはエッセン、謝辞はダンケ、それに、いち、にい、さん、はアインス、ツヴァイ、ドライだった。そのころドイツ語を教えてくれた先生が、“ぼくは翻訳不可能論者だ”とつねづね言っていたのを思い出す。ぼつりぼつりとドイツ語の本を訳しているうちに、いつのまにやら翻訳家などと呼ばれるようになるにつけても、この恩師の言葉が身にしみる。」

私が職業翻訳家になったのは、まったくもって石渡先生のおかげですが、先生ご自身は「翻訳、とくに文学の翻訳は不可能だ」というのが持論で、そうおっしゃる意味が、いまの私には身をもってよくわかります。にもかかわらず翻訳を業としている私は、恩師の教えに反する無謀な行為に走ったわけですが、たぶん石渡先生は、南股でひどいことをした私を許してくださったように、これも苦笑しながら温かく見守っていてくださる、と思うことにしています。

書いているうちに本当に涙が出てきました。

石渡均先生のご冥福を心からお祈りいたします。

－ 随 想 －

スイスを愛した日本人 と 幻の終戦工作

廣瀬 健 三 （昭36経）

先日、新聞に「幻の終戦工作」なる本が紹介された。

其の中に、海軍武官 藤村義一の名があり。相当前にこの人物関連のTVを見たのを思い出した。終戦工作の話で、見終った日に福田泰次先輩に御電話し、田口二郎大先輩がこの周辺の活動に少なからず加わって居られたのでは、とお聞かせしも、“アッチャンは黙して語らずや”との御返事だった。

この御盆に当書物を購入、早速、二郎氏の御名前を探すも見当たらず、二郎氏の兄貴分であったと思われる、朝日新聞社の重鎮、笠信太郎を見つけるに止った。

大先輩の本物の英語力と、当時の朝日新聞社スイス特派員笠信太郎の部下で有った事、加えて、一時期在スイス日本公使館勤務と言う背景からして、敗戦直前のスイスで繰り広げられたこの対米和平工作に、大先輩が何らかの形で関わって居られたのではと、個人的に推測する次第。（何れにせよ、二郎氏は当時30歳位でも有り、又肩書き上も表舞台には立てずと思われるが。）

他方、昨秋、神戸大山岳部OB金井健二氏から頂いた 大堀 聡 の力作 「スイスを愛した日本人」 を再読すると、其の感益々深まり、興味津津、そして大先輩の登山以外の分野での御活動を再認識した。若し商社マンでなくして、ジャーナリスト、相当飛躍するが政治家にでも成っておられたら、甲南学園創設者、平生鈞三郎先生が甲南生に期待した、世界に通用する国際人として、我が国をリードされたのではと、勝

手に思いを馳せている。

この一文は、＜糸で繋がる死＞として、次のように始まっている：

1998年9月30日、朝日新聞に笹本駿二氏死去。大2次大戦前から欧州に住み、揺れ動く各地の情勢を日本に送り続けたジャーナリスト。86歳。と記され、それより6日前の9月24日には、田口二郎、元日本山岳会副会長、元大倉商事専務、享年85歳、喪主は妻のエルナさん、と一人の山岳関係者の死がひっそりと報じられた。：

この長く克明な記述に目を通し乍ら、先ず田口一郎大先輩のスイスでの客死に関する個所を追った。それはすぐさま見つかった。極めて生々しく状況が記され居り、真実は矢張りそうだったのかと、何か霧が晴れたような気持ちに成った。

数々のエピソードを交えた内容は極めて興味深く、いっきに読み終えた。一郎氏のアクシデントを含む全てを転載する事は紙面の都合上も許されないが、文中、目をひいた個所を転載紹介致したし。以下抜粋。

＜田口二郎＞

もう一人の主役田口二郎の名前が天羽公使の最初に日記に登場するのは欧州戦争開戦直後の9月11日の事だ。笹本より1年若い1913年生まれであるから、このとき26歳。

“田口二郎来訪、館囑託として、滞在することにする。”実は田口二郎には二才年上の兄一郎がいた。二人はそろって9月20日から公使館で手

伝いを始めた。

スイスの山に憧れる二人は、イギリス留学中二人は、夏休みを利用してスイスアルプスの中心地グリンデルワルトに滞在した。するとドイツイギリスは交戦状態になり、帰国が難しくなった。そこで公使館員として雇われ、其のままベルンに住む事となる。既に公使館勤めの笹本はノンキャリア、田口兄弟は現地採用と似通った環境で、かれらは最初から意気投合したようだ。兄弟は週末のたびに、アルプス地方に出かけたと云う。

1942年6月11日、初めて、ベルン田口特派員発の記事が朝日新聞に掲載された。9月6日にはチュウリッヒ発田口特派員の報道が出ている。田口のアルプスに対する情熱は祖国が戦争になっても、朝日の特派員となっても全く衰えない。戦後間もなく紹介された田口の文章に一回想のヤング尾根 1943年7月一が有る。“久し振りに訪れたツエルマツトは、戦争で外来客が途絶え、さぞかししけていると予想してきたのに、思いの他の賑わい振りだった。村の狭い一本道を、ウィンパーのレリーフの掛かったホテル、モンテ ローザの手前まできたところで、顔なじみの案内オットーフラーが屈託のない足取りで、下りてくるのに出くわした。彼のしわくちやの日焼け顔にほうという驚きのいろがあらわれた。それもつかの間で、ついでベルンで物故した兄についての親切的な悔やみの言葉が述べられた。”

<その後>

笹本は笠、田口とは帰国を共にしなかった。

私どもは、笠さんを、単なる仕事上での大先輩として尊敬しただけでなく、人生の教師として深く傾倒したと言ったほうが正しい。

笹本が幾度か引用した一私のスイス案内一の末尾で、田口のスイスに対する造詣の深さを賞

賛している。

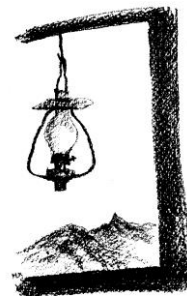
笹本と田口が揃って息を引取るのは、冒頭に書いた様に、1998年9月の事であった。欧州の没落とも云えるような様々な事件を体験してき、荒れ狂う日本を中立国から客観的に見る事が出来る立場に有った数少ない証人でも有る。

後記：

もっと、もっと田口大先輩の事をご存知のKACの先輩諸氏も居られます。又、大先輩のまじかにいて、晩年まで親しく接し、一山の生涯一や一東西登山史考一という大作の編集に大変尽力した、KACの同輩、平井吉夫君も居ります。

皆様を差し置いて、拙文を認めるのは、おこがましい限りですが、大正初期に生まれた、甲南山岳会会員の人生の一部を、小生なりの感慨をもって、辿らせて頂きました。

平成17年8月21日



— 追 悼 —

山 田 隆 雄 君

山 本 恵 昭 （昭 5 6 理）

昨年 1 1 月、南里先生からの連絡で山田隆雄君の突然の訃報を知り、驚きました。

はじめて山田君と顔を合わせたのは、私が甲南高校 1 年で山岳部に途中入部したときでした。先輩に石塚さん、吉田さん、同期に八木、大島。1 年下の学年には、山田君を始め、山内、渡辺、常岡、藤田、藤井、前田といった個性的なメンバーがそろっていました。あくの強いメンバーが多い中で、山田君は温厚誠実を絵に描いたような性格で、どこか照れたような控えめな笑顔がトレードマークでした。お父さんの仕事の関係で、ラジオやトランシーバーなど部で使う電気製品は、いつも山田君経由で安く購入させてもらっていました。そして、合宿では装備の担当になることが多く、その人柄のまま丁寧な仕事ぶりが印象に残っています。

思い出に残っている山行は、彼が中 3、私が高 1 の 3 月の遠見尾根合宿です。先生と先輩たちが五竜岳アタックに行っている間、テントキーパーの我々は、遠見尾根のテントサイトに巨大な雪の滑り台をつくり、遊んでいました。かなりのスピードで、かくねの里めがけて滑り転がっていました。あの時のみんなの屈託のない笑顔は宝物です。部全体に、山を楽しみつくす、活気のある雰囲気が有りました。

高校卒業後も大学で登山を続けていた私は、高校の合宿にも時々顔を出していました。ある日、彼は「僕は、高校卒業したらもう山には行かないので、良かったらこれを使ってください。」といって、いつもの笑顔でシュラフを差し出しました。当時としては珍しい、軽くてコン

パクトな羽毛の夏用シュラフです。本来なら大学の山岳部に勧誘しなければいけない立場なのに、有難く受け取ってしまいました。冬用シュラフを持っていなかった私は、自分の持っていた夏用の薄い化繊シュラフの中に山田君の羽毛シュラフを入れて二重にし、厳しい冬山でも安眠を確保できました。大学卒業後、ペルー・アンデスにも同じ組み合わせで行きました。登山活動後、現地の日本人研究者に「シュラフを譲ってほしい。」といわれた時も、なぜか山田君のシュラフを手放す気にならず、外側に使っていた自分のシュラフだけを渡し、山田君のシュラフはザックに入れて日本に持ち帰りました。それから二十数年、そのシュラフは今も私の手元にあります。

お互いまったく連絡も取り合わず、元気であるのがあたり前と思っていた山田君。人生これからという時に、残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りします。



－ 会 員 短 信 －

名誉会員・顧問

山本 三郎（名誉会員）

猛暑の厳しい夏から台風のシーズンを迎えました。小さな日本で床上浸水や山や海での遭難とテレビで観ながら皆さんに被害がなければ良いのにと思ったりしています。秋の集会盛会を祈ります。ねんりんピックで強化練習の時季で欠席します。

創部 80 年の歩みを小川先輩から聞けることを楽しみに、また皆さまのお顔を見ることを楽しみに、喜んで参加させて貰います。

平井 一正（名誉会員）

7 月中頃、雨宮山荘にご案内いただき、越田・平井・武田氏らと懇談しました。今回の「駒王」は都合により欠席いたしますが、甲南山岳会の皆様と懇談する機会を再度もちたいと希望しております。

昨年 12 月東京慶友病院に伊藤 愿さんの奥様をお見舞いしました。昔の話を聞かせていただき大変有意義でした。山岡さんもお見舞いしました。伊藤（文）・越田・平井氏と同行しました。

神戸 謙司（中高山岳部顧問）

いつもお世話になり、ありがとうございます。今年の夏合宿は高3生1名・高2生2名と小パーティーでしたが、剣岳に登って来ました。夏休み前に新入部員募集のポスターを作りましたが、今年は残念ながら、新入部員がありませんでした。大学では新入部員を迎えられ益々活躍期待しています。中高もがんばっていききたいと思います。近いうちにご一緒できればと思います。

中高山岳部員として6年間がんばった生徒、山内寛之・神澤 太一・北川 裕也が卒業しました。山内は東京の日本獣医畜産大学へ、神澤・北川は甲南大学へ進学しました。名々が活躍してくれる事を祈っています。また、甲南山岳部・山岳会の発展を祈っています。中高部員 長宅（高3）・村上（高3）・池上（高3）も頑張っています。

旧制高校

関 集三（旧 10 理）

本年、卒寿を迎えすっかり老人です。日本学士院会員としての、毎月上京の例会出席も 19 年目です。本夏の炎暑、毎日の午睡をとり何とか体調を保っております。岩波文庫（2003）「近藤編：山の旅・大正・昭和編」を読みながら、往時を回想しております。皆様のご健勝・ご活躍を祈り上げます。

昨年、卒寿を迎えすっかり老人となりました。誠に残念ですが、体調を保つため、夜の会合には成るべく出席しないことにしており申し訳ありません。皆様にお会いし、小川さんにもお目にかかりたいのは、山々ですがお許しください。日本学士院の毎月の例会には東上しており 20 年目となり、一応年令限度の体調です。皆様にもよろしく。

佐野 源一（旧 10）

体調不良で残念ながら欠席します。膀胱がんの方は昨年 7 月（4 回目）手術以来 3 ヶ月毎の検診を受けていますが今の所無事です。腰痛・肩痛は、週 3 回程度リハビリに通っています。腰痛では余り長く歩くと痛くなってくるので、毎日散歩するのも 1 軒程度に止めています。車の運転を今年の誕生（89 才）日で諦めました。

今年正月早々、2000 年に発病した膀胱がんの 5 回目の手術をしました。現在週一回抗がん剤の注入を受けていますが、後一回で終わりだそうです。本年 6 月に 90 歳になります。腰痛があり一寸動くとひどく痛むので、リハビリに通っていますがあまりパットしません。そんな訳で総会にも出席出来そうにありません残念です。ご盛会を祈ります。

2004（平成 16）年秋「木曽福島集会出欠」と 2005（平成 17）年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

山岡 静三郎 (旧 11 理)

甲南山岳会の大先輩 伊藤 愿は 1929 年高校を、次いで京都大学法学部を卒業され、高等文官試験に合格し官史として活躍されました。非常に偶然の機会に末亡人、房子様にお目にかかりご生前の資料を拝見しまして日本とスイスアルプス登攀記録を纏めて機関誌に投稿しまして関係者のご尽力で掲載が内定しています。

来る 4 月 14 日、下記に転居いたします。

奥山 正雄 (旧 12 文)

いつも御世話になっています。小生は至って元気です。当日所用あり残念ながら参加できません。皆様に宜しく。

元気です。

國府 雄次郎 (旧 12 理)

遠くへは出ずらくなりました。理由はお察しください。

兎も角 馬齢を重ねております。馬脚を現さず、馬の耳に念仏の生活を続けて、馬ずくしだなー！アア・干支が馬の男だからね！

山口 雅也 (旧 13 理)

老齢のため独りで遠出はやや無理なので欠席しますが皆様によろしく。

体調不良のため日常生活には大して支障はないのですが、遠出は無理なため残念乍ら欠席しますが皆様によろしく。

武田 六郎 (旧 13 理)

8 月に転居しました。

赤松 二郎 (旧 14 理)

近頃は身近な人の訃報を聞くばかり、私も 85 才、家に籠もる毎日を過ごしております。外出するのもおっくうになりました。それにボケてきたのがなんとも情けなし。

02 年 8 月 28 日に上高地から焼岳小屋に一泊し中尾を下ったのを最後に、今ではふだんでも家を出る時には杖を手にするようになりました。(05/03/18 85 才)

鷲尾 顕 (旧 15 文)

ご案内有難く拝見。息災の日々です。ご出席の諸兄によろしくお伝え下さい。

ご案内有難うございました。久しぶりに山の仲間に出会えるのが楽しみです。寸陰愛惜の日々。

伊藤 文三 (旧 15 文)

秋の集会、乗鞍から木曽駒に移ってから一度も参加していないので、是非と思いながら、毎年都合つかず、まだ参加するくらいの体力はありますが、今年も不本意ながら欠席いたします。

日常生活には、さしつかえありませんが関西まで行く元氣なく総会パスさせていただきます。ロックガーデン慰霊祭、昨年はフクデンのため参加しましたが限界でした。次は銅板の参加ですね。

小川 守正 (旧 17 理)

大学山岳部の復活、心から喜んでおります。それを果たして下さった方々に感謝。こちら、ひょんな事から甲南病院の再建にかかわり、何とか形が見えてきましたが、秀鷹ゴールドマンサックスと最後の激戦を展開中です。山岳部復活に元氣を得て、何とか判定勝ちに持ち込めそうです。山岳会の発展と皆様の健康を祈ります。

福井 實 (旧 17 理)

ご無沙汰しています、年初に調子を崩しましたが、回復し、毎日元氣にやっております。
総会には是非とも出席したいと思います。慰霊祭

には家族のみんなの猛反対で、残念ながら欠席です。

津田 昌男 (旧 18 理)

山岳会の秋の集会のご案内ありがとうございます。主人は 82 才の高齢といろいろの病気と共に欠席いたします。どうぞ秋の集会がすばらしい時でありますように、お祈りいたします。 津田 昌男 内

いろいろの病を抱えて療養中です。外出もままならず、老後を静かに暮らしています。ご案内ありがとうございます。 代筆

茂木 光隆 (旧 18 理)

秋の集会が乗鞍から木曽駒に移ってから、一度も参加できず残念です。骨髄の造血機能障害は、忒度程度の所で安定していますが、今春これとは別の手術入院してから、ますます脚力が低下し、とても遠出できる状態ではありません。すばらしい秋の集会と諸兄のご健勝を祈ります。

ご連絡有難うございました。この頃すっかり脚力がおとろえ、遠出することはありません。

國府 三郎 (旧 18 理)

お手数有難うございます。不参加失禮申し上げます。病気ではありませんが、脚力弱まりました。コンナ事では不可と、毎日 2～3 km 歩いています。ラジオを聴きながら。皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

ご連絡有難うございました。不参加失礼申し上げますが、所で坂道を登った後、同行の人から息が乱れない事をホメられますが、(オセジ言われますが) 山岳部のお陰でしょう。

岡橋 節三 (旧 19 文)

毎度お世話様です。あいにく体調万全ではありませんので、今回も欠席いたします。皆様によりよくお伝えください。

体調は、まあぼちぼちというところですが、やはり遠出は無理なので失礼します。皆様によりよく

伝え下さい。

丸山 照夫 (旧 25 文)

体調を少しくずしております。

いつも欠席で申し訳ありません。

伊藤 五介 (旧 26 文修)

元気にしています。諸兄によろしく。

2004 (平成 16) 年秋「木曽福島集会出欠」と 2005 (平成 17) 年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

新 制 高 校

中井 久夫 (新高 S27)

本年 3 月で第二の甲南生活 (文学部人間科学科) も定年で終わりとなりました。7 年と第一の 6 年より 1 年長かったはずですが、前回と違いあつという間に過ぎました。陛下と同じ前立腺癌の手術が少しこじれ、そのうちに患者を他に紹介、臨床も自然消滅となりました。また以来夏に弱く、今年はことに参りました。精神科の本の翻訳・時に論文・時に臨床相談 (医者の) のにのっています。

昨年春、甲南大学 (文学部人間科学科) を退職し、今春、非常勤講師も終わりました。在職中は小生をよくしてもらったとありがたく思っております。その間、甲南大学人間科学研究所が設立されたり、文部省の学術フロンティア計画に採用され、その後の進展も評価されるなど、発展的な時期に出会ったこともうれしいことでした。

米山 悦朗 (新高 29)

例の通りアフガニスタンです。

塩田 邦博 (新高 S32)

腰椎骨折の為当分登山は不可能です。

平井 吉夫（新高 S32）

井上 知三さん、幹事ご苦労様です。

日本山岳会創立 100 周年記念の図書・総企画展なるものも企画・制作・進行を越田・大阪外大 OB の田村 俊介氏と一緒にやっています。総会の頃が一番忙しい時期になりそうなので、残念ですが出席をひかえさせてもらいます。皆様によろしく。

竹原 祐爾（新高 S33）

皆様によろしくお伝え下さい。8 月立山連峰に登りました。

山城 國暉（新高 S36）

所用のため秋の集会欠席いたします。盛会を祈ります。

所用のため欠席させていただきます。皆様方によろしくお伝え下さい。

永島 孝男（新高 S37）

東京で最後のサラリーマン生活を送っております。

乾 卯兵衛（新高 S37）

今年創業 149 年来年 150 年を迎えることとなるのですが皆、サラリーマン化して少しも動いてくれません。創業者 5 代目会長としてどの様にして上手に人を使うかと毎日、頭を悩ましております。KAC で独身者であれば会社の後継者でもないかと考えております。私の中尾平の別荘の計画はまだまだ先の事です。

中尾平の山小屋の作る案、会社の営業悪く、後数年はかかります。私たち夫婦には子供はいなく商売を継ぐ方向で養子養女を探している最中です。

乾卯兵衛氏は平成 17 年 6 月 7 日心不全のため逝去されました。
ご冥福をお祈りし謹んでお知らせ申し上げます。

川村 静治（新高 S40）

本格的な山登りは長らく行っていないですが、今年の正月は住吉の自宅から家族を連れて寒天山道を六甲山上まで登り更に六甲山牧場まで歩きました。六甲には珍しく 30 cm 程の積雪に足をすべらせながら、まだ歩ける事が分かってほっとしています。

福田 裕久（新高 S45）

二度目の白内障の手術も済み（3 月末）体調が良くなれば、秋頃から丹波近郊の山歩きをしてみたいなと思っております。

瀬戸 貴正（新高 H8）

今年九月より個人商店ですが、独立し食料品卸を商っております。先輩方のアドバイスを頂ければと思っております。大型バイクの免許を取得しましたので現地へはバイクで行こうと思っております。

白川 浩平（新高 H12）

昨年 12 月より 3 ヶ月間、大阪の PUMP というクライミングジムでクライミングスクールに通いました。5.10d のオンサイト・5.11a のレッドポイントが今のところ最高です。最近国体等にもフリークライミングが競技として取り入れられ大勢の高校生が部活でトレーニングしていました。今度は、娘と一緒にクライミング&キャンプを楽しみたいと思います。

大 学

小原 耕治（大 31 経）

集会で皆様に逢えることを楽しみにしております。幹事さんには毎度お世話になります。感謝！

元気で過ごしております。会員諸兄にお逢いすることを楽しみにしております。幹事役毎度の事乍ら御苦労様です。感謝！

阿部 純一（大 31 経）

元気にやっています。小川先輩のお話楽しみにしています。4/24 日は所用のため欠席

砂川 彰雄（大 32 経）

集会御案内有難うございました。一年振りに皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。気持ちは元気ですが、体が少しずつ言うことをきかなくなってきました。

昨年 11 月で、未だがもうの 70 才になってしまいました。なって見ると、あっちこちに老化現象が出てきていることに気づきます。しかし沢山することが残っているので頑張って高遠小屋をペースにしてやっていこうと思っています。総会の盛会を祈っています。

柳澤 正（大 32 経）

幹事役ご苦労さま、感謝して居ります。運悪く寮歌祭と重なり、今年は欠席させていただきます。先日（8 月下旬）白馬へ行きました。嘗ての細野の変わり様に驚き、また自分のこと乍ら歩く速度の遅さにも驚きました。（幸い天候が良かったので無事でした）。

いつものこと乍ら、幹事役ご苦労様です。深謝しております。幸いにして、日々は元気に過ごしています。総会で皆様とお会いすることを楽しみにしています。

宮本 侑（大 32 経）

24 日は仕事のため欠席します。山岳部の部歌が甲南学園の部歌の CD の中に入り出来ているそうです。が当日聞くことが出来ますか？小生も平生記念館 同窓会事務局で 1 枚購入するつもりでいます。

鈴木 頼正（大 33 経）

7 月に白内障と前立腺の手術をしました。まだ長い時間運転できないので、J R にて参加する予定をしています。

彼岸も過ぎ、ハイキングとゴルフを始めようと思

っています。又、機会があれば海外トレッキングに出かけたいとツアーカタログを取り寄せて楽しんでいます。ハイキングもゴルフも仲間が少なくなり淋しい思いです。

田辺 潤（大 34 経）

幹事さん、いつもご苦労さまです。9/18 からの 3 連休の初日は、たまたま家内が孫の幼稚園の敬老会に出るため東京へ行きますので、一人で高遠へ行こうと思っていたら、板取川 川浦谷海の溝谷への誘いが浪川君よりあり、喜んでおります。10/9 は幸ノ川にも参加します。

幹事の皆さんにご迷惑をおかけしました。お返事遅れて申し訳ありません。参加したいと考え日程調整のため悩んでおりましたが、結局参加できないこととなりました。この年令になってモーレツに多忙となりましたが、いたって元気に頑張っております。

芦田 匡平（大 35 理）

春の穂高では、エーエ（良い）酒呑まして頂いて、スッキリ・スッキリ致しました。感謝です。10 月はオヤジの命日の近くとなり家にいることに致します。皆様に宜しく。

一泊二日の先約有り欠席します。尚、6 月の穂高・秋の馬場島には出席します。皆様に宜しく。

美田 靖夫（大 35 経）

カンバックを目指し 8 月 14・15 日と須磨の海で泳ぎ悦になっていたら、悪天候が一週間ほど続き現在待機中、明 8 月 22 日には泳げる波の高さになると思います。ズバリ勘が当たったのでトンチを誘ったら曇っているから「いやや」という事でしたので一人で泳ぎに行きましたが、水温と気候の温度差がなく快適でした。次は満月の夜も泳いでみるつもり誰かつきあいますか。

どうゆうわけか若手 OB からスキーに行きませんかとか教えて下さいとのオチョコリとも思われる連絡を戴くようになった。どうゆうわけか 2 月 24 日（木）マッサラの 5 年程前に購入した本格的登山靴をひっ

ぱりだして現在ならし中、誰か神戸市庁の25階に登りませんか。

鳥居 威男（大35経）

元気に過ごしております。登山・ジョギング・プールと動ばかり、今年から静に軸足を移しスケッチを始めました。なかなか面白いものです。どこまで上達するか先が楽しみです。

年齢のためか、体力が最近特に落ちて来ました。六甲山でも今まで40分で登っていたところが、1時間近く要するようになりました。今後も体力作りに励みます。

伊丹 弘忠（大35年経）

お世話になります。元気にしております。皆様とお会い出来ることを楽しみにしております。

元気にしておりますが、先約があり欠席します。氣候もよくなり鳥居さんに山へ連れて行ってもらいたいと思っています。

牧野 宏（大36経）

父(93才)母(88才)ともに至って元気です。DNAを継いでいるはず。まだ先、長い。有難いことです。

小川先輩の講演・ロックガーデン楽しみにしております。

藤安 賢一（大36経）

この頃はハイキングは休み住吉川を海まで往復する毎日です。秋になって涼しくなれば又、仏舎利から打越山を経て横池や更に足を伸ばして雨が峠など行ってみたいと思っています。宿泊コースは便器の関係が整っていないので無理です。

最近足元が危なっかしくなりハイキングは時々行く事とし、もっぱら平地歩行にほとんど毎日出掛けて行きます。皆様にお目に掛かるのが楽しみです。

越田 和男（大36理）

6月にドロミテとチロルで遊びましたので、7・8月はおとなしく猛暑をしのいでました。涼しくなったので活動開始します。9月第1週は奥秩父・金峰山で久しぶりに小屋泊まりしてみます。現役新入部員を迎えて何よりです。山の趣味は一生ものです。末永く楽しんで下さい。

この4月はフンザへの小旅行に出かけます。相変わらず山見遊山です。

廣瀬 健三（大36経）

何時もお世話様です。山岳会・山岳部の活発な山行きをインターネットで楽しんでいます。分けても現役の人達の動きが新鮮で嬉しい事です。(甲南大/ワングル・探検部とのカケ持ちの山岳部員など出ませんかね)

何時もお世話に成ります。昨秋に登った北摂の名峰 剣尾山(784m)は期待通り良かったです。(少し物足りなかったですが)元旦に近くの里山に登ったら山頂に雪が残っており嬉しく思いました。足腰の鍛錬を兼ねてテニスをやっています。(1時間程度打ち合うと結構ハードです)

大関 和夫（大37経）

体も元気になり、孫とグアムの海へ行って来ました。ジョージイと海外に行く美味しいものが出てくるので、家族が皆ついて来ます。信州の山荘での料理、ますます腕を上げています。8/10 東京での飲み会を開きました。

昨年は、体調不良で欠席でしたが、今年は越田さん他東京組で出席します。スキーは75才目標にして、皆で続けて行きたいと思います。花見会のための我が家のテラスのペンキ塗りをしています。

柏木 宏文（大37経）

相も変わりませず、自宅療養でございます。寒がりですが家にこもっております。暖かくなりましたら公園散歩に出かけようと思っております。ご盛会お祈り致します。 柏木内

飯田 進（大 38 経）

今年の夏は、ことの他暑かったですな。猛暑の後は雪が早いとか。スキーシーズンが早く来る事を期待しています。駒王にて皆様にお会いするのを楽しみにしております。

昨日 4 月 2 日大関宅に 13 名が集まって花見会を行いました。14:00~20:00 まで飲んで食ってダベって楽しい時を過ごしました。

二谷 和成（大 38 経）

いつもお世話いただきありがとうございます。月に 1~2 回近郊の山へ出掛けています。10 月の 11 日前後に残雪の 5 月に行った蝶ヶ岳に新雪？と紅葉の槍・穂高を眺めに行く予定です。今年は残念ながら欠席します。皆様によろしくお伝え下さい。

体力の限界を感じながら、2~3 の同年代のグループと近郊の山へ出掛けております。昨年は蝶ヶ岳へ残雪の 5 月と紅葉の 10 月に行きました。今夏は西穂へ登ろうと思っています。

福田 信三（大 39 理）

幹事御苦労様です。皆様にお会い出来るのを楽しみにしています。今秋にゴージャスピーク挑戦します。

現役の活動ぶり、熟年の活躍ぶり山を起点とした自由な動きが甲南らしいと思います。「山岳部」という名が妙にこわばってきました。

武田 雄三（大 39 経）

お世話役の皆様サンに感謝。今年大学山岳部に 4 名のアクティブメンバー入部。ウレシイ限りです。出来得る限りのサポートに努めます。

幹事役の皆様、いつも乍らご苦労様です。

森本 全彦（大 39 法）

幹事の方にはいつもお世話になり、ありがとうございます。残念ながら今回は欠席させていただきます。

事務局の方々、いつもお世話になります。現役、森本・谷君の加入で、またスタートと開始で嬉しく思っております。昨年は骨折で十分な山登りが出来ませんでした。今年は完全復帰です。3 月に行った火打山はしんどかったです。体力落ちたようで少しさびしく感じました。

水渡 清夫（大 40 営）

6 月末で会社をリタイアしました。これからは、山・釣り・旅行・・・と思っています。東京組の「飲み会」にさそってもらって越田さん・大関さん・他諸先輩と酒を飲んだりしています。※住所が変わりました

昨年 6 月末で会社勤務終了。毎日、なにやかやる事があってしたいこともあって、なかなかヒマにはなりません。元気ですが足腰は弱くなりました。

竹中 統一（大 40 経）

残念ながら先約の為欠席させて戴きます。先日、柏氏をはじめ例年のメンバーで濁沢より奥穂高へ登頂、岳沢より上高地に下山しました。丁度台風通過で北アルプスの絶景を味わうことが出来ませんでした。スキーは例年通りツェルマット・シャモニーで五月に氷河を滑降しました。3800mのエギュードミディよりバレーブランシェを快適に滑りました。

安井 正（大 40 経）

9 月末でサラリーマン生活が終わりました。人並みにブラック往復ができるよう体を絞ろうと思っています。今のところ・・・

鶴木 洋（大 40 文）

昨日、屋久島より帰って来ました。64 才という年令は山で会う人の中で最高齢に近い人間になりました。残り何年歩けるのだろうと思っています。皆様に宜しくお伝え下さい。

元気です。今年は 65 才になります。今年は積雪が

多くて大変でしたが、7回の山行が出来ました。そろそろ山行も定年にしようかと思っています。

奥山 正紀（大40法）

元気にしております。4月末に伊丹と馬場島に行き剣岳望み、9月には伊丹と富山に行き市役所の展望台より立山連峰を見物して来ました。

井本 洋（大40理）

元気にやっています。皆様によろしくお伝えください。

伊丹 徳行（大40法）

幹事さんご苦労さまです。来年は是非出席します。5月の連休にオクンと馬場島に行きました。慰霊碑を参拝し付近を散策しましたが早月尾根の取付がじゃまになり、剣を見る事が出来ませんでした。そこで穴場を。駐車場から上市へ向かって400～500mの所に左へ上がる道があります。上がると「家族の森中央管理センター」があり4階が展望台になっています。早月尾根から剣、剣から北への小窓・大窓が見えます。

平々凡々の毎日です。マル秘宿場発見、11月から4月まで休みです。テレビ受信出来ず・電話なし・携帯電話受信出来ず・公営水道なくわき水のみ・隣の家まで車で20分～30分・ガスはプロパン・風呂はマキでわかす・交通はバスがなく車のみ。どうですか？5月に行く予定です。よければ電話ください。

藤原 邦彦（大40法）

手術後ボチボチ生きています。

井上 徹（大41営）

いつもありがとうございます。皆様によろしくお伝え下さい。11月の七・五・三の仕事が終了したら、引退を考えております。

昨年11月に家内と二人で大室高原の別荘に生活拠点を移し、大自然の中で、田舎暮らしを楽しんでいます。そんな生活を下記URL（Yahoo! 叩）にてご

覧いただけます。

http://blogs.yahoo.co.jp/izu_sennin/116532.html

柏 敏明（大41経）

残念ながら出席できません。ご盛会をお祈りいたします。

幹事の皆様、いつもお世話頂き有難うございます。今年になって何回かスキーに連れて行って貰いました。皆さん上手でびっくりしました。下手は下手なりに楽しいものです。総会・慰霊祭の頃は生憎出張の為欠席させていただきます。小川先輩の講演を聞けず残念です。是非「山嶽寮」にお願いします。

森岡 宏光（大43理）

いつも欠席すみません。先日、妻と二人で8/21～8/24東北の山を登ってきました。

＜晴れ＞ 8/21（土）車吾妻山 1,975m

＜晴れ＞ 8/22（日）安達太良山 1,700m

＜雨＞ 8/23（月）磐梯山 1,819m

＜雨＞ 8/24（火）西吾妻山 2,035m

百名山挑戦中アプローチの長いきつい山行でした。

いつも欠席すみません。皆様によろしくお願い致します。

國分 廣昭（大43経）

ぼちぼち元気です。今回は都合で行けません。

頼富 信輔（大43法）

毎年のご案内ありがとうございます。今年こそは総会に出席しようと日程を調整しましたが残念ながら欠席です。山岳会の発展を祈念しております。（返信が送れて申し訳ありません）

佐崎 栄二（大43文）

卒業後一度として同席かなわず申し訳ありません。甲南山岳会のOBの末席に居られるのも横山先輩（故人）のおかげです。また昨年は、還暦同期の国分・森岡・頼富の三氏が私を訪ねて励ましてくれました。有難い限りです。ベルグハイル__。

石原 浩二（大 44 理）

関係の方々いつも有難うございます。年間数回の山に登っております。

関係の方々御苦勞様です。毎年の事ながら感謝しております。今年の秋、空木岳に登ればいいな！と思っています。

赤田 友則（大 44 理）

8 月九州（日田）の社有林に登りましたが、すべって足をすりむきました。日頃歩かないとダメです。現在国産材は外材に押され、手入れができない山が多く問題です。国が公団造林という制度で分収林とする方法がありますが、中々進みません。国産材の復権が必須です。アイデアありませんか。

3 月に三重県・大分県の社有林に行つて（登つて）フウフウ言っています。新卒大学生の求人活動担当していますが、京都府立大の学生（山岳部）内定（18 年卒）しました。冬季 硫黄尾根・剣等レベル高いようです。話が合つて楽しみです。4/23 営業発表会議の爲欠席します。

南里 章二（大 45 理）

御苦勞さまで。毎年、この頃は学校行事と重なり出席できませんが、皆様方に宜しくお伝え下さい。9 月 2 日に帰国し、締め切りを過ぎた原稿「アララット山登山」大森君のご好意で受け付けてもらえました。

お役目ご苦勞様です。会員の皆様方にお会い出来ることを楽しみにしています。去年暮れには、ベトナムに 2 週間、また 3 月末にも 2 週間ベトナムに出かけてきます。月刊「アジア倶楽部」に 4 月より連載を始めます。宜しければ御覧下さい。

矢吹 操（大 45 理）

元気でおります。ジョギングも 10Km 1 時間を切ることが少なくなりました。

元気です。健康維持の 1 ツとして週 1 回 10km～20km をジョギングしています。

平井 幹男（大 50 文）

最近少し山に登りたくなってきました。ゆっくりと山をもう一度登りたくなってトレーニングを始めようと思っています。

朝倉 満（大 50 法）

喉頭癌をわずらい、今手術入院中です。集会の折は退院してと思いますが、掛かることで欠席させていただきます。会員の皆様も（特に 50 才を越えた方々は）、身体チェックをし気をつけて下さい。誰もまさか自分になるとは、思いもしないですから。

村田 信一（大 50 経）

いつも、ご連絡ありがとうございます。卒業して 30 年 同期会を行いました。桜満開の桜ノ宮・大川を歩いて我が家で半日過ごしました。早川ご夫婦・朝倉・高橋・写真部の北浦という顔ぶれです。来年引っ越すので次回もっと盛大に集まりたいです。

松下 哲夫（大 52 理）

連絡遅れまして申し訳ありません。

大柳 香代子（大 51 法）

いつもお世話になります。今のところ遠方には出かけられませんので、ご案内のハガキの送付はおひかえ下さい。宜しくお願い致します。私ども元気でおります。

大森 雅宏（大 53 文）

異動で診療所の医事課勤務になって 1 年経ちました。仕事にストレスはつき物ですが、世間様に比べるとリストラの波に洗われることも無く、まずまず穏やかに暮らしています。

要 裕晶（大 55 営）

ご案内ありがとうございます。今年は、現役の皆さんにもお会いできましたら嬉しいです。

川野 幸彦（大 56 理）

元気にやっています。今年は体調も良く積極

的に山登りを行っています。「雪山に出掛けようかな」とも考えています。この夏久しぶりに穂高にも行きました。疲れましたが、懐かしかったです。機会があれば皆さんと登りたいです。木曽の集会は参加の予定です。よろしくお願いいたします。皆さんにお会い出来ることを楽しみにしています。井上さんいつもありがとうございます。

大阪に転勤してから半年が過ぎました。ようやく朝の満員電車にも慣れました。ただ登山からは遠ざかりつつあります。松本からは、北アルプスまですぐに行けますが、大阪ではそうはゆきません。要さんとは、同じフロアに居ます。よく飲みに行きます。何か集まりがある時はご連絡ください。

山本 恵昭（大 56 理）

ひざの不調をだましだまし、山を楽しんでいます。

昔は一人で山に入ることが多かったのですが、最近はいろいろな方と御一緒させていただく機会がふえました。楽しみ方の幅が広がったように思います。

今井 啓介（大 56 経）

いつも欠席で申し訳ありません。8月に月山に登り、20数年振りに山歩きをしました。又、正月にはオーストリアのエッタールゼルデンという所でスキーを楽しむ予定です。

4月から福岡に転勤になります。24年に渡る関東での勤務から関西を飛び越えて、九州での生活に毎日観光ガイドブックを見て憧れを寄せています。

新住所:福岡市中央区平尾 3-10-3-502

八木 健（大 58 経）

毎回の御案内ありがとうございます。最近山から遠ざかってしまい、又皆様にもご無沙汰し申し訳ありません。機会をつくって復帰したいと思っております。盛会を祈念しております。

西名 俊英（大 61 理）

毎回案内を頂きありがとうございます。2003年5月に屋久島に行って以来山はご無沙汰です。2004年2月に女子が誕生し、なかなか外出も思うように出来ない日々です。

松山 弘和（大 61 理）

昨年は、参加できなかったのが今年は参加致します。9月に槍ヶ岳に行きました。

吉川 寛（大 H5 経）

大変ご無沙汰しております。卒業後は仕事の休みが連続してとり難いこともあり、山はすっかり登らなくなっております。当日は最近の趣味であります自転車のレースに出場する為出席ままなりません、また宜しく願い致します。

阿部 康彦（大 H6 法）

故郷に帰って半年、生活もようやく落ち着きました。部室に行くと鍵が閉まっていて中に入らず寂しい限りです。

松成 健（大 H8 文）

MR認証試験合格しました。これで一安心出来ます。転職して以来、車通勤の毎日で体重が重くなる一方で。また酒量も増え先日の夜桜花見では大失態を犯してしまいました。日ごろの生活を考える毎日です。

2004（平成 16）年秋「木曽福島集會出欠」と2005（平成 17）年春「総會出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

－ 報 告 －

定 時 総 会

日 時 平成17年4月23日(土) 場 所 平生記念セミナーハウス

出 席 者

山 本 三 郎	名誉会員	平 井 一 正	名誉会員	神 戸 謙 司	中高顧問
國府雄次郎	旧12理	奥 山 正 雄	旧12文	鷺 尾 顕	旧15文
小 川 守 正	旧17理	福 井 實	旧17理	北 方 龍 一	新高30
乾 卯 兵 衛	新高37	阿 部 純 一	31経	小 原 耕 治	31経
宮 本 侑	32経	木 全 実	32経	柳 澤 正	32経
鈴 木 頼 正	33経	雨 宮 宏 光	33経	鳥 居 威 男	35経
牧 野 宏	36経	廣 瀬 健 三	36経	越 田 和 男	36理
藤 安 賢 一	37経	大 関 和 男	37経	二 谷 和 成	38経
飯 田 進	38経	武 田 雄 三	39経	安 井 正	40経
鵜 木 洋	40文	伊 丹 徳 行	40法	浪 川 純 吉	42営
國 分 廣 昭	43経	南 里 章 二	45理	井 上 知 三	48文
平 井 幹 男	50文	大 森 雅 宏	53文	要 浩 晶	55営
山 本 恵 昭	56理	川 野 幸 彦	56理		
現役					
森 本 寛 之	理工3	藤 本 貴 大	法3	谷 勇 輝	理工2
江 田 和 則	文1	神 澤 太 一	文1		

議 事

1 会 長 挨 拶

2 16年度事業報告

慰 霊 祭

山 嶽 寮

木曾福島集会

中高活動報告

3 16年度会計報告(別記)

4 17年度事業計画

慰 霊 祭

山 嶽 寮

木曾福島集会

5 絵画寄贈について(別記)

6 大学部員紹介

7 創部80周年記念講演

絵画寄贈について

旧制 11 回 山岡静三郎氏よりご寄贈いただきましたマチャプチャレの風景画は、氏が 1989 年 11 月ネパール訪問の際、ポカラでその迫力に圧倒され記念にと購入されたものです。画家 YADAB CHANDRA BHURTEL 氏の手によるマチャプチャレの実影と湖に映った逆影を描いた油絵で、画商によればこの画家はこの国ではトップクラスとのこと。

額装 (55×70cm)



ご寄贈いただきました絵画は、雨宮会員の山荘にて保管することになりました。

会計報告

会計 山本恵昭

－ 行事報告 －

秋の集会 木曾福島

平成16年10月10日(日)～11日(月)

木曾駒文化公園施設「駒王」にて開催された秋の集会。この日も大勢の会員が集まり、夜の更けるのを忘れました。

今年のニューカマーは神戸から大型バイクで参加の瀬戸貴正君(平成8年甲南高校卒)。参加者ご紹介は下の写真で。



	塩崎	瀬戸	川野	現役森本	松山	大森	山本(真)	
越田	浪川	伊丹(弘)	田辺	飯田	牧野	鳥居	平井(吉)	大関 山本(恵)
米山	砂川	雨宮	阿部(純)	小原	鈴木(頼)	宮本	武田	

ご参加の皆さんから

§ お世話になりました。先輩後輩いろんな人と話がはずみ時間がたりないくらいでした。

一寸飲み過ぎて翌日に差し支えましたけど。 越田和男

§ 高校卒業の瀬戸君や現役森本君の参加で何時も以上に盛り上がって盛会でした。

幹事さんご苦労さまでした。 塩崎将美

§ あいにくの天気でしたが「キノコ狩り」に「盛大な宴会」と楽しい3日間でした。

「キノコ狩り」は癖になりそうです。 川野幸彦

§ 前日の恋路峠小屋といい、各種お酒の飲み続けご馳走の食べ続けの2日間でした。

いつもの山メンバー+久々にお会いする方々との歓談、楽しかったです。 山本恵昭

§ 初めて会う多くの先輩方とお話ができて、改めて偉大な先輩方を輩出しているという

山岳部の伝統の重みを感じました。 森本寛之

慰 霊 祭

平成17年4月24日

参 加 者

神戸謙司	中高顧問	鈴木頼正	33 経	牧野 宏	36 経	越田和男	36 理	廣瀬健三	36 経
大関和夫	37 経	二谷和成	38 経	飯田 進	38 経	武田雄三	39 経	鵜木 洋	40 文
伊丹徳行	40 法	安井 正	40 経	塩崎将美	41 経	浪川純吉	42 営	國分廣昭	43 経
石原浩二	44 理	南里章二	45 理	井上知三	48 文	山本真博	48 理	大森雅宏	53 文
山本恵昭	56 理								
谷 勇輝	理工2	長宅智行	高3	村上恭央	高3	池上弘倫	高3	田中 僚	中3

お 客 様

横山加壽子様

本田依子様

金井健二様 神戸大OB

宗實二郎様 報徳高OB

居谷千春様 神戸大OB



屋 久 島

塩 崎 将 美 （昭41経）

メンバー 鵜木 洋 塩崎将美

期 間 2004年9月12日－9月18日

計画立案者のカンさんの突然の不参加で二人きりの山行になりました。カンさんには食料計画、買出しとお世話になり、そのうえ梅田まで手を吊って足を引きずって見送りに来て頂き有難うございました。差し入れのグレープフルーツ、重い重いと言いながら担ぎましたがおいしかったです。餅も重たかったですがお澄ましの雑煮、美味かったです。感謝です。

大阪梅田より夜行バス（往復¥20,100）で鹿児島へ、フェリー往復（往復¥8,000）で屋久島宮之浦港へ、バス（¥980）、タクシー（¥6,000）を乗り継いで淀川登山口へ、50分で淀川小屋（泊）。ほとんど標高を稼がない楽な一日目。

翌朝6時出発、良く整備された登山道を登る。途中のピークはほとんど巻き道です。10時40分九州の最高峰宮之浦岳頂上（1,936m）。



宮之浦岳頂上（1,936m）

淀川登山口を早朝出発すると1日で往復するのは我々の年齢でも十分可能です。永田岳往復はガスが出てきた為(?)諦めました。永田岳は岩が所々突き出し見た目平凡な宮之浦岳にくらべ見た目も良い登ってみたい山です。2時前に新高塚小屋着（泊）。荒川登山道は登った淀川登山道より道が荒れており整備が遅れています。水場も登りは頂上の直ぐ下が最後の水場であちこちに有りますが荒川登山道は小屋まで水場はありませんでした。ピークも捲く事無く下りのはずが結構登りもありますし急です。小屋には一番乗りで場所を確保。遅く到着した3名は泊まれず高塚小屋へ下りました。それ以外に小屋に入りきれずテントを張ったのが3パーティー。小屋の周りに木で作ったテラスがあります、此处にテントを張るのも快適そうですし小屋の中より快適にくつろげます。小屋の横の水場は”煮沸して使用の事”と看板が有りショック。トイレが近い故か？トイレも山盛りで使用に耐えず。ガイドも客の女性に林の中へ二人以上連れ持って行くように言っていました。

ガイドに別の水場を教えてもらい、小屋から2-3分下った登山道の横に綺麗な水場がありました。下りに汗をかいいた二日目でした。

三日目も朝6時に小屋を1番で出発、途中縄文杉、夫婦杉、ウィルソン株等々を見物しながらひたすら下り、9時30分大株歩道入り口着。橋の上から安房川を眺める。屋久島の沢は水量多く花崗岩の巨岩がゴロゴロありどれも素晴らしいです。屋久島を再訪するならば是非沢に入りたいと思いました。トロッコの軌道を1時間ひたすら歩いて楠川分岐着。この間が最悪、登ってくるガイドに率いられた

観光客(登山客?)の団体が続々、すれ違いに苦労しました。淀川登山口から縄文杉までは出会う人も少なく静かな山でしたが、荒川登山口から縄文杉までは観光地です。この団体に途中の登山道ですれ違ったらと想像するだけでぞっとしました。早い出発が大正解でした。50分の登りで辻峠。タイコ岩に15分で登りすばらしい眺望を楽しんでから白谷雲水峡をゆっくり時間をかけて、周りを眺めながら下りました。アニメ”もののけ姫”を宮崎監督がイメージしたと言われるシダやコケに覆われた原始の森、白谷川の清流、なかなかのものです。時間が有れば山本恵昭君お奨めの原生林コースを歩きたく思いました。1時30分バス停着。3日間の登山終了。2時のバス(¥530)で宮之浦の民宿(1泊2食¥7,500)へ。

四日目はレンタカーで島を巡りました。肝心の世界自然遺産に登録されている西部林道は土砂崩れで通行止め。一周することが出来ませんでした。千尋の滝、大川の滝、ウミガメの産卵で有名ななか浜等を観光、湯泊温泉につかりました。目の前は直ぐ海、天然の岩風呂、時間のせいか独り占めで嬉しいのやら混浴でなく残念なのかと言うところでした。海は一湊海岸の海水浴場で1時間ほど潜りましたが透明度も良くなく出会う魚も多くなくいまひとつでした。山本君推薦の栗生の海は岩の上から覗きましたが水は綺麗し岩場で珊瑚がありで泳ぎたかったのですが時間が無く次回に持ち越しました。

帰りもフェリー夜行バスを乗り継いで梅田に帰り着きました。

夜中に雨の音は聞きましたが1ヶ月に35日雨が降ると言われる屋久島で山の中で雨に会わず素晴らしい山行でした。

屋久島の全体の印象は“素晴らしい自然”の一言です。鬱蒼と茂る木々、何処を歩い

ても原生林。縄文杉など見なくとも巨木がそこらじゅうにあります。石楠花の群生、すでに来年の花芽を多く付けていました。

ただ行くのなら早く行くことです。年々多くの人が訪れ、いずれ荒らされることが想像されます。宮之浦岳の頂上で小さなハエが無数に体にまとわりつきます。100m下ると全然いません。これが人が残した食べ滓のせいだとしたら悲しいことです。それとトイレ問題。これだけ多くの人が山に入るのですから何とかしないと他の山同様にとんでもない事になるのでは。

次回訪れるなら沢に(誰か若い人と一緒に無いと不安ですが)入るか淀川登山口から宮之浦岳、縄文杉等はパスして永田岳経由花山歩道か永田歩道をゆっくり歩いてみたいと思います。

屋久島の山を歩く注意を一つ、岩は花崗岩でコケが付いていても少々急でも滑りません。木の根、木道、トロッコのレールは濡れているとよく滑ります。



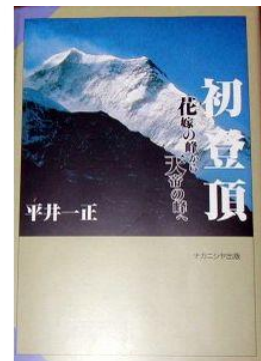
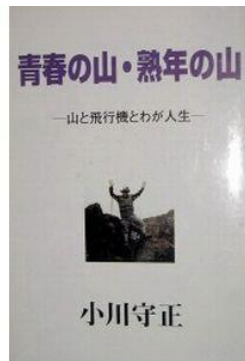
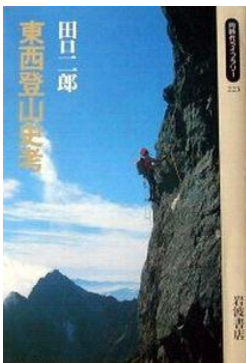
甲南山岳会員の著作・翻訳出版の紹介 初稿 05.3.12.

越田和男（昭36理）

各界で活躍された会員諸氏には、夫々の専門分野で多くの著作、翻訳の出版があるが、ここでは山岳会員としての興味にしばって、登山と旅行に関する出版物のみ取り上げた。

今後新しく出版されたり、記載漏れが判明した場合には追補していきたいので、お気づきの方はご一報いただきたい。

以下発行年代順。会員のみ敬称略。



1 パウル・バウアー著・伊藤愿訳

「ヒマラヤに挑戦して」 黒百合社（1931）

訳者伊藤愿（1908－1956）は旧制甲南高校昭和4年卒後京都大学法学部に進学。甲南、京大時代を通じて当時の学生登山界を代表する先鋭的クライマーとして活躍し、北穂滝谷の単独初登攀などで知られる。甲南山岳部の部歌の作詞者でもある。本書は京大在学中の訳出。

原著（Paul Bauer “Im Kampf um den Himalaya” Knorr und Hirth, Muenchen, 1931）は、カンチェンジュンガを目指したバウアー率いる1929年のドイツ隊の報告書である。登頂には成功しなかったが、団結と敢闘精神を基調としたドイツ魂を前面に、極端に経費を切り詰めて遠征を実現させた点で広く登山界に刺激を与えた。本訳書は当時の日本の登山界に大きな反響を呼び、ヒマラヤ遠征を目指した学生達のテキスト的存在となった。本書訳出の5年後（1936年）、訳者伊藤愿は京大士山岳会の命を受け、K2遠征のための折衝に単身渡印し、ダーズリンよりカンチ遠望を果たしている。また、戦後渡欧の機会にはミュンヘンで著者バウアーに会見している。

近年、原書訳出の実に61年後（訳者没後37年）に、文庫化され京大士山岳会の上田豊氏がその解説を執筆。伊藤愿と本書出版の背景を詳述している。1973年、京大隊によるカンチェンジュンガ西峰（ヤルン・カン、8505m）の初登頂の際、隊長の西堀栄三郎氏が房子夫人から託された伊藤愿の遺影がその頂上に埋められたという。 中公文庫（1992）定価520円

2 大島堅造著

「山の古典と共に」 茗溪堂（1969）定価 1,500 円

復刻版 図書出版社（2002）定価 3,605 円

大島堅造氏（1887－1971）は住友銀行の要職を勤められた国際金融、外国為替の権威。旧財閥解体時に住友を辞された後、甲南大学経済学部教授（1954－1959）、大蔵省各種委員、神戸市教育委員などを歴任された。元住友山岳会会長。甲南山岳会員ではないが、甲南大学経済学部の発足に尽力され、財界出身の長老教授として在籍されたこともあったのでここに取り上げた。

本著は著者の大正時代からの北アルプス登山を初めとする内外の登山紀行に加え、書名にもあるように、数々の「山の古典」を通じた世界の高峰の登攀記録に関する研究、論考などの旧稿新稿をまとめて晩年に出版されたもの。

日本の山の昔話もよし、更に海外高峰の登山史の周辺もまたよし。このような趣味を持たれた碩学の登山家が、筆者の在学時に甲南に在職されていた事を迂闊にも存じ上げなかった。後に本書の奥付の著者略歴で知った時は後の祭りだった。

また、本書では触れられていないが、長男の寛一氏は神戸一中在学中、積雪期の槍・穂高での甲南高校山岳部の合宿に参加、槍ヶ岳などに登頂している。一行は伊藤愿、西村格也、香月慶太、檀淳、湯川孝夫で、まさに甲南山岳部草創期の主力メンバーと行を共にされたのだった。四男の輝夫氏（神戸一中、東京高校、阪大の山岳部OB）から最近本書を甲南山岳会にご寄贈いただいた。

3 永井智雄著

「光と影の国で」ーたたかひのスペインを行くー

新日本出版社（1979）定価 820 円

永井智雄（1914－1990 本名・飯沼 修）は旧制甲南高校在学中の昭和9年、治安維持法違反の容疑で他の山岳部員と共に検挙された白亜城事件に連座し、甲南を中退後同志社に進んだ。後に俳優座所属の新劇俳優、また「新劇人会議」書記長として活躍。かつての人気連続TV番組「事件記者」の相沢キャップとしても著名。

甲南時代に山岳部に在籍したことはあまり知られていないが、当時の山岳部の部報にF. Smyth の ” The Kamet Expedition ” の翻訳を発表している。本著は1978年の著者の二度目のスペイン旅行の紀行文の形を採っているが、ときあたかも、かのフランコ独裁政権の崩壊直後のこと、40年にわたるフランコ政権以前のスペイン内戦、人民戦線と国際義勇軍のことや、これらに対する旅先での当時のスペインの人たちの発言、感触などが詳述されていて興味深い。いくつかある著作の中からこの一冊を選んで紹介した次第。

4 クリス・ボニントン著・田口二郎・中村輝子訳

「現代の冒険」(上) ー山・極地・河ー／(下) ー海・空・洞窟・宇宙ー

岩波書店（1987／1988）定価各 2,800 円

訳者田口二郎（1913－1998）は旧制甲南高校昭和8年卒後東京大学に進学。戦前、戦中欧州アルプスに兄一郎、高木正孝らと共に初登攀を含む多くの足跡を残した。戦後はマナスル踏査

隊（1952）及び第一次遠征隊（1953）に参加。元日本山岳会副会長。本書の訳出では、上巻の巻頭および一山一の部分を分担している。

原著（Chris Bonington “Quest for Adventure” Hodder & Stoughton, London, 1981）の著者クリス・ボニントン（Chris Bonington）は英国を代表する登山家、冒険家にして著述家。1970年のアンナプルナ南壁の初登攀によりヒマラヤ大登攀時代の幕を明け、その後も1975年には英国隊を率いてエヴェレスト南西壁の初登攀に成功させるなど、ヒマラヤ「壁」の時代をリードした。本著は彼とほぼ世代を同じくする第2次大戦後の冒険家達の栄光と挫折の軌跡を、自らも同時代に冒険の現場を何度も経験した人間として論考したもので、英国で発刊直後10週間ベストセラーとなった。

アンナプルナ、そしてエヴェレストの初登頂に始まり、ワルテル・ボナッティー、ヘルマン・ブールらと共に、植村直己にも一章を割いている。

5 クリス・ボニントン著・田口二郎訳

「ヒマラヤ冒険物語」 岩波書店・同時代ライブラリー（1992） 定価1,100円

上記4「現代の冒険」（上）の一山一の章および「冒険小史」「用語解説」「主な関連書」の「山」の部分を抜粋し、著者ボニントンの新しい序文を加えたもの。この序文では本書の出版以来の10年間（1981～1991）に登山界で起きた危惧すべき動きを述べると共に、それらを克服しての健全な未来への期待を語っている。

6 田口二郎著

「東西登山史考」 岩波書店・同時代ライブラリー（1995） 定価950円

著者（上記4参照）には出身校の甲南、東大の山岳部の機関誌に始まり、日本山岳会関係の定期刊行物などに数多くの優れた執筆歴があるが、晩年に至るまで著作の刊行がなかった。登山界で誰もが一目を置く論客にして文筆家の処女出版を求め、既稿のまとめを薦める編集者からの誘いには消極的であったと聞く。

本著は80歳を越えた著者の渾身の書き下ろしである。ヨーロッパ・アルプスそしてヒマラヤで第一級の登山を実践してきた著者ならではの東西登山文化論が展開され、日本古来の登山文化とヨーロッパ起源の近代アルピニズムが、我が国特有の山岳景観を背景にした静観思想と融合して、日本型アルピニズムを成立させていったかの過程を、読者に納得させてくれる。上梓以来本著は、登山文化、登山史を研究論考する者の避けて通れぬ存在となり、他者の著作での引用頻度が抜群に高い名著となっている。

本著の完成に至る過程では、著者と著者を敬愛してやまない編集者平井吉夫（昭和32年甲南高校卒）の出会いが重要な役割を果たしたことを付記しておきたい。夏の鎌倉の田口邸で、既に眼が不自由となっていた著者が、信頼し期待する編集者平井に分厚い原稿用紙の束が手渡された時に飯田進と小生が立ち会った記憶が今もよみがえる。平井は、その後上梓の漕ぎつけるまで一年半の間の著者との頻繁にして長時間にわたる気迫のこもった電話のやり取りを懐かしむことしきりである。

後に出版された「田口二郎・山の生涯」の下巻の付録に田口夫人エルナさんの次のような手記がある。「主人との巡り逢いはスイスの山が縁結びと言えます。晩年になっても主人の山に対する情熱は一向に衰えず、83歳になって出版した『東西登山史考』は最後の登頂でした。」

7 平井一正著

「初登頂」―花嫁の峰から天帝の峰へー ナカニシヤ書店 (1996)

定価 2,900 円

著者平井一正氏 (1931ー) は神戸大学名誉教授、京大学士山岳会会員、神戸大学山岳会会員、甲南山岳会名誉会員。 神戸大学退官後、甲南大学に理工学部教授として 1995ー2000 年在籍、山岳部の顧問を勤めた。

古くはチョゴリザの初登頂 (1958 年京大隊) に始まり、サルトロカンリ遠征への参加 (1962 年京大隊)、隊長として率いたシェルピカンリ (1976 年神戸大隊)、更には総隊長を務めたクーラカンリ (1986 年神戸大隊) など、そのどれもが無事故で初登頂を極めたという類稀なる経歴を持つ我が国第一級のヒマラヤニストである著者は、甲南山岳部にとっては救世主。大学山岳部の顧問を引き受けてくれる教員がなく、部の存続問題にまでなっていた丁度その時、神戸大学を退官されて甲南に来られたのが平井先生で、山岳顧問への就任を当時の理事長小川守正先輩の依頼に快く応諾されたのだった。

余談だが、本著出版直後のこと、書店でこれを見つけた筆者はその奥付けの著者の略歴に現甲南大学教授とあるのを見てびっくり、早速神戸の牧野宏君に電話を入れたところ、既に山岳部顧問になっていただいているとのことだった。

本著では、上記の処女峰登頂にいたる海外遠征登山記に加えて、著者の山登りの原点である京大山岳部時代のこと、著者にとっては幻となったカンチェンジュンガ遠征の顛末、更には最近の横断山脈縦断記などが、計画にかかわった人々、出遭った人々のことどもが愛情のこもった筆致で語られている。

筆者が後に本書の扉に頂いたサインには「初登頂、それは永久に消えない記録として残る。」とある。

8 小川守正著

「青春の山・熟年の山」―山と飛行機とわが人生ー 私家版 (1998)

著者小川守正 (1922ー) は昭和 17 年旧制甲南高校卒。九州大学航空工学科卒。元甲南学園理事長。

卒業後も、松下電器の要職にあった超多忙の時期を除き、山に登り続けた。終戦後の困難な山岳部の復活に際しても OB として指導的役割を果たし、甲南山岳部 80 年の歴史を最も熟知する一人である。

本書の冒頭「山と飛行機とわが人生」では、著者の甲南高校、九大航空工学科、戦時下の川西航空機での設計要員時代、海軍航空隊、復員後の生活、松下電器在職時代など来し方が簡潔にとめられ、続いて「青春の山」では甲南高校での山岳部生活、「戦後の山」では甲南の後輩もしくは職場の山仲間との山行、「シルバー登山記」では著者 60～70 歳台の海外登山など

が語られている。それぞれの時代を反映させ、しかもユーモア溢れる筆致が楽しく、更に旧制甲南高校山岳部の雰囲気や今に伝える貴重な文献として価値のある読み物となっている。

なお、著者は阪神淡路大震災の時の甲南の理事長として、迅速な仮校舎建設による授業再開、更には時の文部大臣を強引に被災キャンパスに案内して政府の復興資金の確保を取り付けるなどの大活躍をされたのだが、著者曰く「甲南山岳会から甲南学園に出向中のことだった」。

9 田口二郎著

「山の生涯」―来し方行く末―（上／下） 茗溪堂（1999／2000）

定価 上/下各 7,500 円

著者に関しては4. 6. を参照のこと

待ち望まれたこの上/下二巻の大冊の著作集が遂に世に出たのは著者没後のことだった。前述の通り、老登山家が旧稿を集めて出版するというスタイルには当初消極的だった著者だが、その晩年には、数々の山の名著の編集で知られる大森久雄氏や甲南山岳部の後輩の平井吉夫らの熱意もあって大いに乗り気になったという。結局一周忌を迎えた頃の上梓となったのは残念だったが、出版されるや山岳関係各誌が賞賛の書評を掲載している（「山岳寮」第55号 2000年を参照）。

書評に付けられた見出しのいくつかを紹介しておきたい。

山と溪谷：「アルピニズムへの深い洞察。田口二郎氏の遺稿集刊行」池田常道氏

山の本：「近代アルピニズム興隆期の足跡」遠藤甲太氏

読書人：「“山の知識人”が息づく 後世への贈りものとなった遺稿集」近藤信行氏

上巻は第一章「青春の山」「甲南の山登り」で始まり、続く「スイス時代」はかつて深田久弥が絶賛した“回想のヤング尾根―1943年7月―”で始まる。以下「山の随想」「山の本」、下巻では「マナスル」「山の人たち」「異国にて」「来し方行く末」の各章へと続く。

編集者のひとり大森久夫氏は著者にもっとスイス時代のことを語らせるべく、口述筆記の段階までゆきながら、「田口さんは、やはりあれはだめだ、と反応をにぶらせてしまったのです。」と残念がられた。著者の口の堅さには、戦時中のスイスでの登山三昧への自責の念と、兄一郎の客死の影があったことは間違いないと思われる。

それでもなお、“スイス・思索と読書の四年―回想・笠信太郎―”、“ツューリヒ今昔”、“終戦身辺”、“チトーのユーゴをいく”など、第2次大戦下スイスに滞在し終戦を朝日新聞支局員としてチューリッヒで迎えた著者ならではの文章もあり、山関係以外の読者にとっても貴重な体験談であろう。

10 サブリエ・テンバーケン著・平井吉夫訳

「わが道はチベットに通ず」―盲目のドイツ人女子学生とラサの子供たち―

風雲社（2001） 定価 1,800 円

訳者平井吉夫（1937― ）は昭和32年甲南高校卒。早稲田大学文学部卒。ドイツ語翻訳家、ドイツ語通俗小説の邦訳家として第一人者。訳書多数。中学・高校時代は山岳部員として活躍し、国体山岳部門の兵庫県代表に選ばれたこともある。甲南の英語の教師が嫌い、英語嫌いとなり、ドイツ語で名を成したのだから、英語の教師に先見の眼があったのかも。

原著；Sabriye Tenberkenn, “Mein Weg fuehrt nach Tibet. Die blinden von Lhasa”, Verlag Kiepen & Witsch, Koeln (2000)

若き全盲の著者テンバーゲン（1970年生。ドイツ・ボン出身。中央アジア学専攻）の驚くべき行動力による、失明者の多いチベット・ラサでの盲学校の設立に至る物語である。チベット語の点字作りから始まり、ドイツ政府の助成を取り付ける気の遠くなるような試練の道のりが描かれている。著者の旅の描写も興味深い。

本書はドイツ国内でベストセラー入りし、数カ国語に翻訳され、映画化の予定もあるという。訳者あとがきに施設とプロジェクトのその後などが適切に解説されている。

1 1 南里章二著

「全世界紀行」―民族と歴史、そして冒険―

ナカニシヤ出版 (2003) 定価2,700円

著者南里章二（1948―）は甲南高校、甲南大学理学部（物理学科 1970）を経て大学院修士課程修了（応用社会学専攻 1972）。甲南高校教諭（世界史）。図書館長も務める。

中学、高校、大学10年間にわたる山岳部での経験を原点として、ヒマラヤ遠征、サハラ砂漠の横断、アマゾンの河下り、と30年間にわたり冒険旅行を続け、遂には世界全独立国192ヶ国に足跡を残した。ヒマラヤ遠征の他はほとんどが単独行動で、半端な旅ではない。現地人や行きずりの旅行者との交流、或いは旅行手段確保のための困難な交渉などが随所で興味深く語られている。本書は460頁に及ぶ大冊だが、ほぼ書き下ろしで、単なる旅行記に留まらず、“世界を知って教えたい”という動機付けのもと、世界史で教鞭をとる著者ならではの優れた調査報告であり、訪問国の歴史とその民族性がわかり易く解説されている。第三章の「インドのなかのチベット―ザンスカール調査と踏査」は、著者が隊長を務めた甲南山岳会の第一次キシウトワール遠征（1977年）の現地解散後に松本好博（昭和52年卒）と行動を共にしたラダック・ザンスカール地方の踏査行を中心にまとめられている。

KACホームページ「全世界紀行」および「個人投稿集」の“垂直と水平の旅人”を参照されたい。

1 2 中井久夫とエッセー

多くの多岐にわたる著作があり、著作集も刊行されている精神医学者にしてギリシャ詩の訳業でも知られているという中井久夫（新制高校昭和27年卒・神戸大学名誉教授・平成9年～16年甲南大学教授）の著書も取り上げたかったが、登山や旅行に関するものが見当たらず、伊藤文三先輩に相談したら下記を推薦された。筆者の手に負えるものでないので書名のみ紹介しておく。

「精神科医がものを書くとき」(I)(II) 広英社

「アリアドネからの糸」 みすず書房 「記憶の肖像」 みすず書房

「家族の深淵」 みすず書房 「清陰星雨」 みすず書房

「治療文化論」 岩波書店

これにはあとがきに一箇所著者が山岳部出身者であることを語るくだりがある。

ー 掲示板書き込みダイジェスト ー

山行とつどい 2004.4～2005.3

ホームページ掲示板の書き込みから。一部「山行」「つどい」以外のものも含まれます。

遠かった笈ヶ岳 donnkiti & kannroku 04/05 (月)

白山近辺には名前の読めない山が沢山ある。今回登ろうとしたのが笈ヶ岳(おいずるがたけ)。すごいナイフリッジを見たのが冬瓜山(かもりやま)。その横にあるのが山毛櫓尾山(ぶなおやま)。その向こうにあるのが瓢箪山(ふくべやま)。ああしんど。

ドンキチの発案に乗ったカンロクと二人 4/2 夜関西出発。白山スーパー林道ゲート手前で仮眠。5時10分出発 林道1時間ばかり歩いて白山自然保護センター。

その裏にある遊歩道で野猿広場に。お猿さんの集団のお出迎えに会う。広場はジライ谷末端にあってその左岸の尾根に取っ付く。目印の布切れやロープ等も有ったりして迷うこと無し。でもすごい直登である。3時間と踏んでいたのが5時間もかかってしまう。

やっとたどり着いた冬瓜山(かもりやま)ちょうど11時。頂上から延びているナイフリッジの尾根、約30m。通過出来るのと落ちる確率50%。9mmザイル持っていたが落ちたらはい出すのに1時間はかかる。二人で相談。帰ろうか。

遠くに見える笈ヶ岳(おいずるがたけ)、二つのピークを持った素晴らしい雄壮を見て退散。本当に綺麗な姿をしていました。後日アルバムに出てきましようがんなナイフリッジ初めて見ました。風のいたずらでしょうか象の鼻の様に二つの空洞がありましたその空洞は人が潜り込めそうな穴です。覗いて見たくなる穴でした。ラッシュで登る山では無いと思いました。でも登ってみたい山です。

参考タイム 5:10 林道ゲート～6:00 自然センター6:30 野猿広場～7:30 大岩(20m程の三角形の岩)～10:00 1400m台地～11:00 冬瓜山 此より退散～14:20 野猿広場～15:45 ゲート

比良山もしんどい山に kannroku 04/11 (日)

今年になって初めてのこの土曜日比良山へ。スキー場閉鎖になったの聞いておりましたがバスまで行かなくなったとは知らず。結局比良駅から歩かされてしまいました。バス、リフト、ロープウエーがなくなっておかげか、とんと人の姿少なくなったようです。武奈ヶ岳の登りも渋滞無く難なく頂上に。

車でいけない人はしんどい山になったようです。コブシ・山桜・つつじの季節でシャクナゲは例年の如く5月に入ってからみたいです。

大関先輩宅の花見会 柏 敏明 04/14 (水)

越田先輩や水渡君から、大関先輩宅の花見会の素晴らしさを良く聞かして貰っていました。タイミング良く東京出張があり、厚かましくも今年の花見会に参加させて貰いました。

伊藤文三さん、越田さん、飯田さん、卒業以来久しぶりにあった森岡君、お名前はかねがね聞かして頂いていた田村さんと主人の大関さん。山菜の天ぷらをはじめ海の幸、山の幸が大関さんの腕前で大きなテーブルの上が一杯。



名残の桜の下で、飲んで、喰って、だべりました。ガネッシュ、レニ・リーフェンシュタール、ヴァン・ヘフリン、イラクと話題はあちこち。まだまだ宴は続いて

いましたが、大阪まで帰る小生は後ろ髪を引かれながら途中で失礼をしました。

食いもん良し、飲みもん良し、仲間良し。最高でした。大関さん有難うございました。

大関和夫

(食えること)と(食べてもらうこと)が大好きで、それに花と器と仲間があれば幸せです。

わが家の庭は桜に続いてつつじが咲きはじめました。

甲州の山 越田和男 04/21 (水)

先週末は誘われて甲州の静かな山を歩いて来ました。

宿泊はこのところちょくちょく利用する甲斐大泉のペンション「ロッジ山旅」で、主人の長沢君がが山好きで、山の本がどっさりあるのが特徴です。

1日目は太刀岡山 1296m. びっくりするような花崗岩の岩壁があり、小一時間の急登でした。二日目はささやかな甲信国境の分水嶺の縦走で、川上村—石ッコツ 1630m—夕日アタリ 1592m—信州峠。こんな山、名前も知らなかったですが、帰宅後地図で再確認しながら赤線を入れるのが愉快でした。

甲斐の山は、富士山とハッを除くと花崗岩質が多く、東六甲のスケールを大きくしたような山や谷が楽しめます。

慰霊祭お礼 中村淳子 04/25 (日)

本日 慰霊祭に参加させていただいたスーパーシルバーズの姪です。叔父をはじめ 息子とともども大変お世話さまになり有難うございました。慰霊祭参加は'99年に続き2度目ですが今回も難行の所皆さまのおかげで無事到達する事が出来て感謝あるのみです。六甲の新緑も堪能致しまして リフレッシュできました。みなさまの今後のご活躍お祈り致しております。

総会&慰霊祭 武田雄三 04/26 (月)

メイン・イベントを今年も諸兄のご協力を得て無事且つ和やかに終了する事が出来ました。旧制OBの方々のお元気に感心。中高山岳部現役3名出席し

てくれました。慰霊祭にご出席のご遺族の皆様より鄭重なる謝意を頂戴しました。

世話役の諸兄にタダタダ 感謝・感謝・感謝。



お世話様でした 伊藤五介 04/26 (月)

慰霊祭実行委員の方々ありがとうございました
肺の片方ない九つ上のジイサン(つまり兄貴です)やグリーンさんのパワーにはビックリですが後輩の皆様方の暖かいサポートの賜物と感謝しております

昼食時ワインのお誘い受け喉から手が出掛かりましたがここで飲んで迷惑かけたらとグッとこらえ帰りの新幹線の中で飲んだビールの旨かったこと!

おおきに

KAC 総会／慰霊祭に参加して

廣瀬健三 04/26 (月)

先ずは 世話役、何かとご手配／作業頂いた方々に、厚く御礼申し上げます。

遠路東京から来られた、香月家 福田家 伊藤家の方々、そして横山家の方々、皆々様 故人を偲ばれた事でしょう。

部歌を歌い乍ら、色々な事が思い出され、万感胸に迫る物有りでした。

ここに改めてご冥福を祈ります。又思いつく俣に投稿したく存じますが、取り敢えず、御礼まで

滑 落 川野幸彦 04/29 (木)

先程、立山から帰ってきました。日帰りです。敗退です。5月にしては稜線が非常にクラストして私の技術では厳しかったです。雄山頂上から御前に向かおうとしましたが、出だしの神社直下のトラバースから

大変でした。ここで私が通過する数分前に単独の男性がスリップし数百m滑落しました。そこは急なガレ場が100m程続きその後クラストした急斜面が数百mです。上から見たら男性は直ぐに立ち上がっていましたがなかなか動こうとはしません。変だなと思いながらも先を急ぎましたが、クラスト斜面のトラバースが続きこれ以上は無理だと引き返しました。帰り際に先程の滑落現場に差し掛かり下を見たところ、まだ男性が立ったままでした。15分後位です。その時スキーヤーが男性の方に向かってるのが見え、しばらくして合流しました。私はスキーヤー滑れる斜面なので“俺でも大丈夫！室堂まで一直線や！ショートカット”と滑落斜面を降りました。結構急な斜面で時折クライミングダウンも混ざりました。滑落した男性に近づくにつれスキーヤーが盛んにコールしてきます。現場に到着して驚きました。男性は顔が血まみれで肋骨も折れているようでした。衣服は裂け、ザックも破れていました。意識ははっきりしていましたが殆ど歩けません。ガレ場でやられたと思いました。直ちに警察に連絡しヘリ要請です。県警の若い隊員も物凄い勢いで上がって来ました。アッと言う間にヘリが来て収容して行きました。県警隊を追っかけてNHKの取材班も来ましたがヘリが行ったあとでした。その後私はシリセードで雷鳥沢まで下り、室堂までは県警の雪上車に乗っけてもらいました。

立山の稜線の状況ですが夏道は出ていませんでした。すべて“嫌な感じのトラバース”でした。所々氷化している所もあり3月の様な感じでした。5月特有のグチャグチャ雪とは程遠いものです。グチャ雪なら「ちょっと滑ったかな？」でもこの状態では落ちたら下まで止まりません。県警の話では、今年は雪が少ない上に一時暖かくなりその後急激に冷え込んだためこんな危険な状態になったと言っていました。大観峰のロープウェイから見たタンボ平も雪面は全体にクラストいて吹き溜まりには新雪が積もっているようでした。5月の“均一に緩んだ雪”とは全く違います。稜線はそんな風ですが少し標高が下がると真夏です。紫外線が強く顔は真っ赤です(痛い！)。暑いのでTシャツです。下界は夏。稜線は冬。この連休、滑落者が大勢出るかも知れません。

5月の山登りは20年ぶりでした。しんどかったです(事前トレーニングはやったのですが)。またアイゼンをロンスパに引っ掛けたりして以前では考えられないミスも犯しました。また傾斜に対する恐怖心も強く「かなりビビりました。」男性の滑落地点も“前を向いて行くか？後ろ向きで降りるか？”微妙な傾斜でした。私はクライミングダウンしましたが男性は前向きに降りた様です。登山者は相変わらず中高年が主流です(スキー・ボードには若い人もかなりいました)。落ちた男性も53歳で、ほかに救助を手伝ったお二人も50歳前後の方でした。私は最近46歳になりましたが若い方です。こんな風なので見た目にもかなり危ない人が大勢いました。一ノ越から雄山までも夏道は殆ど出てなくてアイゼンの世界です。ここをピッケルも持たずにストックだけで登るお婆さん。この人を抜いた際に私に「この先ストックだけで大丈夫でしょうか？」と問いかけてきました。「大丈夫な訳ない。直ちに引き返すべき。」と言いましたが登り続けていました(そんなら聞くな！)。ただピッケルを持っていたとしても使いこなせないと思いますが。無事降りれたのか心配です。

白馬大雪渓のスキー donnkichi & kannroku

05/03(月)

梅池自然園～小蓮華山～三国境で蓮華温泉パーティー山本恵・大森と別れ浪川・森本は白馬山荘へ。小蓮華山まではシール登攀、その後はスキーかついでの登攀。大森等若手は 20kg弱の荷物、老人組は 10kgの荷物。昨日の睡眠不足がこたえて疲れ切った足取りで白馬山荘に転げ込む。5/1 から小屋営業で50組からの登山・スキー客に驚く。

5/2 快晴 8時30分小屋横の雪面スタート。浪川コース取りで先行、続いて森本。思い思いのコースを滑る楽しさ、これが山スキーの醍醐味か。白馬主稜末端辺りで登って来る人たちに出会う。猿倉まで5回程の休憩をしての滑り。おいおいに楽しみました。

猿倉には武田会長の車の出迎え。こんな贅沢な山行は初めての経験。来年も行けるよう身体鍛えね

ばと思った次第。皆さんありがとう御座いました。



雪倉山東面スキーと露天風呂 with lady

山本恵昭 05/03 (月)

結局、山中1泊で雪倉山から帰ってきました。

1日、森本さん、浪川さん、大森さん、山本の4人で樽池ロープウェイ終点から小蓮華山目指して金山沢の広大な斜面をシールで登り、三国境へ。

白馬岳で満点の星空のもとツェルトビバークの予定でしたが、あまりに風が強いので、森本さん達とお別れをして雪倉避難小屋へ転がり込みました。稜線上は思ったより雪が無くスキーを担いで歩く羽目に、がっかり。先客は、日本海までワカンで歩いていくと言うガイドツアーの8人ほど。夜半ずつと強風が。。

2日、雪倉山頂から大滑降。雪も程よく緩み、広大な斜面を大森さんと二人で独占。雪倉ノ滝だけ雪が切れていましたが、右の斜面をツボ足で下りました。瀬戸川のスノーブリッジを渡り、ブナ林のハイクで蓮華温泉に11時着、露天風呂¥500へ。計画ではここで一泊でしたが、時間も早いので武田さんの携帯に留守電し、このまま一気に木地屋の村まで下ることに13:00。少し登り気味の林道を歩き、急斜面を登って角小屋峠。ウド川を下って雪の消えかけた森の中を四苦八苦しながら、白池下の林道に合流、木地屋に17:15着。平岩駅目指して歩いていると、半分ほど来たところで釣り人に拾ってもらい駅まで送ってもらう。再び、武田さんに連絡をとり、お迎えに来ていただきました。武田さんの別荘で、快適な夜を過ごし、3日朝から渋滞に会うことなく神戸へ。

雪倉東面は、標高差1200m。中急傾斜中心の大斜

面でひたすら滑る「これぞスキー」という醍醐味を味わいました。また、快晴の中、蓮華温泉露天風呂でのんびり。景色もさることながら、若奥さん風の女性と入浴というおまけつき。神様のご褒美か！

車の運転、入下山の送迎、別荘のお泊りと、何から何まで武田会長のお世話になりました。有難うございました。

「いつまでこんな事出来るやろ」と言いながら、いつもおつきあいいただいている大森さん、お疲れ様でした。次は、沢の季節ですね。



しんどう山行 Donnkichir 05/25 (火)

3月に登れなかった笈ヶ岳に23日カンさんとリベンジ山行に行ってきました。22日午後出発中宮自然保護センター車中泊、4:50出発ジライ谷左岸尾根一冬瓜平(カモウ)7:10前回より2時間短縮ここから藪漕ぎの始まり、冬瓜頂上8:00前回敗退したナイフリッジはただの岩稜変わっていた。シリタカ山頂上8:40所々雪面出てくる。9:30シリタカより下った鞍部の先で体調不良のカンさん待機。此处から岩底谷(カマコ)の頭の主稜線までの藪漕ぎが気の狂いそうな程えげつなかった。もう止めようか思ったところ、主稜線東面に雪面が続いており助かる。10:20笈ヶ岳頂上着、最後も藪漕ぎした所ぽっかり頂上の平地にでた。頂上に登頂者の為の名前入れ蓋付缶が有った。残したカンさんが心配なので早々に下山する。11:20合流-12:00シリタカ山-13:00冬瓜平-15:00野猿公園-15:15センター着。実動10時間カンさん5kgドン吉4kg減、ダイエットにぴったりの山でした。カンさん本当にご苦労さまでした。

静かな山 塩崎将美 06/07(月)

槍ヶ岳に行ってきました。

夜行列車”ちくま”は運休になってます。3 日朝 6 時半に新神戸から名古屋へ、しなの 3 号で松本へ、松本電鉄バスを乗り継いで上高地に 12 時、上高地は修学旅行や観光客で賑わっていましたが明神を過ぎると人はまばらになり横尾へ、横尾山荘に泊まりました。小屋に風呂があるのには驚きでした。4 日は槍沢を登り槍岳山荘へ。槍沢で出会ったのは下ってきた 3 人だけでした。大曲を越してから雪になり 30 数年ぶりにアイゼンを付けました。槍沢は長かったです。特に小屋が見えてからはバテバテ。小屋の宿泊客は 2 人だけ。

日の出を見に穂先に登りましたが出会ったのは 3 人だけ、快晴のなか 360 度の展望を満喫しました。飛騨沢の下りは雪がしまりアイゼンが良く効き快調に下れました。この日も出会った登山者は少なく天気にも恵まれた 3 日間の静かな山行でした。中尾平の温泉を堪能し昨日帰って来ました。このシーズンの雨の間の晴天はお奨めです。

ドロミテ雑感 越田和男 07/07(水)

先月、仲間6人と、憧憬の地の一つだった北イタリアのドロミテを覗いて来ました。コルチナ・ダンペッツォにとった宿が気に入ったのでつい横着して、そこに一週間滞在、日帰りトレッキングとドライブを楽しみました。移動は全てレンタカーでした。

観光シーズン直前で山小屋が開いてなかったり、ロープウェイが動いてなかったり、残雪で夏道が通れなかったりという不便さはありましたが、反面、静かな旅が出来たのと、残雪の山々の景観が楽しめたりといったプラス面もありましたし、花も十分に咲いていました。

穂高のジャンダルムや、剣のチンネの5, 6倍のスケールの岩峰が無数にあり、圧倒され、若いうちにこんな所に来られたらどんなに楽しめただろうかという思いはあれど、今はただ眺めるのみ。

若き日のヘルマン・ブールがチロルから自転車で国境を越えて登ったドライ・チンネンの北壁なども身近に接すると、彼の著書「八千米上と下」を読んだ時ピンと来ていなかった風景が実感され、そんなところ

に気軽に「山見遊山」に来られるような時代になったことを実感しました。

写真でよく見る岩峰群もさることながら、山麓の村々のたたずまいも、素朴で絵のように美しく、景観ぶち壊しの建造物の制限の行き届きが心地良かったです。行く前に地図で見るとあっちこっちにロープウェイが少々架かり過ぎではないかと感じてましたが、実際に行ってみると自然の大きさが勝っており、何処かの国のスキー場やゴルフ場の醜さには程遠いものでした。

堂倉谷、大峰奥駆け、入の波温泉^{しおのは}

大森雅宏 07/19(月)

7/16 と 17 の 2 日間、大台ヶ原の堂倉谷に、18 日は本沢川に出かけました。いつも報告を書いてくれるリーダー山本が行動中、「ここまでタイムとってなかったで今回お願いします」。いつも任せきりだし、はいヨ と引き受けたものの、私もコースタイムなんて覚えていません。と言うことで、結構いいかげんな記録です。

15 日夜須磨発。4 時間ほどで満天の星の大台駐車場へ。16 日、日出岳を経て大杉谷方面へ、下って下ってひたすら下る。膝がおかしくなる位下って 10 時前に堂倉滝へ。滝の前の吊り橋を下流へ渡って、次の橋のたもとから右に尾根を越し、フィックスベたはりのルンゼを下り沢に降り立ち、ここで装備を整え沢登り開始。

資料ではザイルを使わなかったものもあるが、なくては心配で 9 ミリを持参、ゼルブスト(ハーネス)も締める。ライフジャケットは金槌大森には心強く、鮎パンツも冷たい水の胸までの渡渉、釜や淵の水泳には有難かった。

堂倉谷は岩登りを細かいテクニックで乗り越すより、流れとしぶきを楽しんで泳いで岩に取り付く、豪快と言うかざつくばらんとするか、ジャバジャバと進めば何とか道は開けると言う感じの谷。とはいえどうにもならず巻いた滝もあったり、釣り竿を出したりしながらまずまず良いペースで奥七つ釜の滝へ。

奥七つ釜の滝は岩盤の川床にいくつも丸い滝壺

が開いている変わった地形で、山本君はちょっと飛び込んできますと大きな滝にドップン。水中眼鏡で滝壺を見ると透明度抜群、小石の川床がはっきり見て取れる。泥や木の葉が全くなく青い水が美しい。

この日は2時過ぎで行動打切り、川原にテントを張り山本君は釣りに。予定の夕食にアマゴの塩焼きのおまけがついて焚き火を囲む。



翌17日、上流をめざす。昨日は楽過ぎたとちょっと手応えのあるルートを取ることにして、上部は奥の右又へ。分岐のあたりでアマゴを2匹、山本君が捕まえて(道具は両手)火を熾す。

分岐から上部、奥の右又はそれまでと変わって、狭い谷がぐんぐん高度をあげて行く。現れた大滝は大きく左に巻いて分岐はリーダーの言う通り、そこ右、ここは真中とルートを取ると、稜線が近づく。沢も涸れて登攀具を外し普通の格好に。大分疲れて笹の原を掻き分けて3時前日出岳に到着。結局ザイルは使用せず。

遊歩道を駐車場に戻り、翌18日は入の波温泉奥の本沢川へ入ることに。移動の車の中で、世界遺産に指定された大峰奥駈・前鬼に一遍行ってみようかということに。実は前鬼の宿坊の五鬼助義之氏は職場の先輩だった方で宿坊小仲坊は何度か訪ねたことがあります。

池谷ダムのほりから林道に入り、不動七重の滝をはるかに見て、林道ゲートに。うまく行ったら鎖のカギが外れているかと思ったのですが、しっかりかかっていました。ここからは20分あまり歩きます。宿坊の夕食準備の忙しい頃に突然訪ねたのに山本君の質問にも丁寧に答えてくださいました。

食事して泊まっていったらいいと勧められたのですが、予定がありますのでと失礼しました。五鬼助さんのお嬢さんも甲南です。(理学部)

この夜は本沢川沿いの筏場の駐車場で車中泊。

堂倉の2日目の後遺症で体のあちこちが痛く(本谷をそのまま詰めたら楽ができたのにと二人で後悔)、翌18日は軽めに本谷を散歩することに。

18日、朝から曇り空。他のパーティが出発してからごそそと出発。林道から川原に降りる。コンクリートの小橋を渡り、大台ヶ原への登山道をたどる。程なく川床におり登攀具を一応着ける。

水はきれいが堂倉に比べると幾分落ちる。川沿いに側壁から温泉が滴り落ち硫黄臭がわずかにする。大きな滝をひとつ巻いて(右に登山道が続いている)五色湯(後で地元の人に聞いたところ、別に温泉宿があった訳ではないとのこと)と標識の地点からまた沢に下りる。

途中小雨の中、大岩を越えたり淵を泳いだりを繰り返し、釜の公谷出会いまで遡行し、ここから下り返す。帰路は谷沿いの登山道を利用。山本君はここでも竿を出す、捕獲ゼロ。こんなこともありますという日でした。

3日間近場で遊びましたが、堂倉谷は広くて雄大、本沢谷は手軽に取付けてまたみんなで出かけても楽しそうな場所でした。

雨 柏 敏明 07/20(火)

昨年、雨、雨、雨のため、槍ヶ岳までであきらめた穂高ヘリベンジに行って来ました。今年は、井本君、水渡君が都合悪く、竹中君とアーバンライフの廣瀬さん、山本さん、森女史の5名で、計画は沢渡(駐車)～上高地～涸沢小屋(泊)～ザイテン～穂高小屋～奥穂往復～北穂小屋(泊)～南稜～涸沢～徳本峠小屋(泊)～島々～沢渡。

7月15日夜、乗鞍のペンションに東京と大阪から集合し、翌16日は曇天の中、予定通り涸沢小屋に到着。北尾根を望みながら、生ビール、ソフトクリームで氣勢を上げる。17日は小雨、ザイテンを経て約3時間、9時40分に穂高小屋へ。奥穂往復に出かけようとするも、稜線は飛騨側からの強烈な雨風で動き

が取れずそのまま沈殿。新潟豪雨をもたらした停滞前線の影響。空梅雨といていたのによりによって、なぜ、この期間に雨風が集中するのか。2年連続のこの天気。各人、日頃の行いを反省する事しきり。(小生だけ?)

18日、雨風強く、計画を奥穂～前穂～岳沢ヒュッテ(泊)～上高地に変更。まさかあのしんどい岳沢をまた下る事になるとは思いもしませんでした。若干、雨風が弱くなったなか、奥穂頂上で記念写真。祠のみで景色はガスの中。吊尾根も岳沢も黙々と歩くのみ。岳沢ヒュッテ近くになってやっと明神の尾根や上高地が望めるようになり、12時30分に岳沢ヒュッテ着。小屋名物、特製チキンカレーで憂さ晴らし。翌19日、沢渡の上高地ホテルの温泉ですっきりし、来年の再会を約して東京、大阪へと別れました。

40年振りの北穂小屋や滝谷を、又、徳本峠からみるモルゲンロートに輝く穂高連峰を楽しみにしていたのに残念でしたが、山小屋は他人に煩わされることなくすべて個室で快適、ワイン、生ビール飲み放題、話題は尽きず、楽しい山行でした。同行の皆さんに多々感謝。

追記 廣瀬さんが鈴木頼正先輩をよくご存知で、宜しくお伝え下さいとの事でした。

雨中の縦走 donnkiti & kannroku 07/20 (火)

- 11日 夜高バスに乗るべく京都駅八条口で待てどもバス来ず。乗場間違えたことに気付くがバスは出た後。4850 円の損失。
- 13日 再度夜高バスで富山
- 14日 JR高山～バス新穂高～笠新道～笠山荘
- 15日 山荘～笠ガ岳～双六小屋～三俣蓮華岳～三俣山荘
- 16日 山荘～五郎カール～黒部五郎岳～北ノ俣岳～太郎小屋
- 17日 折立～太郎小屋＝太郎小屋～薬師岳～スゴ乗越小屋
- 18日 小屋～越中沢岳～五色ヶ原山荘
- 19日 山荘～一ノ越～雷鳥沢～新室堂乗越～室堂乗越ケルン～新室堂乗越～雷鳥沢～室堂バスターミナル～帰阪

柏パーティーの言の如く風雨にたたられた山行となってしまう。雨より風の強さに恐れいった次第。追い風になったときお尻が持ち上がるのには怖かった。高山植物コバイケイソウ・チングルマ・シナノキンバイ等百花繚乱を満喫した次第。昨年横山君の散骨のケルンも確認でき風雨にたたられたとは言え 山の厳しさを教えられた山行となった。

2439. 東京甲南会ビアパーティ+消息など

越田和男 07/30 (金)

昨夜、有楽町のニュートーキョーで約160名の集りでしたが、山岳部のOBは何時もより少なく、旧制の国府三郎、伊藤五介、東野の各先輩と平井吉夫と小生の5名でした。国府さんが最年長者で乾杯の音頭をとられました。

伊藤文三さんから便りあり、最近日帰りで上高地へ行かれ、3時間滞在、天気良く穂高の眺めを堪能されたとのこと。まだまだお元気です。

一方、若手?の米山バブさんは今年もアフガン通い。今度はワハン回廊に入るといってましたが、まだお帰りじゃない様子。

雨飾山 川野幸彦 07/31 (土)

昨日7/30(金)休暇を取り新潟県の「雨飾山(あまかざりやま)」に行ってきました。当初、三男(中3)と二人で出掛けるつもりだったのですが、そう思っていたのは私だけで息子にはそんな気は全くなくて結局独りで行きました。クルマで松本を夜中の2時前に出て小谷温泉登山口に3時過ぎに到着。ヘッドランプを点け4:00に登山開始。頂上に6:40。稜線は風がやたらと強く(台風の影響?)ガスもひどく視界ゼロ。黙祷のみで滞在時間30秒。頂上には小さな仏像や石像がありました。下りは濡れた岩に苦勞させられ“ころびまくり”登山口8:30。そして昼前には松本に戻ってきました。雨飾山には平日にもかかわらず40名位の登山者が来ていました。大半は御高齢の方です。山自体は何の面白味のない“ただのヤブ山”ですが日本百名山のひとつですから人気があるのだと思います。まあ時間的・体力的にもお手ごろです。今夏は8月下旬に、新穂高⇒西穂縦走⇒天狗のコル⇒岳沢⇒上高地 を考えています。どなたか

御一緒しませんか？

北海道ツーリング 途中経過 森本寛之

08/01 (日)

29日、無事北海道小樽港に着き、札幌、岩見沢、富良野とへっころへっころ自転車をこいで現在地、JR美瑛駅。観光案内の自由利用 PC からのカキコミです。

毎晩のライダーハウスは親切なところばかりで。昨日も今日もほとんどお金を使わず生活できてます。ジンギスカン、生のホタテ、ホクホクのジャガイモ無数のメロンが疲れたライダーを迎えてくれます。これからは狩勝峠を経由し阿寒湖、屈斜路湖と巡る予定です。これからも安全第一で頑張ります！

米山氏アフガンから帰国 越田和男

08/01 (日)

バブさん目的地ワハン回廊にも入城して無事帰国されました。山岳寮向け紀行文既に出て上がっているようです。68歳、まさに老人パワーですな。暑気払いにバブさん囲んで横浜で飲み会やります。

面白かったです。 柏 敏明 08/02 (月)

台風の影響を心配しましたが、無事、芦屋川遡行に連れて行って貰いました。参加者は武田会長、塩崎、浪川、井上、大森、山本父娘と小生の甲南山岳会勢とアーバンライフの廣瀬氏、山本氏、関学OBの小西氏の計11名の大勢でした。

現役時代でも経験しなかったもの凄いシャワークライムをしました。是非、アルバムの写真を見てください。この写真はビレーザイルですが、この後、フィックスを張って貰ってやっと登りました。これをトップでフリークライムした浪川君に、只、脱帽です。

何mかの泳ぎもあり、短い距離ではありましたが、これで、昨年、今年と併せて芦屋川遡行が完成、遡行の楽しさを堪能することが出来ました。皆さん有難うございました。

関学OB 小西啓右

滝登りは大変でしたが、昨日は楽しい一日を有難うございました。一年ぶりの芦屋川。今回

で核心部の完全遡行が達成できました。

それにしても、大滝をトップで登られた浪川さんの実力に感心しました。又、手頃な所で宜しくお願いいたします。

塩崎将美

去年水量多く登れなかった大滝も今年は全員登れました。ただ一昨年より水量多く登れるぎりぎりの水量だったと思います。暑い夏には最高の遊びです。



伊吹山 廣瀬健三 08/09 (月)

カンさん、塩さん、ドン吉さん、御世話になりました。

昨日より六甲山のホテルに泊まって居り、帰って来たばかりです。六甲山の植物園の散策よりも、伊吹山頂の御花畑のほうが、ズット良かったです。

暑気払い 越田和男 08/08 (日)

横浜で米山バブさんのアフガニスタン・ワハン回廊の土産話などを肴に有志で暑気払いの会をやります。

日・時：8月10日(火)17:00頃より

場 所：横浜駅西口

相鉄ジョイナス地下2階「ライオン」

参加予定者：米山、平井、大関、飯田、水渡、越田

西穂～奥穂 川野幸彦 08/13 (金)

先程“西穂縦走”から帰ってきました。3日間とも無風快晴で快適な山行となりました。谷君御一緒出来

なくて残念でした。以下報告です。

8/11(水) 上高地 7:20⇒西穂山荘 10:00

上高地からは“尾根伝い”に林の中を西穂山荘まで。ここに来たのは 20 年ぶりだが、その時は“尾根伝い”ではなくて“沢伝い”を上がった。山荘には早く着き過ぎ十分に昼寝を楽しんだ。それにしても何という人の多さだ。子供から老人まで。単独から 40 名の団体まで。凄い人だ。殆どの人が独標までらしい。ただ泊まる人はそれ程ではなくて 10 畳の部屋に 5 人だった。快適である。

8/12(木) 西穂 2:30⇒穂岳高山荘 10:00

今日の行程は9時間なのでヘッドランを点けまだ完全に寝静まっている山荘を 2:30 に出発した。快晴の下星空が美しくペルセウス座流星群を 15 個見た。ただ暗いもの多くて都会では殆ど見えないだろう。

西穂の手前で夜が明けた。独標とピラミッドは暗闇の中の通過で非常に怖かった。下が見えないとはこんなに恐ろしいものか。西穂からはいよいよ核心部となる。見るからに悪そうだが近づくとルートは見事に弱点を突いていて感心した。

まず西穂～天狗のコル間のポイント。①間ノ岳の下りの凹状の鎖場の“2歩”(足場がなく鎖を握っても振られる)と②天狗のコルへの“あと1歩”(かぶっていて地面まで届かない)の2ヶ所であった。それ以外でも悪い所は出てくるが“ペンキ印”を外さなければ問題無かった。この間は昔登った「槍ヶ岳硫黄尾根」に似ていた。赤褐色の脆い岩場である。

続いて天狗のコル～奥穂間。①ジャンダルムのトラバースの“1歩”(多分足の置く順番を間違えたと思われる)②奥穂直下の“馬の背”。であった。それ以外でも落ちたら怪我では済まない箇所が幾つも出てくるが“ペンキ印”を外さなければ問題なし。単独では全体的に緊張したが無風快晴で快適であった。ただしこのルートは濡れていたり風が強かったら取り付かない方が良いでしょう。特に馬の背は2級程度のリッジであるが風が強ければ飛ばされるかも知れない。

途中以前に登った“奥穂南稜”や“畳岩尾根”が見えた。現役の頃は「屁みたいないなルート」であったが今改めて眺めると「凄い所」である。今はもう登れない。穂高山荘は人が多く「一人布団1枚」だった。さすが

夏山最盛期！穂高岳山荘は1年の夏山合宿以来27年ぶり。

8/13(金) 穂高岳山荘 2:00⇒吊尾根⇒上高地 7:10

当初の計画では「天狗のコルから岳沢に下る」予定でしたが、好天と体力的にも余裕があるので奥穂まで行くことにしました。

今日も深夜(2:00)に出発。風は強いが快晴の下流星を20個見た。奥穂で黙祷。紀美子平で夜明け。前穂はカット。ここまで暗闇でルートを見失いそうなのと、後ろから誰かが付いてくるような気がして怖かった。

この吊尾根はこれまで 2 回通っている(1年の夏山・4年の5月合宿)。その時のことを思い出しながら駆け下った。あの時もしんどかったが今回も同様である。早朝にもかかわらず河童橋にはかなりの人がいた。上高地から沢渡までのバスは私ひとり。貸切。

自宅には9時に戻った。お盆休みのためか朝のラッシュもなかった。風呂に入りバタンキュー！「ああ！疲れた！」

日本海カヤックツアー 山本恵昭 08/13(金)

下の娘と、日本海カヤックツアーに行ってきました。切浜海水浴場から出港し、西へ西へと…。海はどこまでも深く藍色で、岸壁は水墨画のように木々を従え、山とはまた違った迫力がありました。無人の浜に上陸し、シュノーケリング。再び切浜へ帰って着ました。クラゲの襲撃で腕や脇が痒いです。

逢山峡も楽しそう。奥美濃も行きたいと思って、日程調整中です。

逢山峡 大森雅宏 08/22(日)

有馬の逢山峡、行ってきました。参加は カンさん(ホントは森本さんですが現役にも森本君がいますから愛称で)・柏さん・塩崎さん・浪川さん・山本恵君・現役の出川君・谷君・中高顧問で関学AC OBの神戸先生とワタクシ大森。

有馬口の集落の奥、阪神高速の橋脚下に 10 時過ぎに集合。沢靴と登攀具を身に着け出発。車止めから舗装路をたどり適当なところで川床へ。9 人と人数が多くて前後にばらけて進みました。はじめの堰堤は向かって右の石垣と上部の濡れた岩を浪川さん

がトップで。出川君初めての岩登りで初めての沢登り。楽しそう。

上流へ進みちょっとルートから外れて鍋谷の滝へ。山本恵君がトップでザイルを伸ばします。谷君は初めての沢登りのようでしたが、安定して登っています。ニコリホールド(この頃はガバと言うらしいですが)とは縁遠い手がかりと水しぶきのなか、神戸先生は残置シュリングに頼ることなくきりと向かわれましたが、出川君と大森は使えるものはみーんな活用しました。

ルートを元に戻って、大きな堰堤上で昼ご飯。カンさんは六甲山を越えてハイキングということでここでお別れ。

残りのメンバーは不動滝へ。ちょっと暗いゴルジュ、泳いでから側壁へ谷君がトップで取り付きました。こも楽チンではありませんでしたがトップの登りは安定しています。この滝のすぐ下流の岩場はトップロープでトレーニングできるように大分手入れがされています。滝壺には魚すくいのアミと釣りざおも置いてありました。滝のルートもボルトやピンが適所にしっかりと用意されていて、多分いつもここを使っておられる方が整備されているのだと思います。ひょっとしたらガイドの舟橋さんのお仕事でしょうか。使わせてもらって御礼申し上げます。



猪の鼻滝を抜けると明るい谷に戻ります。沢身にこだわったり滝壺に飛び込んだり銘々楽しく登りました。次の、傾斜はゆるいけれど急な流れの滝を登ると頭の上に林道の橋がかかっています。今日はここまで、ということで林道を下りました。

阪神間のごく近く、車やバイクがあったら足場も便利で半日楽しめました(本日の行動4時間足らず)。

神戸謙司

一昨日8月21日の逢山峡、どうもありがとうございました。本当に楽しかったです。これが甲南山岳会の楽しさ、あり様と、よくわかりました。

また、柏さんより、よい写真をいただきました。遡行中の写真は、数少ない貴重なもの。ありがとうございました。

山岳部現役の谷さん、出川さん、きっと良いクラブになっていくと思います。また、どこかへ一緒にできればいいなと思います。

何か手伝えることがあったら、言って下さい。今後とも、よろしくお願いします。

南バットレス行ってきました！ 森本寛之

08/27(金)

昨日、部室掃除の後、谷と甲南バットレスに行ってきました。

私はクライミングの経験がないので正直かなりビビってましたが、(下のハング以外)思いの外、順調に登れました！正直、クライミングにはさほど興味がなかった私ですが、今回3本登ってみて、どうやら今後どっぷりハマってしまいそうです。ザイルワークのいろは、カラビナの使い方など、すべて谷から教えてもらいました。後期活動に入ってもトレーニングとしてちょくちょく登りに行きたいと考えています。

焼岳 他 川野幸彦 09/11(土)

先程、焼岳に登ってきました。以下報告です。

9/11(土) 曇り+霧 中の湯P4:40⇒焼岳 7:20⇒中の湯P8:50

3:30 に松本を出て中の湯に 4:30 着。団体バスが2台止まっていた。乗用車は私以外に1台のみ。この団体は 4~50 名いる。先に行かれると追い抜くのが面倒なので早速出発。ヘッドランを点け真っ暗な登山道をゆっくり登った。急な樹林帯を抜けると笹藪の道となる。

途中、最近の雨のせいかわさきを沢山見た。ただ食べれるのか全く分からない。こんな時に山本少

年がいれば…。右に焼岳北峰。左に南峰を見ながら正面のコルを目指す。登るにしたがって硫黄の臭いが鼻をつく。間もなくコルに到着。直ぐ目の前の岩の間から水蒸気が吹き上げている。不気味である。ここから岩場を15分程登ると北峰の頂上である。頂上直下には硫黄を伴ったガスが勢いよく出ている。

頂上は標識がひとつあるだけのハゲ山。残念ながら霧で視界50m。周りの山は全く見えないが直下に真っ青な小さな池が見えた。火口湖？黙祷後直ちに下山。滞在時間1分。駆け下り駐車場には8:50に戻った。下山の途中に80名位の登山者とすれ違った。この山も人気があるようだ。

白馬岳に登ってきました！ 出川啓二 09/15(水)

伊賀上野、馬籠、妻籠(木曽)を経て、松本に入りました。白馬岳には、朝6時に猿倉荘を出発、正午に頂上、12時半に下りはじめ、5時半に猿倉荘に到着しました(しんどかったデス)。糸魚川の近くで、バイクの後輪が破損(タイヤ交換になりました)、それで雨飾山(100名山)を断念。

日本海を見ながら、宇奈月温泉、高岡、氷見に入る北陸は猛暑でした。宝達山(能登の最高峰、937m)をバイクで登り、クマの看板にビックリ。山中温泉の上のダムで、食事中にスズメバチがやってきて威嚇される(そういえば白馬で、まぶたをハチに刺されました)。

福井で、早朝から昼にかけて、大雨と雷のなか、バイクで走り、小浜(焼きサバを買い、大江山麓で食べる)、舞鶴、福知山を経て、戻ってきました。100ccのバイクは、とてもよく走りますが(時速90kmぐらいまで)、高速に乗れないのと、タイヤが小さいので安定性が良くないのと、長距離走行のためか、エンジンから煙が上がってきました。とても、楽しいツーリング&山登りでした。

快適な山小屋 越田和男 09/18(土)

最近本掲示板も老若の活発な交流が感じ取れ、興味深く拝読しています。あまり活発とはいえない熟年からの情報一件です。

かつて山小屋泊まりといえ、いつも満員でまづいメシ、たたみ一畳に何人も寝させられて、小屋の

従業員には偉そうにいわれてとのイメージで絶対イヤだと思ってました。リタイア後、シーズンオフのしかも平日に出掛けれるようになると、事情が一変し、このところ結構な小屋泊まりを経験してます。

最近の経験では「金峰山小屋」。定員30人くらいのところへ客5名。夕食後に小屋の主も一緒に薪ストーヴの周りで一杯、という雰囲気でした。ここは羽根布団でびっくり。

去年の夏、米山バブさんで行った雲取山の「三条の湯」、家内で行った晩秋の小屋じまい直前の尾瀬の「第二長蔵小屋」、先週平井センキチで行った霧が峰の「ヒュッテ・ジャベル」など、小屋の宣伝するわけやないけれど、どれも好印象でした。

高校の山岳部がこの春に泊った北八つの「縞枯小屋」なんかも、前を通った感じでは良さそうなので一度行って見ようかという気になってます。歳とっての心境の変化です。

板取川一部遡行 海の溝谷・本谷

大森雅宏 09/20(月)

鶴木さん・塩崎さん屋久島いいお天気でよかったですね。9月18日、こちらはぐずつき気味でしたが遡行の間は大雨にならず5時間ほどの沢登りを楽しみました。参加は田邊さん・ナミカワさん・現役出川君・森本君・谷君と大森。成果は前回より一歩ずつ前進、でも完遂には至らずでした。

海の溝谷

一つ目の滝は谷君トライするも激流に「もう少し」が届かず、高巻きで。二つ目の滝は谷君アブミで乗り越し。パチパチ。2番手以下は流れと寒さにあぶみにうまく乗れず、ごそごそしているうちにアブミのセットされた逆さ打ちの残置ハーケンが抜けて本日ここまで。上流から撮った写真ではただの溪流ですが、見た目とモノは大違い、オレンジ谷君の足元は急流と水位差1mあまりの滝です。(滝つぼは激流にえぐられて背が立たない)

本谷

出会いから少し上がった岩棚でお昼。ここから泳い

だり攀じたりで本流の核心のゴルジュへ。前回は水中を進もうとしてペケで帰りましたが、今回は左岸のかぶり気味のバンドをナミカワさん40m前進。取っ掛かりの1.5mが渋いのは資料の遡行記録とおり、その先も安定していない様子で、体も冷え切っているし雨模様だしもう結構楽しんだしと、帰る理由はいっぱいあって、ゴルジュ下流左岸の草つきを林道に上がりました。

板取川、観光地っぽい看板を出しているくせに、水温が低く、水量が多く、水流が早く、となかなか手ごわいところ。また修行して出直します。

帰りは村の温泉で暖まり田邊さんに食事をおごって頂いて、次は木曽福島でお会いしますと解散しました。田邊さんありがとうございました。ナミカワさん2回続けて、「ああ悔しい」でしょ。毎回結構楽しいのでまあいいじゃないですか。現役の皆さんありがとう、またお付き合いください。

田邊 潤

浪川さん、大森さん、現役 3 名の方々、板取川では大変お世話になり有難うございました。完登はできませんでしたが、小生充分に楽しみました。いままで登った沢は小生にはやや不満な簡単なものでしたが、板取は手強いのがよくわかりました。皆さんにお礼申し上げます。

あれから高遠へ走り、日、月と庭仕事で結構なアルバイトをしてきました。 ガチャ



森本寛之

初めてあんな流れの速い沢に行き、予想以上に足は引っ張られるは滝は登れないはで自

然の凄さにあらためて驚きました！

谷 勇輝

昨夜板取川より全員無事大阪に戻ってきました。今回初めてアブミを掛けた逆さハーケンが抜けるシーンがあり、これがもし次の支点まで5メートルあるとしたらぞっとします・・・

そんなこともありいろいろ勉強にもなり、楽しませてもらった一日であったと思います。

ただ一箇所悔しいところがあったので、次リベンジにいかれるようなことがありましたら是非声をかけてやって下さい。よろしくお願いします。

出川啓二

谷君が書いている「アブミを掛けた逆さハーケンが抜けるシーン」は、ぼくのことで滝壺に転落してしまいました。

逢山峡は楽しめましたが、板取川は上級者コースで、水量の多さに息ができなくなるし、滝壺には巻かれるし、高所恐怖症のぼくが、8環を使って岩を降りるし、山岳部(登山)というより、ロッククライミング部というイメージなんですが、



初めて掲示板に書き込みさせていただきました

横山咲子 09/20(月)

今回、ご報告したく、初めて書き込みさせていただきました。

昨年は、塩崎さん・鶴木さん・森本さんに大変お世話になり、初めて奥大日まで母と2人連れて行っていただきました。あの時、富山自体が初めてで、初めて観る山の美しさに本当に驚かされました。その節は本当にお世話になりありがとうございました。そ

して1年たって、本日、また室堂まで母と2人行ってきました！室堂乗越に積み上げていただいた父のケルンまでは、ガスも多く、素人女2人では、かなり！不安だったため、行かずでしたが（ひと冬越えて、崩れてしまっているのでしょうか？）、山の美しさは変わらずでした！父の生前、父から山の話・山仲間の話は、よく聞いていました。

ただ、娘の私は本格的な山には行った事はなく、正直、その時は、山の良さをあまりよくつかみきれていませんでした。でも、去年、立山のほうに連れて行っていただいて以来、父が「山好き」だった理由がわかってきました。

父はきっと、'山自体'と'山仲間'の両方が好きやったんやと思います。今回も、母と2人、剣岳や雷鳥沢の美しさにすっかり魅了されて、帰ってきました。今後も、暇を見つけて、山をみにいきたいと思っています。再度、お礼が言いたく、掲示板、参加させていただきました。ありがとうございました。 横山

なめたらアカンぜよ！芦生 山本恵昭 09/28(火)

金曜深夜、舞鶴道経由、現地で武田さんと合流。

25日土曜日は、武田さん大森さん私の3人で、カヅラ谷支流のゲロク谷左俣へ。大森さんのすぐ前を大きな雄鹿が飛び跳ねていきました。次々と手ごろな滝が現れますが、逆層の滝が多く結構微妙なバランスが必要。最後はヤブ漕ぎなしに小野村割岳山頂に。山頂で精悍な柴犬連れの地元の人が大きなマイタケを背負って現れた。うらやましい。北尾根を降りて、ゲロク谷出合へ。9時間ほどの行動で、最後のトロッコ道はなかなかしんどい。その夜は芦生ロードパークで豪華？宴会。

26日日曜日は武田さん釣講習の後、大森さん私の2人で、小野子東谷へ。手ごろな小滝が連続し快適。最後は巨大なスギやミズナラの森を散策しながら901mピークへ。下降は小野子谷出合を目指して明るい尾根を南西に進むが、巨木めぐりで疲れはて、距離感を間違えてしまった。急斜面を下りきったところは、東谷の中程！もう終了のつもりで下ってきたのでショック。まだまだ未熟です。懸垂覚悟で準備をして沢を下るが、意外と獣道が安全に出合まで導いてくれた。さすが、鹿の生活道路、無駄なコース取りが

ない。家族のご機嫌取りにヨモギ饅頭を買って夕方帰宅。



芦生は沢もいいけれど、それを取り巻く森が良いですね。広葉樹と針葉樹のバランスもさることながら、巨木との出会いが感動的でした。紅葉の季節も美しそうです。

武田さん、アプローチの長い行程にもかかわらず、ご一緒していただき有難うございました。夜の宴会もやま話が楽しかったです。

駒王集会と御嶽山 越田和男 10/12(火)

お世話になりました。先輩後輩いろんな人と話がはずみ時間がたりないくらいでした。一寸飲み過ぎて翌日に差し支えましたけど。

御岳は平井と2人ゆっくり登りました。2/3程登ったところで昼飯を食っていたら、同時に出発した浪川、森本(現役)組が頂上往復して下って来たのには少々びっくり。浪川いわく、えらいゆっくりですな、ちよっと遅すぎるんとちゃいますか。

食後重い腰を上げて、浪川組の倍以上の時間をかけて、ガスの中頂上まで辿り着き、一応の達成感は味わいました。食事時間込みで3時間半、実働3時間だったですから標準タイムです。笑わないで頂きたい。下りは標準タイムだったです。

開田高原の一軒宿、小坂温泉1泊7000円。静かない宿でした。

山本恵昭

駒王集会、有難うございました。前日の恋路峠小屋といい、各種お酒の飲み続けご馳走の食

べ続けの2日間でした。いつもの山メンバー＋久々にお会いする方々との歓談、楽しかったです。

キシメジとクリタケの味噌汁をご試食の皆様、お腹のほうは大丈夫だったでしょうか。大関様の特製だしで大変おいしくいただきました。私のセレクションでは合格だった上品な味のスギヒラタケは、食堂のおばちゃんセレクションでは不合格となり残念。

先日からの膝の不調であまり言えませんでした。台風の影響で山登りなしになったのは物足りなさが残りました。キノコも神戸と違って、奥へ入れば無尽蔵に収穫できそうでした。膝の調子を整えて、またどこか山登りを企画しますので、ご同行をお願いします。

塩崎将美

駒王の集会は高校卒業の瀬戸君や現役森本君の参加で何時も以上に盛り上がって盛会でした。

幹事さんご苦労さまでした。

ホームページの管理者と言う事で何もしていない私にお気遣いをいただき恐縮してます。有難うございました。

4回目で初めて増水の為、沢登りを中止せざるを得なかったのは残念でしたがその代わり美味いキノコ汁にありつけたのはおつりが来るほど良かったです。幸ノ川遡行は来年再挑戦したいと思います。

森本寛之

今回の木曽集会、現役は私1人、まわりは初めて会うOBさんばかりというシチュエーションでうまく馴染めるかなあ・・・という気持ちで参加しました。

1日目、恋路峠避難小屋の酒盛りで、そんな不安はヒュンと飛んで行きました。どの方も個性的な方ばかりで、すぐに肩の力も抜けました。川野さんに「おい息子っ！」と肩をたたかれかわいがられたのはとても印象的です(笑)

幸ノ川は残念ながら中止になってしまいましたが、昼間苦労して採ったキノコがおいしいみ

そ汁になったりで結構楽しめました。(残念ながら目標の松茸は採れなかったですが・・・)

駒王の集会でもとても温かく迎えられとても安心しました。

初めて会う多くの先輩方とお話ができ、改めて偉大な先輩方を輩出しているという山岳部の伝統の重みを感じました。またこのような機会があれば、積極的に参加させていただきたいです。

川野幸彦

皆さん木曽では色々とお世話になりありがとうございます。あいにくの天気でしたが「キノコ狩り」に「盛大な宴会」と楽しい3日間でした。「キノコ狩り」は癖になりそうです。これは面白いです。奥が深いです。大森さん山本少年。またこのような企画がありましたらお知らせ下さい。

大森雅宏

駒王では何かとお世話になりお礼申し上げます。井上さん作成の会員短信リーフレット、毎度ながら手間のかかったこととお察しします。実は山岳寮の会員短信は全部あのファイルをわけてもらって原稿にしています。ほんとにありがとうございます。

松山君、久しぶり。あなたの持込パソコンで槍穂の空中散歩、楽しめました。

ほかにも剣と後立がシリーズであるようです。3千円台の価格でしたがお手ごろのおあそび。「剣」を買ってみようかな。

木曽駒・集会の回答など

福井グリーン 09/30(木)

皆さんのご様子は、いつも「掲示板」で拝見しています。ご無沙汰していますが、気だけは至って元気です。

「木曽駒の集会」には、足腰がくたばる前に一度参加したかったのですが、とうとう回答の締切日になってしまい、失礼しました。

山に登るんだとばかり思い込んだ「家中の反対」、又三つばかり行事が重なり、殊に陶芸の展示会の世話もあって、残念ながら欠席するこ

とになって、残念でなりません、来年は？

白樺林 福田信三 10/22 (金)

福田です、ご無沙汰しております。

4,5 日北海道に居ました。大雪、黒岳山麓を散歩。先の台風で、葉は落ちてしまいましたが、白樺林が印象的でした。

逢が山ハイキング 山本恵昭 10/31 (日)

今日は雨だと思っていたのですが、朝起きると何とかもちそう。嫁さんを誘って(子供達は誰も一緒に行ってくれなくなりました)、有馬の逢が山へ行ってきました。夏に皆さんと水遊びをした逢山峡の林道から山道に入り、静かな山頂へ。たまたま、標高722m、私の誕生日と同じでした。

宝塚市惣川谷支流 阿部康彦 11/03 (水)

ハイキングのついでに宝塚駅近くの惣川支流に15年ぶりに入ってみました。大学一年の時支流奥壁のアプローチとして西浜先輩と使った事があり懐かしくなって中山寺のコースから一人下りました。駅に近い割に本流と異なり汚染源が少なく碎石所の通行止め看板のお陰で人も余り入らない事から比較的ゴミも少なく水もきれいな方だと思います。沢が小さい割に滝が多く岩岩しつつ2時間程度の行程であるため私の様な時間と資金の乏しい方には特にお勧めです。

さて、学生の時奥壁のアプローチとしてしか認識していなかった為殆ど記憶になくお気軽にハイキング気分に入溪してしまいおかげで冷や冷やさせられ挙句の果てに淵に落ちて全身ずぶ濡れになってしまいました。滝を直登(一応登山道あり高巻き可)されるならばザイルかお助け紐は用意しておいた方が良いでしょう。途中でクライマーに忘れ去られた岩壁惣川谷支流奥壁(3ピッチ位)が見れるかもしれません。

アプローチは宝塚駅から阪急バスすみれが丘一丁目(20分位・210円)で下車。進行方向道なりに宝塚北高校の真下をカーブして碎石所の中を通る道を20分も歩くと武田尾に向かう33号線に合流。ここに橋がありこの下が惣川(橋に惣川と書いてありま

す)。30m 上流のガードレールから薄い踏み跡とゴミに導かれすぐ下の河原へ。5m 下流に碎石所私有地につき立ち入り禁止の看板とロープが張っておりこれを無視して入溪。

滝や淵を越えどんどん行くと左岸にブッシュ交じりの大きな岸壁が見え、この辺りで核心部の滝が連続しこれを越えると平坦な河原となつてすぐの二俣で中山方面への登山道が出会う。その先はどうなっているのかは分かりません。路がわからなければ右俣が中山の登山道のそばを通るのでそちらに。早く帰りたければ自衛隊演習場へ上がり阪急中山か周辺駅へ(中山の温泉、宝の湯まで足を延ばしても良いのでは)。時間があれば中山最高峰を経て最澄寺川経由で阪急山本まで(駅前の鰻屋がうまいそうです)。

入溪点付近は車を止められません。どうしても車がよければ宝塚駅前のSORIOに有料駐車して下さい。タクシーであれば33号線沿いのスポーツニッポンゴルフ前バス停を目指してもらえば分かります。このバス停からは300m位でしょうか？下らねばなりません。今回は行き当たりばったりで行っただけなのでいずれは相応の装備で滝を登ってみようかと思っています。

比良合宿無事下山 谷 勇輝 11/05 (金)

比良合宿無事下山することができました。(志賀駅PM3:10着)

この時季の比良は初めてでした。

紅葉には一足遅かったようですが、真っ青の空を分ける茶色の稜線、結構迫力があつたと思います。また早朝琵琶湖から顔をのぞかせるオレンジに光る太陽がとてもきれいに見えました。

烏帽子岩 塩崎将美 11/07 (日)

烏帽子岩にフリークライミングに行ってきました。参加者はOB、武田会長、塩崎、浪川、山本恵昭に現役森本君と谷君、特別参加私の娘の7人。谷君にトップロープを張ってもらいクライミングを楽しんできました。私は4本も登り最後は腕が張り力尽きました。楽しい岩登りでした。途中OBの誰かがアップ/アップと岩の途中で叫んでいましたが懐かしい言葉で

す。娘からはアップとは何の事と問われ、時代とともに用具は大きく違っていますが使う言葉も変化していると言うことでしょう。ちなみに今は”テンショオン”と言うようです。

現役の皆さん又こんな機会を作ってください。

森本寛之

つい先日まで現役2名でのフリーだと思っていたのに、実際蓋を開けてみれば大勢のOBさんに来て頂き本当に楽しかったです！

自分にとって初めてのゲレンデで、何も分からなかったのですが、出だしの1歩としては(いろいろ反省点も見いだせて)なかなか良い経験が出来たと自負しています。

谷 勇輝

7日鳥帽子に来ていただいたOBさんへお忙しい中、現役にお付き合いしていただきどうもありがとうございました。

塩崎さん、武田会長には同乗させてもらいたいへん助かりました。

ビレイを引き受けてくださった方へ

正確なビレイで安心して登ることができました。

どうもありがとうございました。

おかげでやっと関西で一番お手軽な5.11aを落とす事ができました。

是非今後も現役でゲレンデへ行く機会があれば掲示板に書き込みたいと思います。また今回参加していただけなかったOBさんにも来ていただけたらと思います。次回は堡塁??



山本恵昭

7日日曜日、現役の鳥帽子岩に遅れて参加。下からも聞こえる塩崎さんの声に導かれて岩場につくと、三宮のような人ごみにびっくり。フリークライムってはやっているんですね。昨日の静かな山と大違い。岩場にくもの巣のようにザイルが張られて、最新の用具で登っている姿を見ると、自分が場違いでした。グレードも5.9やら5.10やら、それって昔の何級なん？オレンジ色があせた20年前のウィランスシットハーネスを一度出したものの、すぐにまたザックの中へ。

浪川さん、塩崎さん、谷くんは今ふうのハーネスやシューズを借りて3本登ると腕パンパン、途中で肩がつりました。ビレイをしていただいた塩崎さんのお嬢さんと現役の2人、有難うございました。帰りの車で、ハンドル握る手がプルプルしていましたが、心は晴れやかでした。

扇の山沢登り 山本恵昭 11/09(火)

6日土曜日、大森さんと扇の山の鳥取側、上地川の唐戸谷に行ってきました。金曜夜発で道の駅「はっとう」で仮眠。翌朝、舗装された林道を上がって本谷と唐戸谷出合に8:10。

赤い岩が美しい谷で、ざらざらした火山岩？にフリクションが良く効きました。さすがに寒いので、滝場ではできるだけ濡れないようにコース取りしたつもりでしたが、股までは水に浸かってプルプル。大ズッコに11:30。すぐ降りるにはちよっと早いので、例によってキノコ狩り。大森さんがナメコの成菌大株を見つけて目が爛々…。クリタケも大量、はしりのムキタケも少々。

大ズッコ14:50から西にブナ林の道を下ると、出合に16:00。扇の山は、何回行っても、森が深くて良い山です。

北八ヶ岳 塩崎将美 11/12(金)

北八ヶ岳の横岳に行ってきました。

11月10日。

メンバー、雨宮、武田、塩崎。

前夜雨宮山荘にお世話になり朝から車を飛ばしピラタススキー場へ。ロープウェーで一気に標高2,200

mへ。坪庭周回コースを途中から分かれ横岳へ。1時間で横岳頂上。360度の展望は見事。八ツ、南、中央、御岳、乗倉、穂高、槍、後立、遠く雨飾と少しかすんでいましたが山が特定できすばらし眺め。もう少し山に雪が降り雪稜がはっきりすればもっと綺麗なことでしょう。最高の展望台です。



帰りは途中から三ツ岳、雨池山、雨池峠経由で坪庭へ。三ツ岳は岩がゴロゴロで少し緊張しました。縮涸山荘付近も綺麗な景色です。坪庭は溶岩台地でシーズンにすれば高山植物を楽しめるのではないのでしょうか。

お気軽な家族連れでも楽しめるお奨めの山です。

ネパールより戻りました 福田信三 11/18(木)

ネパールより戻りました。

予定通りゴーキョピーク5,360mより、エベレスト、ローツェ、マカルー、チョーオユー、ヌブツェ、などなどの大景観に浸ることが出来ました。同行者が死んでも良いとつぶやいたのが、判る気がしました。しかし、5000mを越えた時点で、高山病で3人がへりでカトマンズへ、内一人は3日間危篤でした。ヒマラヤの懐の広さを知らされました。自分も低酸素での苦痛を経験させられました。写真は整理後アップしてもらいます。

やっぱりエベレストはダントツに背が高いですね。

(本号に紀行を掲載しています)

山岳部の HP を自慢しました 越田和男 11/20(土)

17日の夜、東京甲南会の評議員会というのがあり、東京甲南会の HP の立上げが話題になってましたの

で、山岳部では既に数年前に立ち上げて活用されていることを報告しておきました。

老若会員の交流が活発になったこと、80代の旧制OBから20前後の現役部員までが掲示板を楽しんだり、現役部員が60代のOBとパーティーを組んで山に行ったり出来るのです、と自慢しておきました。

牧野さんのように、会員のお嬢さんまでが楽しんでくれていると言えみんなもつとびつくりしたことでしょう。惜しいことしました。

この評議員会には50名程参加、内山岳部OBは旧製の国府三郎さん、新制では竹中統一君に小生でした。会長は水野正人(美津濃社長)さんで、彼の親父さん故水野健次郎氏が山岳部OBだったこともあり、山岳部の現状よくご存知でした。(一度部員ゼロになったことも含めて)

カニキノ鍋お疲れ様でした 山本恵昭 11/22(月)

カニキノ鍋、ご参加の皆様お疲れ様でした。

土曜日は雨の予報が大きはずれ、快晴。6:30から奥のほうの森へ入ってみました。主なポイントはすでに前日?の足跡が・・。昆虫館前泊の武田さん・谷くんは集合時間までに一運動。

集合後、森本さん・塩崎さん・浪川さん・谷くん・私でキノコ狩りへ。昨年たくさん採れた登山道沿いに探しましたが、あまりめぼしい収穫は無し。沢から泥壁登りで、そこそこナメコ・ムキタケを手に入れることが出来ました。浪川さんが森中に響く大声で「やった!ナメコ」と大興奮、大騒ぎ、大喜び。ポイントがばれないように、自分の気配を消して静かに森を徘徊しているキノコプロはさぞかし驚いたことでしょう。

温泉は、例年の混んでいるユートピアでは無く、キャンプ場横の松の湯へ、¥260貸切、正解。

いつも使わせてもらっているキャンプ場の炊事場が、今年は入れないようになっていてびっくり。マナーの悪い人がいたのかも知れません。仕方なしにブルーシートを張って即席の調理場を。武田さんが、椅子やテーブルなどいっさいがっさいお持ちだったので助かりました。雨と砂で大分汚れてしまいましたが、有難うございました。

山本真博さん・井上さんも到着し、にぎやかに準備。調理も皆さんお手伝いしていただき、大助かり。焼き物は浪川さん、鍋は塩崎さん、キノコ洗いには井上さん、谷くん。6時頃？から食べ始め、大森さん到着の11時頃には、もう私はおねむでダウンでした。

日曜の競市でカニを購入。今年は豊漁ではなかったようです。

解散後、昨日キノコ狩りができなかった大森さんのリクエストで、帰り道に氷ノ山へ。昨冬、山スキーの時に見つけておいた惚れ惚れするブナ林でナメコを採集。ずっと居たいような森でした。

真博さん、お酒どうも有難うございました。少しは嫁さんのポイントが稼げるかも知れません。

遠方から参加の森本さんをはじめ、沢山のご参加有難うございました。森本さんが、山の格好でカニの詰まった大きな発泡スチロール箱を抱えて電車に乗られているのを想像すると、なんか楽しくなりますね。

谷 勇輝

先日参加させてもらったカニ・キノコ鍋では皆様には大変お世話になりました。

キノコ狩りでは地面からひそり輝いているなめこを見つけたときの楽しさは癖になりそうです。今回はアルバムに載っているぐらいのなめこを！と期待が膨らみます。昨日持ち帰ったカニ&キノコは家族で美味しくいただきました。なめこの大きさには驚いていました。

武田さん、往復あれこれ本当にお世話になりました。ありがとうございました。

米山氏のワハン回廊報告 越田和男 12/01 (水)

昨夜東京赤坂で、パミール中央アジア研究会の月例会があり、米山バブさんがワハン回廊の旅の報告をされるというので小生も参加拝聴して来ました。

十数人の小集会でしたが、錚々たる人達の集まりで、多数のスライドを使っの約1時間の報告とそれに次ぐ質疑応答がありました。バブさんの写真の腕もますます冴え、大画面で観ると迫力もあり、なかなか好評でした。

ワハンのことで是非聞きたいことありと、遅れて2次

会に駆けつけて来られた御婦人あり。それが何と田口二郎さんの長女の井出マヤだったので驚きましたが、マヤさんも当夜の演者が甲南の人とは思って居られなかったのでびっくりされてました。一寸だけのつमोरの2次会でしたが、かくして大いに盛り上がり遅くなってしまいました。

東京・忘年会 越田和男 12/12 (日)

昨日、海老名の大関邸で大関の手料理を囲んで暮れの一時を楽しくすごしました。今回も新しい料理へのチャレンジあり、なかなかのものでした。感謝、感謝。

メールと FAX での急な連絡でしたが、伊藤文三さん、福井實(グリーン)さん、砂川さん、平井、大関、飯田、森岡、越田の 80 代から 50 代の8名が集まりました。



冬の上高地 川野幸彦 12/28 (火)

御無沙汰です。皆さんお元気ですか？12月半ば頃より疲労と風邪で体調が今ひとつでしたがようやく元に戻り昨日独り日帰りで上高地に行ってきました。以下報告です。

上高地 吹雪(タイム)坂巻温泉 9:45⇒釜トンネル入り口 10:05⇒河童橋 12:15⇒中の湯 13:55

松本から坂巻温泉までは新島々を過ぎた辺りから凍結路。坂巻温泉に駐車(500 円)。ここから釜トンネルまでトンネルを二つ抜け間もなく到着。この間、直ぐ脇を大型車がかすめ余り良い感じがしない。釜トン

は新しいトンネルも貫通しているようで入り口が2本あった(新道は通行止め)。旧道に入る。トンネル内は事前情報によると“凍結していて真っ暗”との事だったが“濡れているだけで蛍光灯も点いていた。”(この時期はこの様であったが2～3月では凍っているかも知れない。)たまたま工事の大型ミキサー車が通るくらいで全く問題なし。ただし結構急坂でしんどい。また途中漏水がツララとなり落ちてこないか気味が悪い。

トンネルを抜け 30 分位行くと大正池に到着。下流部が凍っているだけで全面結氷にはほど遠い状態であった。吹雪の中遊歩道を辿り河童橋を目指した。途中 20 人位の登山者に会った。中には凍傷になりそうな軽装もいた。殆どが中高年。遊歩道は小石が無い分夏よりも歩き易かった。河童橋には私以外登山者は誰もいなかった。吹雪とガスで展望ゼロ。滞在時間1分。ただ河童橋から 100m程下流で堰堤の工事をしていてミキサー車が数台止まっていた。これは興ざめである。帰りは凍結した車道を戻った。

釜トンの入り口にはタクシーがいて坂巻温泉まで。720 円。ここで露天風呂(500 円)に入った。疲れた。吹雪の露天風呂はよいものである。

(PS)

① 駐車場:“釜トン入り口の路側帯に駐車出来るらしい”と聞いていたが、今シーズンはコンクリートブロックで囲ってあり駐車不可能であった。数年前に駐車車両を避けるためにスリップ事故が続出しこの様になったらしい。したがって沢渡か坂巻温泉に止める事になる。沢渡にはタクシーがいた。坂巻では中の湯のタクシーを呼ぶことが出来るらしい。徒歩でも 20 分。

② 宿泊施設:年末年始のみ大正池のホテルが営業中。これ以外はお化け屋敷。

冬山合宿に参加して 山本恵昭 12/29(水)

途中から合流で、現役の合宿に参加してきました。たった2日間のお供でしたが、気になることがいろいろと有りました。すぐ上の先輩ならズバズバ言うのだろうけれど、年が離れているせいもあってついついオブラートに包んで言いがちになり、伝わりにくいのかも知れません。事故が起こってからでは遅いので、

辛口で一言！

上級生がいない状態で仕方ない面もあると思いますが、食料、テント生活、行動など、多くがちぐはぐな印象を受けました。何か気分流されているようで、個人個人でその辺を散歩しているのと同じ感覚で行動している様子。現役の2人には、もう少し、自分たちなりに何がしたいのかという合宿の目的をはっきりさせて、それに向けた合理的な考え方を身に付けてほしいところです。

知識や技術は、トレーニング山行をそれなりに重ねて身に付けるとしても、3月あるいは5月ぐらいを目処に、良く練りこんだ自分たちの意欲が感じられる合宿を組んでみてください。期待しています。



越田和男

久しぶりの現役の冬山合宿が無事終わり何よりでした。指導に当たってくれたOBの大森、山本両君に感謝します。森本、谷両君はビギナーの謙虚さを何時までも忘れずに、これからの幅の広い山登りを楽しんで下さい。

森本君の最初の写真を見て懐かしさが込み上げてきました。五竜方面とありましたが、正面の黒っぽい山が白馬鍾でその右が杓子です。

このあたりはかつての甲南のゲレンデで、何回となく足を運んだ方が多いと思います。この写真ではっきり識別できる白馬鍾の北稜や杓子の東壁などに初登攀を記録を残しています。

昭和11年に杓子東壁の初登攀者のひとり福

田泰次(フクデン)さんは今年亡くなられました。小柄なフクデンさんと長身のパートナー山口雅也さんのステップ・カットの歩幅が合わずに難儀したと言う話を、面白おかしく話されていたのを思い出します。



山辺の道 山本恵昭 01/08(土)

今日、友人に誘われて奈良の山辺の道に行ってきました。よく知らないままなめていったら、桜井から天理まで南コースだけで 16km、結構足が痛くなりました。でも、奈良盆地をながめながら、深い歴史の息吹を感じることが出来ました。良いトレーニングになりました。

大峰地獄谷アイスクライミング報告 谷 勇輝

01/28(金)

先日(1月22日23日)会の山行で大峰の地獄谷シェイクスピアにてアイスクライミングに行きました。テスト期間中ということもありましたがやはり山最優先!? アイスにける期間は短いのでいけるうちにと言う事もあります。

今回が初アイスで、バイルは会の方にお借りして、いろいろ試させていただきました。シェイクスピアは高さが約 35m 垂直に切り立った氷の柱、壁。上部にさしかかるともう手がパンパン。そうなるとバイルを氷に打ち込むのが困難? に...

雪見会のお礼 山本恵昭 01/31(月)

初めて雪見会に参加させていただきました。カンさん浪川さんの山への情熱、現役の若さ、皆さ

んの華麗なスキー術。いろいろな方のお話が聞けて楽しかったです。ちょっと土曜日は飲みすぎましたが・・・飯田様、長い間このような会を続けておられるのは凄いですね。近づいてからの土壇場参加にもかかわらず、お世話になり有難うございました。

また、武田さんには、車への同乗、別荘での宿泊、山とグレンデのどちらも楽しみたいという私の欲張りに合わせていただき、感謝しています。有難うございました。

土曜日、白馬乗鞍山頂の地吹雪は、久々に自然の洗礼を受けたようで快感でした。

日曜日は、新雪とおニューの板にはしゃぎすぎて膝が悲鳴をあげていますが、私も皆様のように、いつまでも山とスキーが楽しめるよう頑張りたいと思います。

田邊

飯田さん、今年も大変お世話になりました。正月の妙高で調子が良かったものですから梅池でも、と思って張り切って行きましたが生憎の天候で少し消化不良のまま帰ってきました。しかし 30 日の夕食後の雑談は実に有意義でした。アメさん、バブさんが居なかったのは一寸淋しかったですね。

他の方々にも大変お世話になり有難うございました。 ガチャ



森本寛之

雪見会とても楽しい時間を過ごさせていただきました。有り難うございます。

1日目は快晴のなか乗鞍ツアーへ行くことができ、2日目は1日中梅池で滑り、3日目はさらに八方でと、とても贅沢で満足な3日間でした。

駒王の時より多くのOBさんとお話することができ、かつての苦労話などとても趣深かったです。特に平井さんの足の痛々しいお話はとても印象に残ります。

谷 勇輝

雪見会に参加させていただき有難うございました。

OBの方々には大変お世話になりました。

昨年12月の山スキー合宿？では、下り散々な有様(靴のせい？)でしたが、今回スキースクールに入る事により何とか足をそろえて滑るまでになりました。これも一重にあの指導員のおかげ、またどこかで合えないかなあ～

武田会長 山本さん、お疲れのところ運転していただき、その上自宅まで送っていただき大変感謝しております。

平井さん、田口兄弟の貴重な話聞かせていただき有難うございました。あのような話を聞くとますます田口さんに会いたいと思いましたが、時すでに遅く残念でなりません。しかし残された資料を読み、どのような人物であったのか思い浮かべたいと思います。

武田雄三

飯田会員のお世話により、今年も賑やかに楽しく過ごさせて戴きました。参加者は長老ガチャさん・コッシン・平井センキチ・シエフ大関・興行主-オジンこと飯田さん・カンロク・ユウサン・塩サン・ドン吉・マサヒロ先生・シゲアキ先生・現役の森本/藤本/谷でした。

皆さんには現役諸君のために色々のご配慮戴き、有り難う御座いました。

飯田 進

雪見会ご参加の皆さん、お疲れさんでした。横着幹事で行き届か無かったこと多々あったでしょうがご勘弁の程を。

弱冠から古希まで、幅広い年代の方々がそ

れぞれに雪を楽しまれたことと思います。こんな集いが出来るのも山岳会ならではの、と思います。良い雪見会でした。幹事自画自賛。

白馬五竜&47 森本寛之 02/06(日)

またまた白馬に行ってきました。今度は白馬五竜&47です。

上部はガスっていたものの、その分よく冷え込みフワフワの腰までパウダースノー！雪質は発狂するほどに最高でした。今冬デビューした愛板第1号と共に白馬のパウダーに喰らいつきました。

1日目は大人しく設定されたコース通り滑りましたが、2日目はそんなことでは我慢できずオリジナルコースを創作！！

あちこちに自分だけのシュプールを刻み、リフトで登り返すときにそれを見て怪しげにニヤニヤしていました。自分のスキー技術も先週と比べ見違えるほど向上(自己評価)し、かなり自信もついてきました。

御在所アイスクライミング 谷 勇輝 02/07(月)

今年の冬山(明神東稜)、アイス(大峰、御在所)の写真を塩崎さんへ添付しました。

先日の2月5日～6日 御在所へアイスクライミングに行きました。小屋泊まりで来られている方たちなど、アプローチでは行列ができるほど、大勢のクライマーが訪れていました。しかしその中で大学山岳部を一度も見かけなかったのが少し寂しい？残念？な気がしました。

八甲田 塩崎将美 02/12(土)

八甲田に3泊4日で行ってきました。ツアーはゴンドラ頂上から八甲田温泉まで5Kmを歩き滑ってきました。途中ボーダーがスノウシューに履き変える所が2箇所ありましたがスキーヤーはシールは使わず上りました。樹氷を縫いシュプルー一本無い斜面を滑り樹林帯を滑りゲレンデと一味違うスキーを満喫しました。

八甲田のゲレンデはリフト1本だけですが丁度毎日雪が降りましたから圧雪されていない新雪を思う存分？滑ってきました。ゴンドラ利用のコースは山スキーの世界です。ゲレンデを飛び出したいが登るの

はしんどいから嫌だと言うスキーヤーには絶好のスキー場です。

雨雨雨の銀杏峰 山本恵昭 02/19 (土)

昨夜、激しい雨の音を聞きながら車中泊。朝も雨で、ゆっくり朝食。8:30 頃、小降りになったので雨具を着てとりあえず出発。降ったりやんだりの中、志目木谷東尾根林道を1時間、林の斜面を2時間、997mピークまで登った11:30 頃には、風も強くなり、その上はガスで視界もなし。あっさり諦めて、雨を吸ったグジュグジュの雪の中を苦労して滑り降り、大野市のお風呂に。雨にたたられた銀杏峰でしたが、大森さんとワイワイと遊んできました。

戸倉ラッセルハイク 山本恵昭 02/27 (日)

下の娘と、戸倉のやまめ茶屋から林道スキーハイクに行ってきました。本当は新雪のブナ林をすべるつもりで、三の丸くらいまでいければと思っていましたが、膝までのラッセルにギブアップ。林道を3時間ほど登り、昼食とおやつを食べて、下りも滑らない新雪の中、漕いで歩いて車まで戻りました。

こんなことならゲレンデでパウダーを滑った方が楽しかったかもと後悔しながらも、木々の枝が雪化粧をして美しかったです。最後に道の駅でイチゴソフトクリームを食べて、娘のご機嫌取り。いつまでついて来てくれるかな？

楽しんできました kannroku 03/08 (火)

3/6 福井大野の銀杏峰に登ってきました。意に反し快晴無風での登攀でした。いこいの森前駐車場には10 台程の車、最初はツボ足で階段状の踏み跡を、途中よりシールで10 名程の人達と出会ったが頂上までシールで登ったのは我等だけか。ツボ足の方が断然早い。林間帯を抜け出す。1100m辺りから見る白山連峰・雪に覆われた荒島岳・下には大野盆地綺麗な景色。

8:30 登攀開始～12:30 頂上(頂上は風強く寒かった) 13:00 下山。勿論スキーで。谷筋に降りたかったがドン吉リーダーの雪崩心配で尾根筋を降りることに。途中1000m辺りより小葉谷に。3人思い思いのル

ートをこけながらの滑降、それなりに楽しんで駐車場へ15:00 着。天候に恵まれ楽しい山スキーでした。

塩崎将美

銀杏峰は転びまくり雪まみれになりましたが楽しい一日でした。シールでの登りは慣れない為しんどかったですが、2年前の三田原山のゲレンデの靴で登った時と比べるとはるかに歩きやすかったです。やはり道具は大切です。

カンさん、浪川君お世話になりました。また連れて行ってください。



ハチ北高原スキー場 柏 敏明 03/14 (月)

13日(日)14日(月)と雨宮さん、雄さん、塩崎君にハチ北高原へ連れて行って貰いました。

雨宮さんにパラレルターンの奥義を、伝授して貰いました。極めるのはまだまだ先ですし、とても皆さんについて行ける状態ではありませんが、何か、感じる所があり、スキーが楽しくなってきました。

天気は快晴無風、この時期にしては雪質はさらさらで最高。ホテルはリフトのすぐそばで小ざれい。夕食のすき焼きの肉も旨く、2日分のリフト券が付いて、11,000 円とお値打ち。

楽しい二日間でした。雨さん、雄さん、有難うございました。来年は是非、皆さんと一緒にハチ北高原へ行きたいですね。その時には、??した小生のスキーを見て貰えるでしょう。...エヘヘ

笹倉温泉から火打山 山本恵昭 03/22 (火)

森本さん・浪川さん・大森さん・私の4人で、笹倉温

泉から火打山へ行ってきました。山の弱点をつないだ絶妙なルートで山スキーを堪能してきました。60台ペアのお元気に感服！

20 日笹倉温泉発 7:00、焼山北面台地末端の 1250m 付近に到着 11:50。東向きの手頃な斜面を2時間かけて、2室+キッチン？の快適な雪洞が完成。朝晴れていたのに夕方には雪。

21 日朝起きると、雪で出口が埋まっていたひと騒ぎ。上部はガスに隠れ風も強いが、天候回復を信じて火打山へ向けて出発 6:00。1350m 付近で賽の河原を越え、1420m 付近でもう一本溝状の谷を渡り、谷にはさまれた台地終点 1620m まで登る 8:00。この頃は天気も回復し快晴。ここから左の谷をつめて、さらに 1760m 二股を左へ谷沿いに少し登る。雪は安定しているが、雪崩と吹溜りラッセルを避けて、左の尾根 1860m 付近に登り尾根上を行く。谷の源頭急斜面を右にトラバースして影火打からの斜面に出る。後はひたすら登ると影火打北の平坦地 2280m に 11:30。凍りついた斜面にクローを蹴り込んで火打山 12:10。シールをはずして山頂から滑降。稜線はガリガリに凍っていてけっして楽しくないが、影火打北の平坦地からの斜面は程良いクラストで快適。谷に入ると脛ほどの新雪に。谷から台地に戻ると一安心 13:00。緩斜面を各自自由にシュプールを刻んで雪洞着 14:00。

明日は雨の予報、荷物をまとめて下山 14:30。重荷にあえぎながら、16:00 車着。焼山温泉で汗を流し、糸魚川の回転寿司で下山祝い。森本さん浪川さんご馳走様でした！深夜神戸着。

02 年三田原山～火打山、03 年昼闇山～焼山、04 年天狗原山～金山と、3月、頸城に四年連続の入山となります。個性的な造形と変化に富んだルートにますます魅力を感じています。

kannroku

頸城より昨日帰って来ました。大森・山本恵両君にはいろいろとお世話になりありがとう。3/21 最高の空模様となり火打山めざせども体力の限界には勝てず、途中 2000m 辺りにてギブアップ。後はお若い方に。

でもパウダースキーを満喫いたしました。雪

洞をも体験し充実した山行でした。大森・山本恵さんまた連れて行ってください。妙高に行った塩さんの適切なアドバイスにも感謝。

Donnkichi

大森・恵昭君 2 日間本当にお世話になりました。カンさんの体力には恐れ入りました。前から頸城は良い所だと聞いていましたが、今回山スキーには最高の場所だと実感しました。病みつきになりそうです。

塩崎さん、真博さん次回はぜひ一緒に焼山北面台地に行きましょう。



私の履歴書

日経新聞『私の履歴書』

牧野 宏 11/16 (火)

11月から連載中の武田薬品工業会長・武田國男氏の『私の履歴書』11月8日の記事写真をすでにご覧になられた方も多いと思います。この部室前の写真は、大関君、柏木君が写ってます。当時は、高校山岳部員が大勢在籍されていたのですね。確か彼が中3の時、春の杓子南股、高1の夏に剣合宿から針の木と一緒に縦走したのを覚えてい

ます。平成12年春、小川先輩から彼をKAC会員にとお指図頂きました。鳥居会員等のお力添えで説得いたしましたが『中・高校の一時期しか在籍していないので、今更の入会はご遠慮させていただく』とのことでした。と言う経緯がありました。

武田國男氏とKAC

廣瀬健三 11/16 (火)

彼が山岳部に触れたのは、なにか心境の変化があったのでしょうか。

甲南高校山岳部の合宿に数回参加したのは事実です。腕っ節が強かったのを覚えています。彼と同期の柏木兄、カシブーと映画を見に行き、カシブーだけが引っぱり映画館に入れませんでした。カシブーの悲しそうな表情が、目に浮かびます。かれこれ 50 年前の思い出です。

私の履歴書

武田 國男 ⑧

話きた。「お兄さまと違いますね」

彼らはクリスマスになると、カードとともにワインやウィスキーを送ってくる。それも上等なものをばかりをカートンで自由化以前のことで、それを三宮のバーに持ち込むと

に挑戦してみたかった。ホームグラウンドは声屋のロックガーデン。露出した花こう岩の岸壁が格好の岩登りのトレーニング場だ。私は自宅の洋館の急こう配の屋根に出て、神戸の街並みと海を見下ろすのが好きだった。

忍びよく身軽に歩き回っていたから垂直の壁も平気だった。夏休みともなれば合宿で横、穂高など主に北アルプスを毎年のように縦走した。冬山、春山、山スキーといっぱしの岳人を気取った。

甲南高校に進学したのは一九五五年(昭和三十年)のことだ。その前年に武田薬品のアリナミンが世に出ている。関西でのテレビ放送もそのころから始まった。父が「テレビもてきた」と言った時は大騒ぎだった。

放送開始といつても駅や繁華の街頭で見えていた時代で、家庭用としてはかなり早かったはずだ。夜、食事がすむと皆、大広間のテレビの前に集まった。力道山シヤア兄弟のプロレス、「お笑い三人組」に「ジェスター」。テレビ機数の常連は大関さんといじやを筆端にお手伝いさんと私。

高校は四クラスで、Aが受験コース。B、Cこそ私が配属されたD組は、勉強より個人の持ち味を伸ばした方がいいと思われ面々が多かった。放任してきた母もこのままでは将来、武田家の恥さらしなヤマが当たればの話

で、成功率は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

高校生ぐらいになれば小遣いが欲しい。相変わらずケチな親に一計を案じた。我が家では欧米の製薬会社とかのトップを招いてしばしばパーティ

をやって、成功は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

高校進学

放送開始といつても駅や繁華の街頭で見えていた時代で、家庭用としてはかなり早かったはずだ。夜、食事がすむと皆、大広間のテレビの前に集まった。力道山シヤア兄弟のプロレス、「お笑い三人組」に「ジェスター」。テレビ機数の常連は大関さんといじやを筆端にお手伝いさんと私。

高校は四クラスで、Aが受験コース。B、Cこそ私が配属されたD組は、勉強より個人の持ち味を伸ばした方がいいと思われ面々が多かった。放任してきた母もこのままでは将来、武田家の恥さらしなヤマが当たればの話

で、成功率は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

高校生ぐらいになれば小遣いが欲しい。相変わらずケチな親に一計を案じた。我が家では欧米の製薬会社とかのトップを招いてしばしばパーティ

をやって、成功は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

をやって、成功は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

テレビ機数の常連に

山岳部でエネルギー発散



高校の山岳部の仲間と(後列右から3人目)

語のほかになぜかドイツ語が必修で、たまたまドイツ語の先生が山岳部の顧問だった。合宿中、先生が滑って骨折し、私ももう一人でふもとまで下ろしたことがあった。英語にも増して苦手だったドイツ語、かくて落第を免れたのである。(武田薬品工業会長)

甲南高校に進学したのは一九五五年(昭和三十年)のことだ。その前年に武田薬品のアリナミンが世に出ている。関西でのテレビ放送もそのころから始まった。父が「テレビもてきた」と言った時は大騒ぎだった。

放送開始といつても駅や繁華の街頭で見えていた時代で、家庭用としてはかなり早かったはずだ。夜、食事がすむと皆、大広間のテレビの前に集まった。力道山シヤア兄弟のプロレス、「お笑い三人組」に「ジェスター」。テレビ機数の常連は大関さんといじやを筆端にお手伝いさんと私。

高校は四クラスで、Aが受験コース。B、Cこそ私が配属されたD組は、勉強より個人の持ち味を伸ばした方がいいと思われ面々が多かった。放任してきた母もこのままでは将来、武田家の恥さらしなヤマが当たればの話

で、成功率は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

高校生ぐらいになれば小遣いが欲しい。相変わらずケチな親に一計を案じた。我が家では欧米の製薬会社とかのトップを招いてしばしばパーティ

をやって、成功は情けないほど低かった。後からのぞき込むのが手取り早い。問題は内容のヒントはすべての答案が二枚出てくれば、アホの見本みたいなものだ。

甲南高等学校展

(旧制)甲南高等学校展

越田和男 11/20(土)

松本市にある旧制高等学校記念館(旧制松本高校跡)のギャラリーで「甲南高等学校展」が開かれています。山岳部関係では当時の写真数葉、北アルプス各地の初登攀のルート図、部報及び部内雑誌、田口二郎氏の著書などが展示されています。

開催は12月12日間迄です。おついでの折にどうぞご覧になって下さい。川野君は帰省の折に是非。

福井 グリン 11/27(土)

越田さん 暫らくでした。先日(11/24)帰京して掲示板で拝見しました。私も11/22に松本へ同クラスの永井君と、あがたの森の「旧制高校記念館」の展示を観覧に行ってきました。

展示室の記名簿に貴君の名前を拝見して、帰ったら連絡しようかとも、思っていたところでした。

ご報告の通りで、北アルプス登攀図に、小さな字の自分の名前を発見したり、浪高戦の夜のストームの写真に幼い自分の顔を発見したり、2時間近く丹念に観覧してきました。

毎年数回通ったのに、通り越していた「松本城」にも挨拶をし、スキーを置きっぱなしで、軍隊に行ってしまった「飯田屋旅館」を訪ねたものの、すっかり様変わりで、浦島の感でした。

週に一度はこの掲示板を拝見して皆さんのご様子を拝見しています、又集まりにはお誘い下さい。

大学、高校、現役の皆さんのご活躍を祈っております。

* * * * *

- 展示内容のご紹介 -

山 岳 部

大正12年(1923)尋常科2年生の香月慶太(昭5卒)の提案で誕生した遠足部が、大正14年(1925)山岳部と改称し発足した。

当時、近代スポーツとしての登山が神戸在住の

外国人によって伝えられ、ヨーロッパから輸入されたザイルやピッケルを備えた山登りが始まった。伊藤 愿(昭4卒)、壇 淳(昭4卒)、香月慶太がいち早く採り入れ、更に田口二郎(昭6卒)、田口二郎(昭8卒)、喜多又太郎(昭8卒)等によって、大正末期から昭和10年代に至る間、日本の近代アルピニズムの黎明より開花期に亘り、岩登りと積雪期登攀は幾多のバリエーションルートが記録された。前穂高北尾根奥又白側には今もなお「甲南ルート」の名が残り(写真に示した)、甲南山岳部会報は登山家から高い評価を得ている。

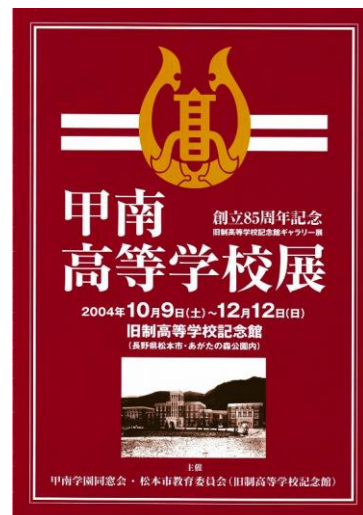
学園の創立者、平生イズムの自由闊達な校風と七年制の利点から山登りの技術習得が自ずと身に付き、また身近に芦屋ロックガーデン、六甲山の保塁岩、道場百丈岩があったことも幸いした。

その活動は、太平洋戦争中の一時期中断していたが、学制改革後も甲南大学に引き継がれ今日に至っている。

右上の写真は、ロックガーデンで、ピトン・カラビナの使用を練習している。

右下の写真は、故人となった部員を追悼して、1951年に芦屋ロックガーデンに建立した慰霊板である。

(写真は掲載省略しました 編集)



田口二郎(昭8卒)

昭和初期、鎌倉から魚崎に転居、父が「神戸歩こう会」のメンバーとなったため、毎週一緒に六

甲山へハイキング、冬は神鍋でスキーを覚え、甲南高校に入り本格的登山を始めた。甲南高校時代（1925—32）を回想し、山岳部の自由闊達な気風と共に、六甲山麓に深く愛着を持った。

六甲の山々の緑と共に、関東の火山灰による黒ずんだ土を見馴れた眼には、洗い出したような砂の色に仄かな郷愁を覚え、「甲南の山登りとは、六甲風景を青春の故郷の心象として共有している人の集まり」と述べている。

1931年北穂高第一尾根、1934年前穂高東壁（今も甲南ルートの名前が残る）など幾多の初登頂を遂げた。

1939年兄一郎と共に、スイスのグロースシュレックホルン北東壁の初登攀、1952年マナスル偵察

隊、1953年マナスル二次遠征隊に参加、1981年より4年間、日本山岳会副会長を勤め、山岳会に輝かしい足跡を印した。

また、実業界においては、在欧12年間の体験を生かし商社役員として堪能な英語、ドイツ語を駆使し、頻繁に世界各地に足を運び、鉄鋼貿易に貢献した。

文筆の才に富み、片言隻語は滋味に溢れ、折りにふれ、日本山岳会報に寄稿し、高い評価を受けた。

資料提供

酒井俊一氏（生物班OB 旧制24回理）

越田会員

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —

映 画 の ペ ー ジ

映画「コールドマウンテン」 越田和男 05/01

遅ればせながら先週末の総会、慰霊祭の御礼。武田会長をはじめ世話役の皆様には厚く御礼申し上げます。遠方からの参加の甲斐がありました。

ところで今評判の標題の映画良かったです。山の映画ではありませんが、小生好みの自然描写の映像のきれいな映画でした。時代背景は南北戦争下のノースカロライナ州はアパラチ山中の寒村です。当時の、多分いまでもそうですが、初期の入植者社会の、所謂 Poor White の雰囲気がよく出ています。

民俗音楽に興味のある方には、フィドル、バンジョー、マンドリンの編成＋ヴォーカルの Old Time Music が楽しめます。

映画「モーターサイクル・ダイアリーズ」

越田和男 11/05

たまには映画も観ましょう。

ロバート・レッドフォード製作総指揮になる若き日のチェ・ゲヴァラのバイク、徒歩、ヒッチハイク、アマ

ゾンズの船旅などによる南米大陸縦断の旅を感動的に描いた作品です。

アマゾン下りの場面では、かつて南里君がアマゾン紀行で見せてくれた写真の情景が再現されています。

関西でももうやっているとします。一見の価値あり。若い人にもお勧めです。

山岳ドキュメンタリー映画 雨宮宏光 02/23

原 題 Touching The Void “運命を分けたザイル”
上映館 シネリーブル 神戸 2月26日から

本 岩波書店 “死のクレバス”アンデス氷壁の
遭難 J・シンプソン著、文庫本です。

以前この本読んだとき怖かったです。著者のJ・シンプソンも出演してるそうです。

ペルーのシウラ・グランデの未踏西壁登攀の成功からの下山中墜落し、やむを得ず自らザイルを切断し 同行者の安否不明のまま 3日間飲まず食わずで生還した著者のザイル切断後の不安 恐怖 パートナーへの猜疑 凄まじい生への執着が映画ではどのように描かれてるのでしょうか。

運命を分けたザイル 大関和夫 03/02

スキーとシェフと湯治から帰り、2/21 この映画を見ました。1961 年春、雄さんとザイルを組み、2 人で杓子岳東壁ドリッジのブルーアイスの岩壁をアイゼンの先だけとアイスハーケンをたよりに登りつめた。頂上の雪庇が超えられず……

あの時の自分自身に置き換えながら観ました。山登りでは「加害者/被害者」という関係は存在しないということが分かります。ぜひ観てください。

運命を分けたザイル 越田和男 03/02

小生も昨日観ました。登攀場面はこれまで観たどの映画よりリアルなものでした。これまでのたいていの山岳映画でみられた見え見えのうそ臭い描写がすくなかったです。

私も見てきました。 柏 敏明 03/02

見たいなと思ひながら、ずるずると日が経っていましたが、昨日、関学の小西君から見たぞとのメールが入り、小生も今日、会社を抜け出して見てきました。梅田ロフトの地下にあるテアトル梅田で見たのですが、200 人弱入る映画館で、平日の昼なのに9割の入り、その内の8割が中高年の女性でした。確かに水曜日は女性の日とかで割安ですが、ゆっくりと見れると思っていたのにびっくりしました。

映画は、先輩達を書かれているように、無駄な描写がないだけ迫力があり、ドキュメンタリータッチで、生への執着が描かれており、思わず引き込まれてしまいました。実話だそうです、世の中、凄い人間がいるものです。3月18日までやっているそうで、おす

すめの映画です。

「運命を分けたザイル」 山本恵昭 03/11

「運命を分けたザイル」を見てきました。なかなかリアルな映像で臨場感がありました。昔、ペルーのワスカランで、クレバスに引っかかったブロックの上を渡ったり、氷のトンネルをくぐり抜けてセラック帯を越えたことを思い出しました。単独だったので全くのノーザイル。若気の至りで、今から思うとずいぶん危なっかしい山登りをしていたものです。

運命を分けたザイル 福田信三 03/17

”運命を分けたザイル”今日小生も観ました。あんなことがこの世の中にあるのだなあと、感激しました。”あきらめるな”を絵に描いたようなもので。場面がたまたま山だった、と言うことでしょう。ジョーがクレバスの中から這い上がって、キャンプ地まで這いつくばってたどり着く様(キザに聞こえるかもしれませんが、小生はカトリック信徒なので謝!!)キリストが十字架を背負って、ゴルゴダの丘へ上って行った状況を思い浮かべていました。最高のハッピーエンドでした。

ついでに、アドバイス、梅田テアトルで観ようと思っておられる方へ、昼飯はすぐそばの阪急インターナショナルホテルの1階のロビーレストランでオムレツ。お勧めです。タマゴ料理の良し悪しはシェフの良し悪しです。

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —

ネパール西濱

神戸君 西濱 07/26

ネパールより西濱です。

神戸君のお陰で、(関学)高田先輩との楽しいカトマンズ生活を送っています。関大の奥田先輩もこち

らに在住です。こちらと言えば、モンスーンに入って毎日雨雨雨……

近郊の自然壁「ナガルジュン」も蛭がラーメンのように出てきて、モンスーン明けの9月までお預け！人工壁もありますが、昨年1年間メンバーだった為、もう飽きちゃいました。

それにしても、一年間ネパールに居るのに、山へ

は一度も行けません。この国って休みが異常に少ないんです。こんなはずじゃなかった！

雪触りたいです、はい。

祝！復活 **西濱** 07/26

きやーきやーきやー！

実は我山岳部に部員さんが来てたのですね。こんなにメデタイことは無いじゃないですかっ！ああ、こんな事なら先日研修で2週間日本へ帰っていたのですが、無理してでも部室にマーキングしておけばよかったです。とは言っても、毎晩11時まで残って、土日に必要物資の買出しで時間が無かったのですが。

新しく入った部員の皆さん！山と言えばネパールですよ！現地のお姉ちゃんも綺麗し、山も素晴らしい！いつかネパールに来て下さい。6000m台の山

ならカトマンズからでしたら6万円位で、行けると思います。

調査要請あれば、甲南山岳部員の為なら即調査に入ります。因みに、カトマンズからチベット側からのエベレストへ許可とBCまでの交通費で120万円位だそうです(要調査)。何てうれしい事なのでしょう。これからも、頑張って下さい。

西浜さん **神戸謙司** 08/05

西浜さん・高田さん・奥田さんのネパールライフどんななんでしょうか？現役当時の真砂沢ライフに近いものを想像してしまいます。まさか山に行くなんてことはあるのかな！！？

皆様によろしく。

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —

「ネパール通信」 西濱会員（大H4理）のホームページ

「ネパール・カトマンズでの生活をウダウダと書き綴」ったブログ。

ある日の話題をご紹介します

マウンテンバイクレース参加

ネパール / 2005年06月05日

久しぶりにマウンテンバイクのレースに出場！

17kmのなだらかな登り主体のコースで全て林道。100人超える参加者ありで参加費50Rs（激安！）。

バクタプールからカシバンジャンって場所までのルートで、バクタプール市街内は鼓笛隊と一緒にパレードしました。順位は14位で、なーんも練習せずにこの順位はマアマアでしょう！

(<http://blog.goo.ne.jp/cae36940>

「ネパール通信」で検索できます)



ホームページに部歌が流れます

部歌”山の歌”を聴けるようにしました。クリックしてみてください。パソコンの環境/インストールされているソフトによっては聞けないかも？

塩 崎

最近オドロイタ事

武田雄三

甲南学園創立85周年記念行事で製作された甲南学園寮歌第二集CDを購入して

1) 我らが部歌＝「山の歌」が収録されています。

以前より平井センキチ氏の指摘により、テンポが違っている事は認識していました。楽譜通りに歌われた節は（甲陵会合唱団有志＝甲南大学グリークラブOB）4節の部分が大幅に違っています。小生は現在歌い継がれている節の方がスキです。聞かれた方は感想をオネガイシマス。

2) 大先輩「伊藤 愿」氏の異才ぶり

第二集収録全八曲の内、「山の歌」以外にゲンさん作詩の曲「甲南高等学校野球部応援歌」、「甲南高等学校ラグビー部部歌」の二曲が出ています。

3) 香月・徳末両先輩の功労

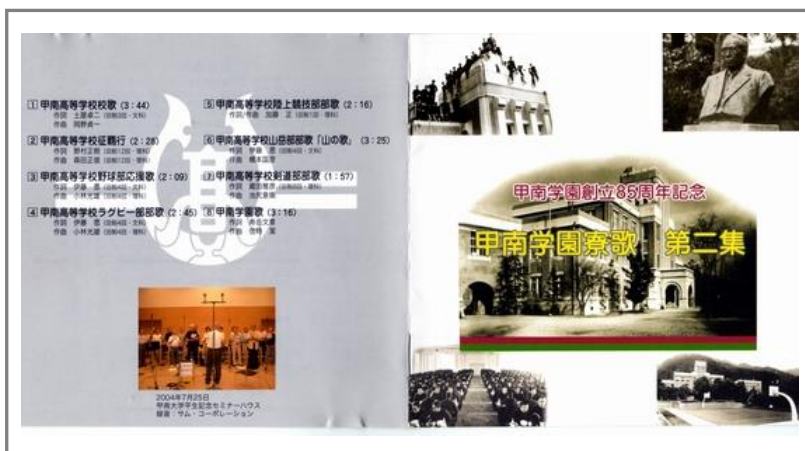
昭和42年3月刊行『旧制甲南高等学校歌曲集』の取り纏めに両先輩が中心的役割を担われていることを知り、改めて山岳部先輩諸氏を誇りに思いました。

ホームページの部歌

大森雅宏

塩崎 Web マスター、部歌が流れて面白いですね。いろんなことができるんやーという感じ。

HPではあまり感じませんでしたが、オリジナルCDで聞くと、2番3番で左右のバランスが時々崩れます。歌った方（仕事の関係で時々お会いします。県立西宮高校の山岳部から甲南のグリー）にお尋ねすると、「練習は1番が中心。本番で初めて2番3番見るヤツもおるやろ、歌詞間違えるがな。何本もマイク立ててる中から、間違えた音をミキサーが苦勞して消してくれてんねん」と言うお答え。それぞれにご苦勞が・・・。



— 甲南高校山岳部夏山合宿報告 —

2004年度 夏山合宿報告

北アルプス 剣岳 別山尾根から剣岳往復

参加者 主将・記録 高3 神澤太一

食料・記録 高2 長宅智行

装備・記録 高2

村上恭央
司

教員 神戸謙

行動記録

7月27日(火)(晴れ) 入山 雷鳥沢まで

7:45 甲南高校集合—8:12 出発—12:00 尼御前着
昼食—14:30 立山駅着—15:50 ケーブル出発—
16:49 室堂着—17:05 室堂出発—17:46 雷鳥沢テン
ト場着—18:30 夕食(ご飯・コンビーフシチュー・
もずくスープ・スポドリ)—21:00 消灯・就寝

かんかん照りの中、立山駅に到着し身支度を整える。室堂に到着したときには、日帰りのお客さんたちがそろそろ下山にかかることで、涼しい立山が雲に隠れたり見えたりしていた。中2のときに立山登山で雷鳥沢を訪れたことのある神澤は、地獄谷からミクリガイケ温泉までの、あの長い石段はうんざり・・・ということで、ミクリガ池を回り、雷鳥荘の前に出るコースをたどった。そうそう、4年前は松成君と奥様に、雷鳥沢でお会いしました。テント設営後、早速食当にかかる。コンビーフシチューともずくスープは絶品であった。

7月28日(水)(晴れ) 雷鳥沢より剣沢

4:50 起床・朝食(ラーメン・お茶)—6:50 出発
9:10 別山乗越—9:35 別山乗越出発—10:24 剣沢キ
ャンプ場着、設営後昼寝—14:00 剣沢小屋裏から、
真砂尾根に登る—15:20 夕食(鳥釜飯・豚汁・わか
めスープ・カルピス)—17:56 夕食終了後、神澤の
18歳の誕生日を祝う—20:45 消灯・就寝

起床から、出発までにかかる時間がずいぶんと早くなった。また、別山乗越までの雷鳥沢の登りもよくがんばった。長宅が途中腰とひざの痛みを

訴えたが、よくがんばりとおした。剣沢には思いのほか早く到着した。先日の福井の豪雨のときに、こちらにも雨が多かったということで、雪渓はほとんど解けていた。真砂沢キャンプ場まで、いく考えは昨日のうちに消えていたので、時間は早いがテントをたてて、しばし昼寝した。暑かった。目覚めて、剣沢小屋の裏から、ブッシュをこいで真砂尾根に登り、絶景を楽しむ。

この日の夕食、豚汁と釜飯も絶品であった。夕食後、18歳に成りたくない神澤のバースデーパーティーとトランプ占いで日は暮れた。



7月29日(木)(晴れのち曇り)

剣沢より別山尾根をへて、剣岳往復

5:00 起床・朝食(ラーメン・お茶)—6:35 出発—
7:08 剣山荘—8:35 前剣—8:50 出発—9:30 平蔵の
コルでストックをデボ—10:45 剣岳頂上—11:15 出
発—12:20 平蔵の避難小屋—13:06 平蔵のコルでデ
ボ回収—14:50 剣山荘—15:40 剣沢のテン場—
16:00 夕食(ご飯・カレー・たまごスープ・スポド
リ・プリン)—20:45 消灯・就寝

晴れていても、山に時々雲がかかる。準備体操をして出発する。前剣の登りは相変わらずきつい。前剣で一休みしていると、時折晴れ間が覗いて、一同喜びにわく。お日様って素敵だ。平蔵のコルで、ピッケル代わりに持ってきたストックをデボジットし、頂上に向かう鎖場、かこのタテバイをいく。こんなが、一般道だなんて、ちょっとかわいそうだ。景色の望めない頂上につき、祠の前

で記念撮影。2998mの頂上で、ねずみ君に出会った。そんなに食料が豊富なのだろうか？見渡すと残念ながら、ごみがよく残っている。

30分近く休憩していたが、晴れ間の見える前兆はなく、下山にかかることにした。慎重にかにのヨコバイを通過し、平蔵の避難小屋まで下る。いまはトイレとなっているが、部員たちは小屋が好きだ。靴擦れをあらかじめ処置していた村上も、よいペースで下っていく。前剣を下ったところで、神澤トップで歩き出す。以後、神澤トップでいく。

長宅・村上は食当、私はプリンを作り、剣沢の雪溪に埋めに行く。この日のカレーも絶品であった。食後、部員たちは恋占いに夢中であった。



7月30日（金）（晴れのち曇り一時雨）

下山日 剣沢より室堂、大阪へ

5:00 起床・朝食（ラーメン・お茶）—6:10 朝食終わり・撤収—7:38 撤収完了・出発—8:18 別山乗越—9:00 出発—10:50 雷鳥沢キャンプ場—11:00 雷鳥沢ヒュッテで、風呂につかる—12:44 出発—13:05 室堂着、雨が降り出す—14:30 美女平—15:05 立山駅—16:00 富山駅—17:59 出発—21:26 大阪着・解散

もう少しはや立ちするはずであったが、寝坊する。午後から、雨との予想。早く別山乗越につき、このまま下るのはもったいなかったの、別山方面の尾根に上がり、剣・立山の絶景、遠くの薬師岳と白山を、眼下に広がる雷鳥沢のみどりを眺め休息する。雷鳥沢のつづら折れを下っていくと、珍しく雷鳥と雛鳥たちが登山道にいた。雷鳥沢ヒ

ュッテで風呂につかり、さっぱりとして室堂に向かう頃、雨がぽつぽつやってきた。地獄谷からミクリガイケ温泉に向かう、あの長い石段を登り、室道に到着した。

部員紀行文

高3D 神澤 太一

初日、車で富山入り。スムーズでよかった。雷鳥沢泊。二日目、テント場～剣御前小屋～剣沢テント場。台風が近づいていたせいで変更。なかなか贅沢な一日だった。個人的に誕生日。三日目、剣沢⇄劔岳。強風。今迄で一番楽しかった山。カニの横這いがとても面白かった。娘の誕生日。四日目、下山。ライチョウがやってきた。温泉がとてもよかった。総評としては、一瞬として、疲れたと感じることもなく、終始余裕を持ってのぞめたということがある。慣れた、ということらしいが、言い換えれば五年間の時間の集積が表れた、ということだから。まがいなりにも、それなりにまじめに取り組めば、結果はついてくるのだなとしみじみ感じた。

高2A 長宅 智行

この合宿は、今迄で一番つらかった。というのも、持病の腰痛の状態が直前になって悪くなったからだ。その影響からか、股関節とふくらはぎも移動中に痛くなった。そんなつらい状況の中、劔岳に登った。去年の槍ヶ岳以上に陰しく、岩場や鎖を使うところも多く、下りのときはひざに痛みが走った。頂上ではガスが広がり景色が見れなくて残念だったが、登りきれてよかった。早く腰を治して、鍛えて今度はどこも痛くならないようにし、まわりのメンバーに迷惑をかけないようにしたい。また、部長なので精神面も強くしたい。P. S. 富山はいい所だ。久々の女の子もなかなかで、先生にいただいたお菓子はめちゃくちゃ旨かった。

高2A 村上 恭央

「つるぎ」

僕が一番心に残っている日は劔岳に昇った三

日目のことです。その日はなんとなく天気が悪くて、ガスが山にかかっていた。なんか去年は少し森があったのに今年は岩をずっと登っている感じでかなり疲れました。危ない鎖場があったけど僕はけっこう楽しめました。ぶっちゃけ山登りよりも岩登りのほうが好きです。頂上につくと周りは真っ白に曇っていてなかなか最悪な景色でした。あんな高いところにネズミがいたのにはビックリしました。

四日目は下山日でした。下山パワーでがんばって下っていると途中雷鳥にバッタリ出会いました。何枚か写真を撮らせてもらい、家につれ

て帰りたい衝動にかられましたがサヨナラを告げ再び下りました。やっとのことで下界につくとめちゃくちゃ暑かったです。JR富山駅には女学生たちがあふれ、大阪と違いギャル系が多かったです。久々に目の保養ができました。この日一日の一番のおどろきは、エスカレーターで左に並んで右のほうを空けるということです。文化の違いというものを体で感じました。

まあ、岩だらけでしんどかったけどいい合宿でした！天気が晴れればよかったのになあ・・・

甲南山岳部 Vol. 3

(練習記録ノート) より

9月9日(木) ストレッチ×2、ランニング1週、腕10×2、腹50×2、背50×2、カーフレイズ50×1＝村上・長宅はドクターストップ
9月13日(月) ストレッチ×2、腕10×2、腹30×2、背50×2、カーフレイズ50×1、ランニングは

中止(二人とも腰痛のため)＝長宅、神澤・村上は塾
9月16日(木) ストレッチ×2、腕20×2、腹30×2、背30×2、カーフレイズ50×1、ランニング中止(体育で200メートル走って足痛いので)＝長宅、村上、神澤
9月27日(月) ストレッチ×2、腕20×2、腹30×2、背30×2、カーフレイズ50×1、ランニング×1＝長宅、村上

9月30日(木) ストレッチ×2、腕20×2、腹30×2、背30×2、カーフレイズ50×1、ランニング新コース(1周5分)×3＝長宅、村上
10月4日(月) ストレッチ×2、腕20×2、腹20×1、背30×1、カーフレイズ50×1、ランニング新コース×7、空気椅子30秒～1分＝長宅・村上は塾

甲南山岳部ホームページのご案内

インターネットで甲南山岳部のホームページをご覧になったことがありますか？

ホームページの「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

「アルバム」では会員の山行の様子や街での姿が見て取れます。懐かしい写真も寄せられます。

アドレスは

<http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/>

何やら長い面倒な、と言う方は「甲南山岳部」「甲南大学山岳部」で検索して下さい。

よくわからないあという方は、ご家族・お孫さんにお尋ねになるのも方法です。

新しいコミュニケーションが広がるかもしれません。

－ 他誌に見るKAC －

「追悼」 日本山岳会「山岳」Vol.99/2004

香月慶太氏（1910～2003）

七年制の甲南高等学校の発足間もない大正十二年（1923年）の春、当時尋常科（中学に相当）二年生、紅顔の美少年香月慶太さんが全校生の集る校友会総会で挙手、「遠足部を作ってはどうですか」と発言されたのがきっかけで遠足部が発足し、これが2年後に山岳部と改称され以後甲南高校、甲南大学山岳部の八十年の歩みに繋がった。

さて、遠足部は何をすべきか。やがて檀淳さんなる盟友を得て、目標とすべきはロック・クライミングを中心にした科学的登山の考究である、と意気投合し、当時RCCの人達によって紹介された、学校近くの芦屋のロック・ガーデンに通い始めたところで懸念されていた守旧派上級生の強い抵抗にあう。綱を使って軽業師の真似をするなど邪道であり、上級生を無視した行動は許し難いとして、ロック・クライミングのみならず近代登山の理論武装に走った香月さん達は遂に鉄拳制裁に遭う。しかし、殴られても懲りずに勝手にザイルなどを購入しロック・ガーデンに通いつめる二人に下級生の同調者が増え始めた。安井博彬、井上正憲、水野健次郎（後の美津濃社長）、といった人達だった。そのような雰囲気の中で大正十四年（1925年）に遠足部は山岳部と改称され、翌十五年には山岳部の方向を更に決定づけることになる人達の入部を迎える。同志社中学から甲南の高等科へ進んだ伊藤愿さんや西村格也さん（共に京大進学後も山で活躍、愿さんは後に日本山岳会理事も務めた）で、尋常科の香月さん達と初めての北アルプス行きを果たすや、先鋭的な山登りへと傾斜して行った。

ロック・ガーデンでの岩登りを中心にした山岳部の平素の活動は人気の的となり、「ザイルパーティが十組位になって岩場はどこを見ても甲南のメンバーばかりが取り付いていた。部長の伏見教授も、配属将校の田村中佐も、ドイツ語のフッパーストラー講師も部員とアンザイレンして行動を共にされた」（香月氏）と表現されるほどの活況を呈し、実際、全校五百人にも満たぬ生徒数の当時に山岳部員がその一割を超え一時は八十名にも膨れ上がったという。数年後に穂高、後立山、剣などで数々のヴァリエーション・ルートの初登攀をやったのけた高校生クライマーがその中から育っていったのだった。後に欧州アルプスやヒマラヤでも活躍した田口一郎、二郎（後のマナスル隊員、日本山岳会副会長）兄弟らは香月さんのすぐあとの学年でザイルを共にした仲であり、伊藤新一、収二、文三さん兄弟は香月さんを兄貴分として育った世代だ。

香月さん自身の甲南時代のハイライトは高校二年の春（昭和四年）の上高地生活だったのでなかろうか。岩登りとスキーでトレーニングを積んだ当然の行き先が北アルプスの積雪期登山で、この時は伊藤愿さん達と念願の槍と前穂に感激の登頂を果たされた。

昭和五年（1930年）、甲南高校卒業後地元に残った香月さんは、当時田中伸三氏ら先鋭登山家の活躍する神戸商大（現神戸大学）山岳部へと進んだ。山岳部OB会としてこの年に発足した甲南山岳会の会長に就任、以後実に六十年の永きわたり会長を務め、息子の世代、孫の世代に至る後進の指導に尽力された。現役山岳部の合宿中必ず近所の神社に詣でられ、自宅では朝夕その無事を祈願されていたとの逸話がある。また、神戸大学山岳会のOBとしても、戦後の学制改革時の合併による蛸足状態の大学のそれぞれのOBを一本化する段階で指導的な役割を演じられた（「偲ぶ会」で平井一正神戸大学名誉教授の発言）。

実社会においては超多忙な三井物産の要職にありながら、山関係の交遊も広げられている。筆者はかつて三田幸夫さんや折井健一さんが再三「甲南の香月さんはお元気ですか」と声を掛けていただき、ビジネスマン香月さんの温厚な紳士像を語られたのを思い出す。

平成十二年の春、車椅子で甲南山岳会の総会に出席されたのが最後となり、翌々年二月に九十二歳の生涯を終えられた。その前年に出された機関誌「山嶽寮」の甲南山岳部創立七十五周年記念号が柩に納められ、生前愛唱された山岳部の部歌「黎明の御空に聳ゆる峯は瓔珞纏う久遠の姿・・・」(伊藤愿作詞)で後輩達が見送った。

近年部員減少に悩んでいた甲南大学山岳部は、その産みの親育ての親の香月さんの亡くなられたその年に遂に在籍部員がゼロとなり、ひとつの時代の終わりが告げられたかに見えたが、今年に入り若手OB諸兄の尽力により数名の新入部員を迎え、山岳部再生の道が開けつつあることを先ずは香月さんのご霊前に報告したい。

(香月慶太氏は1981年日本山岳会入会。会員番号8910 紹介者田口二郎・越田和男)

越田和男

執筆経緯: 日本山岳会の年報「山岳」第99年(2004)への執筆の勧めが関西支部長・阿部和行氏より甲南山岳会宛て届き、日本山岳会会員との関わりなどを加味するようにとの要望もありましたので、その線に沿った内容となっています。ご了解下さい。 越田

会報ノート 「岳人」2005年2月号(通巻692号)

甲南山岳部・甲南山岳会 「山嶽寮」 59号 B5判 86ページ

70数年の歴史を刻み、今なお世界の山岳を舞台に盛んな活動が続ける甲南山岳部・会の機関誌。4兄弟が2組とか、親子孫3世代の山の仲間が、この山嶽寮に集い、連綿と存立する山岳団体である。

本書には、甲南時代当時未踏の前穂東壁ABCフェイス、劔尾根ドーム、杓子岳東壁D尾根などに足跡を残すなど、活躍した同会長老のフクデンさんこと福田泰次氏の訃報に寄せての記事。また昭和初期旧制甲南高校、京都帝大時代に登山界の第一線で活躍し初登、初縦走など数々の記録を残し夭折した伊藤愿氏についての話が取り上げられる。

海外での体験紀行は「紀行 ワハーン回廊 2004」「ブータン紀行」「ノアの箱舟伝説の山 アララットへ」「驢馬」の4編。それぞれ興味深い内容で楽しめる。国情や国による人間性などが伝わってきて参考になる。

他に「会員短信」「物故会員 ご遺族からのお便り」「慰霊祭」「ホームページから 黒部五郎スキーツアー」「掲示板書き込みダイジェスト 山行とつどい」、そして巻末に「現役だより」(合宿や山行報告)ほかが収録してある。

－ 現 役 だ よ り －

大 学

2005 年 4 月からの現役メンバー

主将 森本寛之 理工学部物理学科 (3)
 主務 谷 勇輝 理工学部物理学科 (2)
 マネージャー
 藤本貴大 法学部法学科 (3)
 体育会本部員
 江田和則 文学部歴史文学科 (1)
 記録 神澤太一 文学部人間科学科 (1)

2005 年度は 2 人の新入生にも恵まれ、3 学年が揃い、山岳部を安定軌道にのせることに、一歩近づけたと実感している。しかし、主力である谷の負傷は少人数の山岳部にとってとても大きなダメージとなっている。これからの山岳部も幾多の困難があるか分からない。しかし、数々の苦難の峠を乗り越えることこそが山岳部の使命であり、また山岳部の原点である。これからも一歩ずつ復活に向け、そして高みを目指して精進してゆきます。 主将 森本寛之

2004 年度合宿

秋合宿 比良山

森本寛之 (理 2) 谷 勇輝 (理 1)
 11 月 2 日 部室～北小松駅泊
 3 日 ～釈迦岳～武奈ヶ岳
 4 日 ～蓬萊山～志賀駅～部室

冬合宿 白馬乗鞍岳

森本寛之 (理 2) 谷 勇輝 (理 1)
 大森雅宏 (OB) 山本恵昭 (OB)
 12 月 24 日 部室～大阪駅
 25 日 白馬大池駅～スキー場上部
 26 日 ～自然園～天狗原
 27 日 停滞
 28 日 ～白馬乗鞍岳～天狗原
 ～下山

春合宿 槍ヶ岳 (途中撤退)

森本寛之 (理 2) 谷 勇輝 (理 1)
 3 月 16 日 大阪駅～新穂高温泉
 17 日 ～白出小屋～滝谷小屋
 18 日 ～奥丸山～千丈沢乗越
 19 日 ～奥丸山～穂高平小屋
 20 日 ～新穂高温泉解散

大学山岳部のホームページ

<http://www.club.konan-u.ac.jp/~alpine/>

山岳会ページからもリンクしています

高 校

山岳部部員・顧問

主将： 山内寛之 (高 3E)
 主務： 神澤太一 (高 3D)
 記録： 北川祐也 (高 3A)
 食料・主将： 長宅智之 (高 2A)
 装備・主務： 村上恭央 (高 2A)
 記録： 池上弘倫 (高 2C)
 顧問： 南里章二 神戸謙司

山行一覧

夏合宿 北アルプス 8 月
 別山沢～剣岳 (登頂)
 日帰り 六甲登山 11 月 (登頂)
 春合宿 氷ノ山東尾根～氷ノ山
 4 月 (敗退)

練習

芦屋霊園内のランニング・腹筋・背筋・腕立て伏せ・ハーフスクワット・フルスクワットなどを取り混ぜた練習を、月・水・木の週に3回行った。

9月よりは、幹部交代(山内からCL長宅)により練習日は月・木・金となる。

主力であった高3から高2へクラブ運営、練習計画が移行したが、まずまず良くがんばった。さすがに、10月頃は高3の練習参加が望めなく、高2もさびしい思いをしていたが、神澤がたびたび練習に来てくれた。神澤の応援に感謝する。11月にはブラバンを引退した池上が登ってみたいということで入部する。少しずつ練習回数も増え、春合宿に備えたが、まだ走りこみは足りないようだ。

神戸記

2004年度 山行報告

夏山合宿報告

－ ホームページ関連に掲載 －

春山合宿報告

氷ノ山 東尾根より氷ノ山、東尾根下山

主将・装備 高2A 長宅智行
主務・食料 高2A 村上恭央
H17卒 OB 山内寛之
教員 神戸謙司

行動記録

4月 1日(金)(晴れ・スギ花粉多し) 入山日
東尾根取り付きまで

9:51 甲南高校出発－14:14 氷ノ山国際スキー場着
－14:40 出発－16:21 東尾根取り付き＝T.S着－

17:30 水を11リットル程度作り終える－19:40 食事終了釜飯・スープ・茶・ココア－20:30 就寝

氷ノ山国際スキー場より、スキーを履き、歩き始める。3月いっぱいまでスキー場の営業は終わっていたが、今年はたつぷりと雪が残っている。フル装備を担いで、慣れないスキーに苦勞するが、がむしゃらの山内はカモシカの足跡について、のぼる、のぼる。おーい、どこまで行くんや？杉木立に囲まれた、東尾根の取り付きにテントを張ることにする。が、スギ花粉ひどく、恐るべしであった。

4月 2日(土)(曇りのち雨)

東尾根取り付き付近でのスキー練習・下山

4:50 起床－5:20 食事準備開始－6:40 食事終了－
7:30 スキー練習－11:10 食事準備開始－14:30 食事終了－15:10 テント撤収完了－16:05 氷ノ山国際スキー場着－17:10 万灯の湯－21:30 JR芦屋着

本日予定では、氷ノ山にアタックをする予定であったが、天候芳しくなく、村上、山内は花粉症に悩まされ、長宅は腰痛を訴えたので、登らずにスキーをすることにする。村上はまったくスキーは始めてであった。テント場の前に緩やかな斜面が広がっていたので、そこで何度も登下降を繰り返して、スキー練習をする。空はうす曇であり、うっすらと太陽が透けて見える。11時に切り上げて、本日分の晩飯カレーを作る。風が強くなり、カレーがなかなか炊けなくて苦勞したようであったが、時間をかけたカレーは大変うまいものであった。何とか雨の振り出す前に、撤収完了し、氷ノ山国際スキー場に着く。

編集後記

山嶽寮の編集をお手伝いして4号になります。折に触れ「こうしたらいいよ」とか「あれ面白いな」などとお声をいただくのは有難いことです。曰く、

「この記事、使う?・・・」

廣瀬さんと前編集長柏さんから。日本山岳会「山岳」の香月さん追悼

ご執筆越田さんをお願いして原稿をいただきました。原文は縦書きですが都合で横書きでご紹介しました。

生物班OB酒井俊一氏(旧24)からは美田さん経由で甲南高校展資料をいただきました。

学生時代の寄せ書きが出てきたからコピー送ったよ、などのご協力をいただいたケースもあります。使える日まで保管しておきます。私の代で使わなくても次に送ります。

「この頃カットが少ないのと違う?・・・」

前編集長からのご意見。印刷原稿のレイアウトはセクションごとに行数・文字数を変更できますし、写真でスペースを調整するなど余白が出ないような設定にしていまいがちです。文字ばかりでは暑苦しくなりますので適当にカットを入れるように心がけます。

「書き込みダイジェスト、面白いね・・・」

前々編集長南里さんのご感想です。これはもう皆様のおかげです。原稿依頼されると書きにくいけれど、日々の出来事に感想を書き込んだり山行の様子を知らせたり、なんてことなら気楽に出来るワ、と言うことでしょうね。書き込みから要素を拾い集めて山行一覧を作ろうかと思ったこともありましたが、ナマのほうが温かみがあって、関係するものをほぼ原文で転載しています。山行とつどい以外に「これもいいな」が沢山あってついついページが増えます。

「記事まちごうとで・・・」

細かな間違いはケセラセラですが、時にはえっと思うこともあります。前号の慰霊祭報告、ご参加に廣瀬さんが入っていませんでした。お詫びして訂正(追加)いたします。

事務局井上さんやお世話のメンバーから原稿がまわってくる以外は、編集が集合写真やらスナップの物的証拠とこの頃怪しくなった記憶で対応しています。もれの出ないように集合写真は必ず顔が写る位置に立つ、参加したときは目立つ行動をとるなどご協力を。(ここは冗談です・ウチまじめな人多いから・・・)

これからもご意見お待ちしております。原稿はもっとお待ちしています。

原稿宛先 山嶽寮編集担当

大森雅宏

電話/ファクシミリ (

Eメール

)

山 嶽 寮 第60号

発行 2005年(平成17年)10月

編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷

